山家地区史跡整備調查報告I

筑紫野市文化財調查報告書 第65集



2001年3月

筑紫野市教育委員会

山家地区史跡整備調查報告I

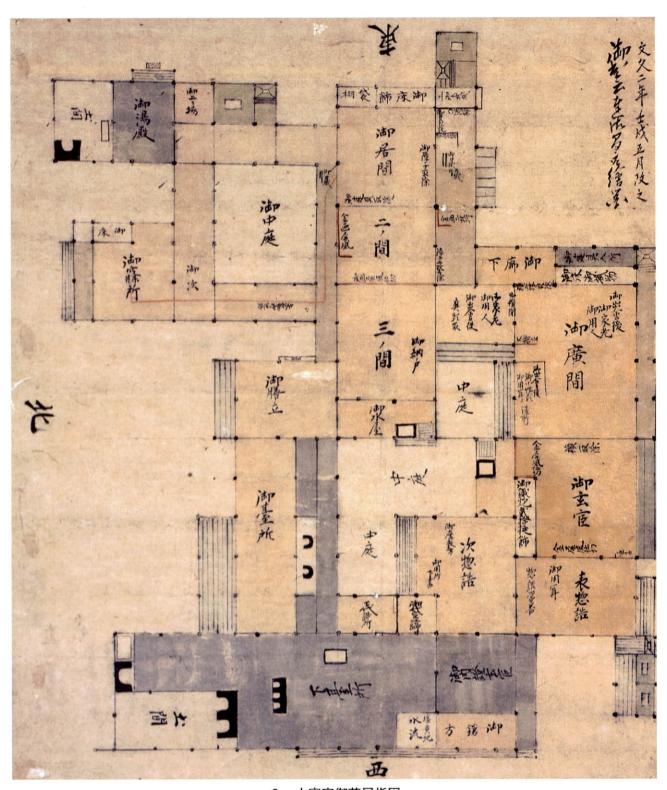
筑紫野市文化財調査報告書 第65集

2001年3月

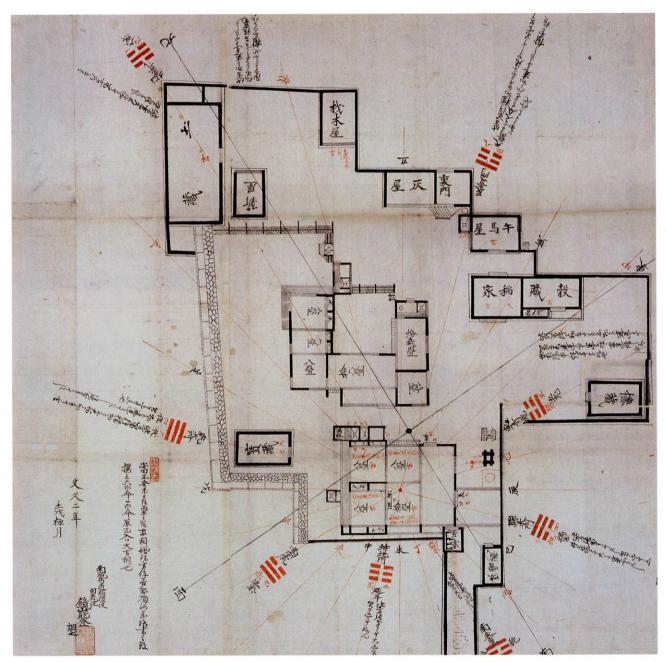
筑紫野市教育委員会



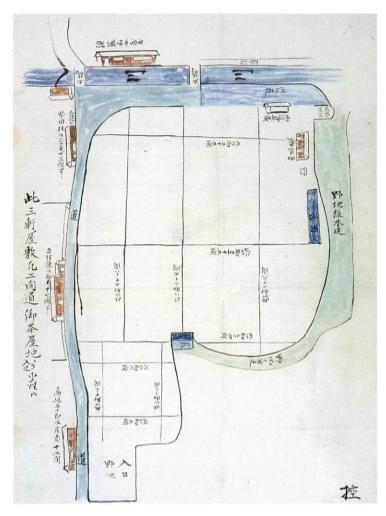
1. 筑前名所図絵 山家部分



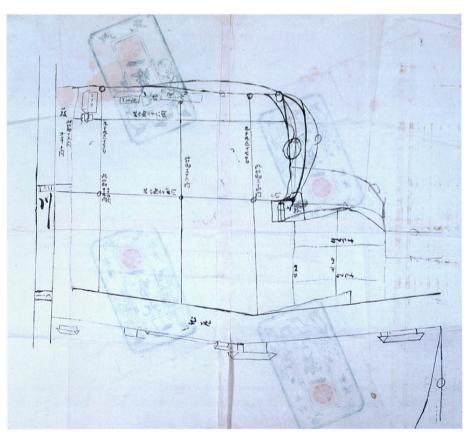
2. 山家宿御茶屋指図



3. 郡屋跡指図



4. 御茶屋野取図(控)



5. 御茶屋野取図



6. 構口現況写真



7. 郡屋土蔵修理前写真

例 言

- 1 この報告書は、筑紫野市山家宿の景観保存・環境整備に関する筑紫野市 文化財保存事業の一部として刊行されたものである。
- 2 編集に当たっては、平成5年度以降の工事の概要のほか、工事中の調査 事項、発見物及び建物に関する各種参考資料と、山家宿が旧長崎街道筑前 山家宿に該当するためにその歴史的概要や関連資料等をも掲載した。
- 3 建造物の図面及び写真については、工事中作製または撮影した多数のうちから、図面については記録保存図(原図は筑紫野市教育委員会社会教育課に提出、同課保存)と、その他の説明図を、写真については修理前後並びに工事中の記録と各種資料写真の重要なものを掲載することにした。
- 4 本文、図面共表示寸法は「メートル」法によったが、必要に応じて「尺寸」を併記した。図中の寸法単位はミリメートル。
- 5 本書の編集及び担当は下記による。

編集

筑紫野市教育委員会社会教育課 草場 啓一 九州産業大学工学部建築学科建築史研究室

監修

九州産業大学工学部建築学科教授 工学博士·一級建築士 佐藤 正彦 本文執筆

I 福岡県地方史研究会会長 近藤 典二

Ⅱ 筑紫野市教育委員会 奥村 俊久

Ⅲ、N 前出 佐藤 正彦

図面作製 九州産業大学工学部建築学科建築史研究室

平成3年度

荒賀 伸(大学院)・足達正典・大和隆幸・奥田尚典・郡司嶋美樹・ 古村栄次・西本卓司

平成5年度

中村 忍・金子孝一・中山秀樹・永田裕二・永利啓次・長原隆雄・

益永 通・三品幸英・山田達也・山根 仁・古賀修一

平成6年度

太田直宏・古賀大介・田中重信・長田之宏・野口東吾・野見山貴洋・

三留陽佳・百田一也・森崎文雄・谷川善則・出村康博

平成9年度

金城 孝·新城博靖·松邑 恒·重本恭枝·新城(旧姓 長森)雪子· 井手上貴宏·伊藤泰宣·平野政史

平成10年度

相原洋平・岡野宏司・川野 工・金城祥史・鴻上崇史・古賀輝則・

甲村博司・古賀 亮・山下孝幸・山下友仁・金子陽一・与那覇正範

平成11年度

中島 博・廣田尚子・福田光洋・松本大輔・岡崎健治・中野良紀・

橋本美紀・東島 隆・諸岡友里・海野久美子・谷口月美

平成12年度

下条幸紀

発掘·礎石図作製 筑紫野市教育委員会 写真撮影

修理前 前出 佐藤 正彦

筑紫野市教育委員会社会教育課

竣工 前出 佐藤 正彦

 工事中
 前出
 佐藤
 正彦

 発掘
 前出
 佐藤
 正彦

口絵目次

- 1. 筑前名所図絵(文政4年)
- 2. 山家宿御茶屋指図(文久2年)
- 3. 郡屋跡指図(文久2年)
- 4. 御茶屋野取図(控)
- 5. 御茶屋野取図
- 6. 構口現況写真
- 7. 郡屋土蔵修理前写真

挿 図

- 1. 山家宿跡位置図
- 2. 山家宿跡現況図

本文目次

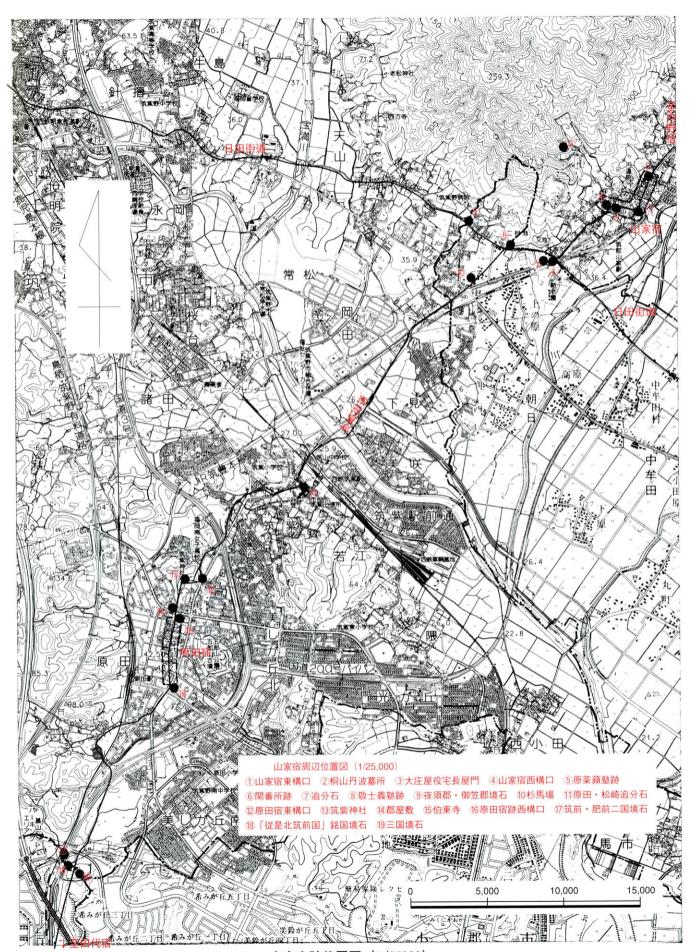
I 山家	で宿の概要
I - 1	山家宿の設置
I - 2	山家宿の構造と機能
I - 3	宿駅の廃止と郵便制度の開始
Ⅱ 山家	『宿史跡整備の取り組み
Ⅲ 山家	『宿史跡整備に伴う調査······· 5
Ⅲ-1	大庄屋長屋門
Ⅲ - 2	下代屋敷30
I II - 3	郡屋跡灰屋と裏門45
Ⅲ - 4	郡屋跡穀蔵
Ⅲ - 5	郡屋跡宝蔵62
Ⅲ-6	西構口と土塀72
Ⅲ - 7	郡屋跡土蔵75
IV 山家	民宿史跡整備工事
IV - 1	郡屋跡灰屋と裏門82
I V - 2	郡屋跡土蔵
IV - 3	西構回と土塀90
会 老 立	位

図 面 目 次

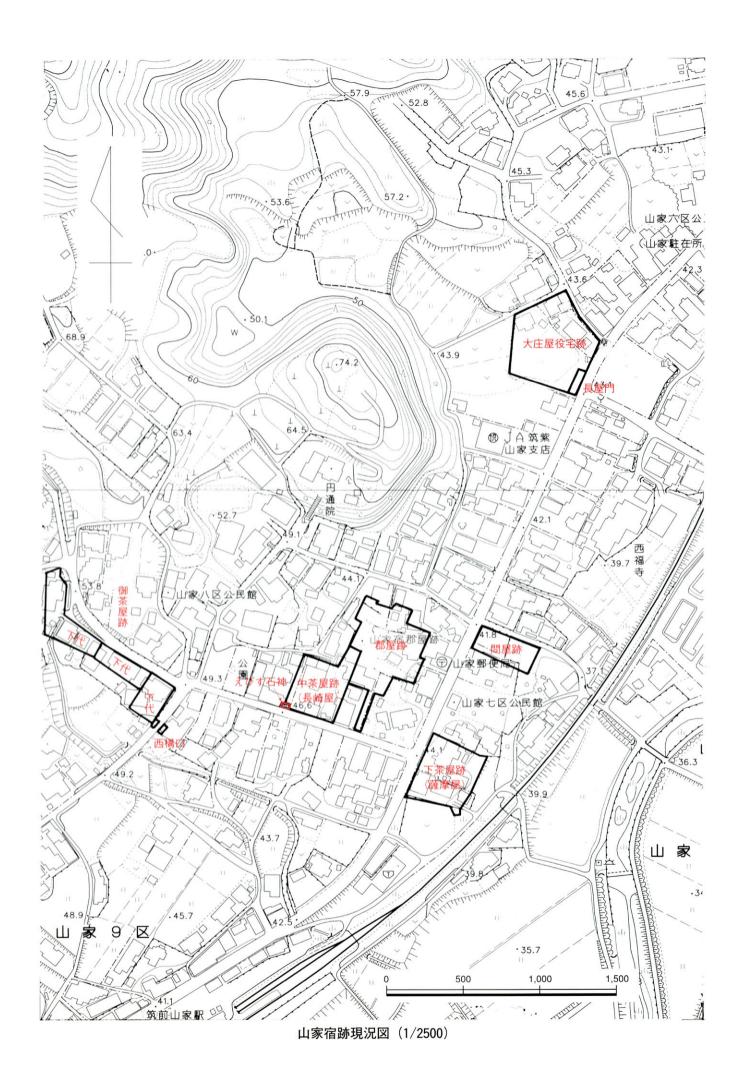
Ш		大上座长座门	
	図1.	平面図	• 7
		A~A'梁行断面図	
		B~B'梁行断面図 ····································	
	図4.	C~C' 梁行断面図 ····································	·11
	図5.	D~D'梁行断面図······	·11
	図6.	桁行断面図	·13
	図7.	東側立面図	·13
	図8.	西側立面図・・・・・・・	·13
	図9.	南側立面図・・・・・・・	·15
		北側立面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
		架構図	
		北棟床伏せ図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	図13.	1 階天井見上図	·17
	図14.	小屋組見上図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	·17
		詳細図	
		5-1.「ろ二」~「ろ三」天上裏の格子	
		5- 2 . 「と一」~「ちー」の格子	
		5-3.「と五」~「ち五」の格子	
		5-4.「ぬー」~「るー」の格子	
		5- 5 . 「る七」~「を七」の格子	
	図16.	旧山家宿大庄屋役宅長屋門南側建物跡図	·23
		門扉詳細図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
		復元平面図	
	図19.	復元東側立面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	·26
Ш		下代屋敷	
		1 階平面図	
		2 階平面図	
	図3.	梁行断面図	
	図4.		
	図5.	桁行断面図	
	図6.		
		東側立面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
		西側立面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
		南側立面図	
		北側立面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
		架構図	
		天井見上図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
		玄関脇格子詳細図	
		8 畳出格子東側格子詳細図	
		8 畳出格子北側格子詳細図	
	図17	基礎 図	.13

	郡屋跡灰屋と裏門	
	灰屋と裏門平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	灰屋梁行断面図 ·····	
	灰屋桁行断面図 ·····	
	灰屋と裏門北側立面図	
	灰屋と裏門東側立面図	
	灰屋西側立面図	
	灰屋と裏門南側立面図	
	灰屋と裏門架構図	
	灰屋小屋組詳細図・・・・・・	
	裏門梁行断面図	
	裏門桁行断面図	
	裏門小屋組詳細図・・・・・	
図13.	灰屋と裏門復元平面図	52
	郡屋跡穀蔵	
	1 階平面図	
	2 階平面図	
	梁行断面図	
	桁行断面図	
	南側立面図	
	北側立面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	東側立面図・・・・・	
図8.	西側立面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
図9.		
図10.	出入口板戸詳細図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	62
	郡屋跡宝蔵	
	1階平面図	
	2 階平面図	
	梁行断面図	
	桁行断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	東側立面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	西側立面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
図7.		
図8.		
図9.		
図10.		
図11.		
図12.		
図13.		
図14.		
図15.		
図16.	△ 陌禾傳保八凶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	

Ⅲ-6.	西構口と土塀
図1	写真7の断面76
Ⅲ -7.	郡屋跡土蔵
	調査位置図80
図2.	土蔵(平面図)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
	郡屋跡灰屋と裏門
	灰屋と裏門平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
	灰屋梁行断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
	灰屋桁行断面図83
	灰屋と裏門北側立面図83
	灰屋と裏門東側立面図84
	灰屋西側立面図84
	灰屋と裏門南側立面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
図8.	灰屋と裏門架構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
図10.	,裏門桁行断面図····································
	郡屋跡土蔵
図1.	. 平面図8′
図 2.	
	. 桁行断面図
図4	. 東側立面図
図 5	. 南側立面図8



山家宿跡位置図(1/25000)



I. 山家宿の概要

Ⅰ-1. 山家宿の設置

二日市宿庄屋帆足甚三郎が隠居後の正徳4年 (1714) に著わした「二日市宿庄屋覚書」に「桐山 丹波様が山家御知行の時、家来の志方彦太夫に山家 から内野へ越える山道を広めさせ、やがてそれが福 岡藩の工事となり冷水道が完成した。ただいま山家 宿の中茶屋の脇にあるエビスは彦太夫が建てたもの で裏に志方彦太夫と彫ってある」という話が見える。このエビスは今でも現存している。その碑背の銘には「当町初建之事」として慶長16年 (1611) 10月上 旬にこの町を桐山丹波守が創造した事、この国の安 寧とこの町の長久を祈ってこのエビス石像を寛永10 年に志方彦太夫が建てたこと」が刻まれている。

冷水峠の向う側の内野宿については「慶長17年、 黒田長政が家臣毛利但馬に命じて町を建て峠道を開 かせたこと」が『筑前国続風土記』(元禄年間編纂) に見える。



図-1 えびす石神



図-2 桐山丹波像(黒崎・春日神社蔵)

慶長10年(1605)幕府が諸大名に命じて作成提出 させた国絵図と考えられる「慶長年間筑前国絵図| には、まだ冷水峠越えの道は描かれていない。それ から約40年後の「正保年間筑前国絵図」には豊前小 倉から筑前黒崎・木屋瀬・飯塚・内野・山家・原田 を経て肥前田代に通じる道筋が初めて描かれ、内野 と山家の間の峠には「寒水越」の文字が記されてい る。冷水峠のことである。この街道をその絵図の7 年前の寛永14年(1637)12月、島原の乱鎮圧の幕府 の大部隊が実際に通ったことが元禄年間編纂の『黒 田家譜』に見える。12月28日、土卒3800人・騎馬200 余を率いて小倉に上陸した老中松平信綱と戸田左門 の諮問に応じて福岡藩が提供した絵図により「寒水 越」を通ることが決定、12月30日、戸田左門が木屋 瀬に、松平信綱が飯塚に宿陣し、翌日の寛永15年元 旦、信綱は原田に宿陣、戸田左門は山家に止宿した。 福岡藩主黒田忠之は正月12日夜、江戸を発し、25日 夜、小倉着、26日内野に宿泊、27日山家宿を通って 肥前神崎に向かっている。島原の乱に際して幕府軍 も黒田忠之の軍もみな「寒水越」を通ったことがわ かる。この「寒水越」は冷水峠越えのことである。 また筑前六宿のうち黒崎を除く五宿の名前も出揃っ ている。以来「この六宿は西国御大名方長崎奉行衆 通路ならびに諸家中江戸交代そのほか長崎諸御用多 き往還筋に候しと言われる様になり、なかでも山家 宿は長崎、薩摩、日田の三街道が一本になって冷水 峠に向かう重要な宿場であった。

Ⅰ-2. 山家宿の構造と機能

宿場町には町の入り口に、石垣の上に練塀を築き、 漆喰を塗り、瓦を伏せた短い土塀を両袖のように3 尺ほど道の両端から突き出した構口(かまえぐち) とよぶ構造がある。山家宿では西の構口を入ると町 はすぐ右に直角に曲がって家並が続き、ついで左に 直角に曲がって東の構口になる。城下町と同様に一 直線に突っ切れないようにした防衛上の設備といえ よう。山家宿には西の構口が現存している。東の構 口は上町・中町・新町と町の発展に応じて北に移動 し、江戸中期以後は新町北端のエビスが祀られてい る地点にあったと思われるが現存しない。

宿場内の主な建物には、人馬の継立てをする「問

屋場」、郡内の村役人の会議所としての「郡屋」、藩 主の別荘で幕府の役人や諸大名の宿にも宛てられた 「御茶屋」、東海道などの本陣・脇本陣に当たる「町 茶屋」(中茶屋と下茶屋の2軒)、御茶屋・町茶屋の 管理と諸通行の取り締まりに当たる代官が駐在した 「代官所」、その下役人の「下代」の役宅などがあ った。一般の旅行者は「旅飯屋」に泊まったが、町 茶屋も空いている時には一般の旅人を泊め、下茶屋 は浪花講の定宿にもなっていた。参勤交代などで大 名が宿泊する場合は宿場内のすべての家がその下宿 に割り当てられた。

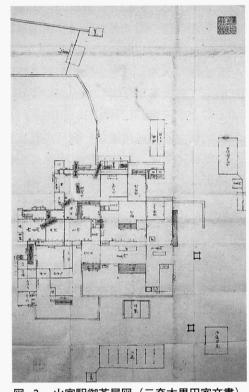


図-3 山家駅御茶屋図(三奈木黒田家文書)

御茶屋と町茶屋の建物は現存しないが、部屋の屋 敷跡には郡屋守の役宅と土蔵が当時のまま残り、さ らに屋敷内の建物の図面が残っていて、屋敷の中央 にあった郡屋の間取りを知ることができる。郡屋が いつ設置されたかは不明だが、「西福寺過去帳」に は寛文6年(1666)に「当町郡屋勘十郎」が、元禄 6年(1693)には「郡屋守甚三郎」の名が見える。

郡屋は大名が通行するときに必要な諸道具類を収 納し、郡奉行その他の役人が郡内のむら役人を招集 して藩の命令を伝達する会議所兼宿泊所でもあった。 郡屋に備え付けの諸道具類は、布団・枕・行燈・膳 椀類・たばこ盆・風呂桶・蚊帳・半縄・薪・草履・ わらじ、薄縁、御手洗田子・むしろ、茅などであっ た。

御茶屋ができた年代は分からない。元禄9年

(1696) 4月10日、藩主黒田綱政が「山家の別館」 で佐賀藩主として初めて御国入りする松平信濃守と 面会している。これを「出会」といった。長崎奉行 および隣国諸大名が初めて筑前領内を通る時、福岡 藩主は山家宿場に出向いて面会するのが慣例になっ ていた。建物は現存しないが享和元年(1801)と文 久2年(1862)の間取図が残っている。文久のもの は「御出会達御間取絵図 | とある。享和のものには 「山家駅御茶屋図」とあるが、玄関の式台の両脇に 「源左衛門」、「用人取次役」の付箋、御広間に「付 近に御使番」、「此処に着座」、「取次役」、御居間に 「此処に着座」、「用人」などの付箋が貼られている から、これも幕府の役人などとの「出会」に備えて のものとわかる。「御茶屋」は西構口を入ってすぐ 町並が右折する地点の左上手にあった。山家代官所 は御茶屋の裏手にあり、この代官所までの小路に下 代の役宅が並んでいた。

Ⅰ-3. 宿駅の廃止と郵便制度の開始

慶応3年(1867)3月山家宿郡屋守となった水城 卯市は、翌年の慶応4年6月24日、雑賞隈の郡役所 に呼びだされ郡屋守を役儀御免になり「預かり諸道 具 | を返納した。「御一新」ですべての郡屋が廃止 されたからである。御茶屋と代官所は解体されたが、 下代の役宅・町茶屋・郡屋などはそれぞれ払い下げ

4年前の元治元年(1864)に浪人取締りのため山 家宿西構口の出はずれ、日田街道との交差点に新設 されていた「関門番所」と「番宅」2軒も、明治2 年(1869) 4月の朝廷の布告で廃止され、明治4年 9月、民間に払い下げられた。

山家宿の最後の代官梅田茂苗は、慶応4年2月「原 田駅逓取締役」に転勤になり、同年4月、山家代官 宮本小八郎が免職になると「原田山家駅逓取締役・ 境目奉行兼務 | となって山家村の代官所に居住した が、これも明治5年6月に免職になっている。

こうして江戸時代の宿駅制度は完全に廃止された が、これに代わって明治4年12月5日、郵便制度が 始まり、中茶屋が郵便取扱所にあてられ、茶屋守近 藤弥十郎が郵便取扱人となった。一方、問屋役の塚 本定七は通運会社の継立所引受人となり、従来通り 原田・内野・甘木・二日市の四方面への人馬の継立 を担当している。

Ⅱ.山家宿史跡整備の取り組み

山家宿の調査は昭和4年の福岡県の『史蹟名勝天 然記念物調査報告書第四輯』に伊東尾四郎氏による 「筑前の宿驛 | についての調査記録がある。これは 統前の黒崎、木屋瀬、飯塚、内野、山家、原田の主 要六駅のほか、福岡、博多、箱崎、青柳、畝町、赤 間、蘆屋、若松、金山、宰府、二日市、甘木、志波、 **久喜**宫、大隈、飯塚、姪濱、今宿、前原、小石原、 金武の二十一駅に関するものであるが、二十一駅に ついては人馬の賃銭規程に触れる程度に止まり、い わゆる筑前六宿の交通、開通、踏査についての調査 記録が主体を占める。山家宿については多くの記述 がみられるが、その歴史的な重要性とともに、全体 的に資料が希薄な中で、比較的資料の残りが良かっ たためのようである。昭和5年には福岡県により「筑 紫郡山家村/旧宿駅 構口/藩政時代福岡藩領内の 宿駅合計二十七……」という説明板が建てられてい る。後段には「宿駅には何れも其の両端に石垣を築 き街路に直角に短き壁を設け之を構口と称す。今構 口の遺蹟の残れるもの甚稀なり」とある。この説明 板は、昭和43年に高嶋衡氏(最後の下代の子孫、書: 桐山豪三/初代代官の子孫)により石で建替えられ ている。

明治に入ると、東構口から直線で大又に至る国道が建設され、鍵状に折れる道の形状が失われ、さらに大正末期に拡幅工事が行なわれ、急速に宿場の景観は失われていった。今日でも最短距離で北九州市と福岡市以南を結ぶルートとして多くの車両が通行する。昭和20年、宿場の後、背部にある宮地岳の山腹や田畑約120万㎡が接収され、九州防衛の拠点として、旧日本陸軍西部軍の地下司令部の建設が開始された。計画の半分ほどが完成した段階で終戦となったが、宿場上方の山腹に掘られた洞窟は、現在、旭化成工業九州工場として使用され、宿場の中央を時折、大型のトレーラーが通る状況であった。

こうしたなか筑紫野市においても文化財保護の機運とともに、昭和48年文化財保護条例が制定され、昭和50年6月16日付で山家宿郡屋土蔵を市の有形文化財に指定した。その後、文化財保護行政も、開発等に伴なう緊急発掘調査に追われ年月を費やすこととなった。

平成2年度、市指定山家宿郡屋土蔵の壁体クラック、及び壁面の補修工事を行なったが、平成3年度、 九州北部に大きな被害をもたらした台風17号は、山 家宿においても郡屋の土蔵をはじめ宝蔵、穀蔵、灰屋の屋根に被害を与えた。このため、緊急に応急措置として、市指定の土蔵は萱葺の上のトタンを張替え、他の施設は瓦のズレを補修し、厚手のシートで屋根部を覆う工事を行なった。また、大庄屋役宅跡にある長屋門は、建物の老朽化に加え、直前の国道200号を走る車両の振動により危険な状態になっていることから、建物の解体調査を実施した。建物の調査は九州産業大学工学部佐藤正彦先生にお願いし、解体工事は㈱小山社寺工業所が行なった。また、基礎部分の調査は筑紫野市教育委員会が直接実施した。

この台風17号による影響は下代役宅にもみられ、 山家宿の歴史的な建造物の多くが被害を受けた。こ のような状況を踏まえ、個別の緊急対応も不可欠で あるが、何らかの措置を講ずるに当って、市として 山家宿に対する保存整備の基本的な方向を定める必 要性があるため、平成4年度に「山家宿史跡整備基 本構想策定委員会」を設置し検討を行なった。委員 には佐藤正彦(委員長/九州産業大学工学部建築学 科教授)、近藤典二(福岡地方史研究会会長)、片野 博(九州芸術工科大学環境設計学科助教授)の各氏、 さらに地元から水城泰年氏にお願いし、5回の委員 会を開催した。第1回目は宿場の現況を視察し、意 見交換を行なった。第2回目は山家宿の歴史や現存 する建物について検討をおこない、第3回目以降、 基本整備構想の策定作業に入った。構想は基本方針 として山家宿周辺の景観、交通のアクセス、サイン 等の課題を整理し、下記の5点を構想としてまとめ

- 1. 山家宿の整備に当っては、拠点地区整備、ルート整備、エレメント整備の3つの考え方で整備を 行なっていく。
- 2. 拠点地区整備は、3つの拠点整備地区(シンボルゾーン、情報・体験ゾーン、学習・体験ゾーン)を抽出し、山家宿の核とし、各々の核に特色をもたせ、重点整備を図っていく。
 - ・シンボルゾーン=構口、下代跡周辺エリア/山 家宿の入口としての象徴的拠点。
 - ・情報・体験ゾーン=郡屋周辺エリア/山家地区 の歴史伝承としての中心拠点。
 - ・学習・体験ゾーン=大庄屋役宅跡周辺エリア/ 歴史体験型学習の中心拠点。
- 3. ルート整備は、拠点地区を結びつける動線とし

て、また、生活道路として機能し、歴史的環境を 演出する修景道路として整備を図っていく。

- ・A. 円通院下の裏道、B. 国道200号、C. 宿場内-旭化成工業福岡工場の3本があるが、C. は通行量は少ないものの重量車両が通り、B. はトラック等の大型車両の通行量が極めて多く、バイパスの問題等課題が多い。
- 4. エレメント整備は山家地区内に点在する資産を 活用するとともに、地区の入口等の点景としての 演出を行ない、拠点地区及びルート整備をさらに フォローする役割を担う。
 - ・郡屋内の建造物、下代屋敷、大庄屋役宅跡長屋 門、山家の起りの銘文を残すエビス石人、宿駅 内に点在する古井戸等のエレメント整備をおこ なう。
- 5. その他の建築物については、建替や共同化にあたって歴史的景観を演出するような景観ガイドラインを設け、良好な景観形成を図って行く。

この山家宿整備基本構想は平成4年3月に刊行し、 本構想に基づき緊急に対応が必要なものから、逐次、 調査や保存のための対策、またやむ終えないものに 付いては復元整備を進めることとなった。

また、山家宿郡屋跡(2,070.07㎡)、山家宿大庄屋役宅跡(1,718.47㎡)を12月28日付けで市指定史跡とし(郡屋跡は平成6年2月22日付けで一部指定解除。指定面積2,045.27㎡)、筑紫野市開発公社により先行取得をおこなった。

平成5年度は、下代の建物は、台風により屋根が 歪み、雨漏り等が生じたため、所有者がシートで屋 根を覆う措置を取っていたが、傷みが進行し、屋根 の一部が大きく陥没するまでに損傷が進んだため、 解体調査を実施した。部材は郡屋の敷地内にプレハ ブを建築し保存した。

平成6年度は郡屋内の灰屋・裏門の壁体が張り出し、崩壊の危険が生じていた。土蔵造りであり、傷みが進行しすぎているため、修理は難しく、解体調査を実施し、その成果に基づき復元工事を行なった。

また、大庄屋役宅跡(1,781.47㎡)の開発公社に よる先行取得を行なった。

平成7年度は山家宿西構口及び土塀を建造物として、また建物を解体保存している山家宿下代跡地を 史跡として6月23日付で市指定文化財とし、筑紫野 市開発公社による先行取得を行なっていた市指定史 跡の郡屋跡と大庄屋役宅跡は、平成8年1月12日付 けで市において買収した。さらに大庄屋役宅跡の指 定地に隣接し、東構口の推定地71.00㎡を地権者から無償譲渡をうけ、大庄屋役宅跡に追加指定した。

西構口は以前から表面の傷みが著しかったが、傷みが壁体の芯まで及んできた。このため全体の写真測量を行なうとともに、現況調査を(財)文化財建造物保存技術協会、本調査に伴なう基礎部分の調査を筑紫野市教育委員会が実施した。この結果、基礎部分からの修復が必要であると考えられたが、修復に当っては、さらに詳細な調査が必要なことや、隣接する下代の整備の可能性も踏まえ、今回は壁体の塗りなおしのみを実施した。

また、同年12月24日に山家地区において「山家の 史跡等を守る会」が発足し、地元でも山家宿を始め とした史跡を保存や活用しようという気運が高まっ た。守る会では、山家地区に所在する史跡の調査、 史跡マップやパンフレットの作成、道標の設置等の 活動が行なわれ、さらに山家に所在する指定史跡の 草刈りの受託等を行なっている。

平成9年度、郡屋内穀蔵の基礎の一部が沈下し、 壁体に大きな歪みが生じた。建物を保全するため、 建物の重量を軽くする手段とし屋根瓦を下ろし、ト タン板で屋根を覆った。この工事に先立ち、建物の 調査を実施した。

平成10年度、郡屋内にある宝蔵は、その敷地半分が民有地となっていた。これまで、所有者の好意により建物を保全してきたが、敷地の整備を行ないたいと強い要望があった。このため、宝蔵を解体調査し、部材はプレハブに保管した。

平成3年度以降、大庄屋役宅跡長屋門、下代跡、郡屋跡灰屋・裏門、郡屋跡穀蔵、郡屋宝蔵などの建物調査を行なってきたが、調査は、いずれも九州産業大学工学部佐藤正彦先生にお願いし、解体や復元に当ってもご指導を頂いた。

Ⅲ.山家宿史跡整備に伴う調査

山家宿史跡整備の取り組みについては、前項で奥村俊久が詳しく触れた。 ここでは、山家宿史跡整備に伴って、平成3年(1991)度から平成11年(1999) 度までに調査が進められた建造物について記す。

建造物は時を経ると共に破損が進む。特に、人が住み使用されていれば破損個所は速やかに修理されるので、建造物の耐用年限も自ずと延びる。しかし、無人の建物や実際に使用されていない建物であると、破損個所の修理もこまめに行われないので、自然と建ち腐れてしまう。

山家宿史跡整備に当って、このような危機感を担当者が抱き始めて、必要な建物の復元を試みた。しかし、建物の復元は莫大な費用を必要とするので、直ちには無理であった。そこで、まず、建ち腐れの危険がある建物から調査をし、解体し、材料を保存しておくことにした。

そして、再建費用の工面がついた郡屋灰屋と裏門のみが解体と同時に復元された。一方、筑紫野市指定文化財の郡屋土蔵及び西構口と土塀は解体せず、修理工事を行って現在に至った。

構口と土塀は平成11年度現在、福岡県の史跡指定を受けるべくその準備を 進めているところである。

これら復元、修理工事の進められた3棟の建物と構築物1個所は、次項の整備工事で触れる。

ここでは、これらの建物と構築物を含めて記す。各建物のあとに「調査記録」として表にして英文を付けてまとめにかえた。

Ⅲ-1. 大庄屋長屋門



1. 正面



2. 東北面

長屋門は「山家触」の大庄屋を代々務めた近藤典 二氏の所有であった。しかし、老朽化のため平成3 年(1991)に解体された。

大庄屋は江戸時代郡役所から出された「触」を受けて、村々の庄屋へ伝える役割をしていた。長屋門は「山家触」という江戸時代の行政組織の一つの大庄屋の長屋門である。

明治4年(1871)、長崎街道宿駅として郵便取扱 所が中の茶屋に設けられた(初代所長近藤弥十郎)。 郵便取扱所は間もなく、この長屋門に移り、明治8 年(1875)1月に横町に移るまでの約4年間長屋門 が郵便取扱所として利用された。

長屋門は間口14.488m (桁行8間)、奥行北端で3.947m (2間)、南端で5.962m (3間)、入母屋造り、桟瓦葺きで東向きにたつ。北より5間目を通路として、外開き戸をたてる。

破損著しく、特に屋根のいたみがひどく、南棟(通路の南側3間×3間)の屋根は殆ど呈をなしていない。また、改造点も多く見られるが、建立年代は北棟(通路の北側4間×2間)の内部柱に手斧仕上げが認められ、部材の風蝕状況などから19世紀初期頃



3. 東南面



4. 西南面

と推察される。

北棟が折置組と登り梁(扠首)の混合であるのに対して、南棟は京呂組で、小屋組構造が異なる。また、北棟は梁間2間であるのに対して南棟は梁間3間なので、建立年代の差が考えられるが、東側、北側あるいは通路境に積まれた高さ2尺程の石垣が一手であることと、柱の風蝕状況に差がなさそうなので、北棟も南棟も同時期の建立と思われる。

長屋門のたつ近藤典二宅は、江戸時代大庄屋を務めた家であるから、恐らくこのような形式の長屋門があっても不思議ではない。昭和63年(1988)当時母屋等は解体され現存しない。よって、現在居住者は当地を離れているが、長屋門のみがたっていた。建立資料も管見によれば見つからないが、祈祷札4枚があった。しかし、祈祷札は殆ど判読不可能であり、天保5年(1834)をかろうじて解読した。建立年代も恐らくこの頃と推測される。

いずれにしても、筑前の六宿の一つとして山家宿 の東の入口(構口)に位置しているので、その歴史 的意義は大きい。

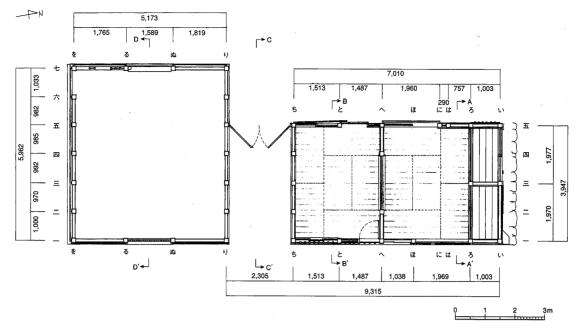


図1 平面図

1. 構造形式と規模

桁行8間、梁間北棟2間、南棟3間、入母屋造り、 桟瓦葺きである。北棟は一部小屋裏を利用する。北 棟の北側に半間の下屋を付ける。北より5間目を通 路とする。

北棟は北より6畳、6畳の畳敷きの部屋を2室構え、北側の6畳の部屋の北端の東側に1間の押入と、西側に1間の床の間を設ける。北端の6畳の部屋は東側に1間の腰高窓を設ける。西側に半間の片引き戸をたてて出入口とする。南側は中央1間に襖引違いをたてて、6畳に接続する。南側の6畳は、東側南端の間と西側に対象的に1間の腰高窓を付けるほか、東側に半間の片開きガラス戸を、西側には片引きガラス戸をたてる。南側は漆喰壁とする。

通路は幅1間で北棟の西側隅の柱筋に外開き板戸 をたてる。

南棟は西側中央間に出入口を設け、その南側及び 東側中央間に腰高格子窓を付ける。

南側と北側は漆喰壁とする。

2. 解体前の破損状況

2-1. 基礎及び地盤

敷地は東側が国道200号に面し、北側は恵比須の石像などがたつ公共地、南側は隣家の敷地に続く。商家や旅籠がたつようになって、山家宿は恵比須講がさかんになった。郡屋(中の茶屋)脇に「慶長」の刻銘のある恵比須石神があり、旧正月10日の「ゑびす祭」は藩政時代から現在も続く。

東側と北側に高さ60cm程の花崗岩の石垣を積み、それを長屋門中央部の出入口の北側と南側へ廻す。出入口は敷地と国道に高低差があるため、東側より西側へ登りの傾斜となっている。従って、西側と南側は、東側や北側よりほぼ2尺程高くなっている。北側は隣地に樹木が生い茂り、長屋門の屋根に一部がかかっていることと、建物の西側より5m程の所に南北一列に桧の木が植えられ、幹廻り10cm程に成長しているため、風通しなどが悪く、建物に与える影響も大である。かつ、住民が常駐していないので、手入れが行き届かず、草が生い茂り、長屋門の北側や南側及び西側に蔦がからみついて、一部は屋根まで達する程である。

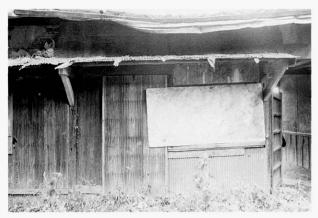
地盤は、草木がよく育つ軟弱な黒色腐葉土であったが、西側と南側は長屋門の土間よりもやや高くなっているため、礎石は勿論のこと、柱根まで隠れる程で、柱根の腐蝕が進行した。建物にとって決して良い状態とは言えない。

出入口の通路は床をモルタル塗りとするが、西側の土が中央近くまで流れ込んでいる状況である。 東側と北側の石垣は花崗岩の間知石積みし、東側のみ上部に花崗岩の地覆石を置く。この形式をそのまま、中央部の通路の北側と南側に廻すことは前に述べた。しかし、通路が傾斜しているので、西端では地覆石のみが確認される。

地覆石は石垣積みの上に直接のる。柱下の礎石 は搗き固めて、据えつけていた。東石類は地盤を 搗き固めて座りを良くしたうえに空据えであった。



5. 西面北端



6. 西面

礎石や東石は砂岩や花崗岩などの切石が入り交じる。柱下の礎石の大きさは大半が30cm内外で、厚みは20cm程の石が使用されていた。

東側の国道200号は、交通量がかなりあるため、 地盤の振動による建物の不動沈下が予想されたが、 存外少ないのは、東側と北側の石垣積みがかなり しっかりしているためによるものと推察される。

しかし、西側の礎石の不動沈下と傾斜等が原因 で建物全体に弛緩が生じていた。建物全体が北方 へかなり傾斜していた。

2-2. 軸 部

柱は全て杉材の糸面取り角柱で、土台はなく礎 石又は地覆石上に直接たつ。

南棟は東・西側と北側、北棟は東・西側と南側のみ花崗岩石垣積み基壇の地覆石上に角柱をたてるが、他は全て礎石上に角柱をたてる。通路出入口は柱に扉の丁番を取り付ける添え木を付けて外開きの板扉をたてる。

柱は概ね当初のものである。仕上げは殆どが台 鉋仕上げであるが、北棟内部柱に手斧仕上げが若 干見られる。

柱は「ぬ七」のみ。下部より40cm程の所で根継ぎする。



7. 中央通路



8. 中央通路門扉

「ろ一」~「ろ三」通りは押入にした際、「ろ二」の柱を切断し、敷居と鴨居を入れる。鴨居上部と敷居下部に柱の切断部分が残る。但し、押入の改造はかなり古い時期であろう。明治頃かも知れない。

「と一」~「ち一」の格子桟も丸釘でとめ、新 しい。柱も被せのため痕跡は不明であったが、解 体した結果から現状の腰高格子窓であったことが 判明した。

「へ」通り中央「三」に柱がたつ。それは2階の牛梁に柱穴があり、床下に柱が残るので明らかである。

北棟の壁の貫は3本で、大きさは厚さ1寸、成4寸である。鋸挽き肌である。各貫は柱真に4寸8分の貫穴を貫通し、継ぎ手に略鎌を用い、端部

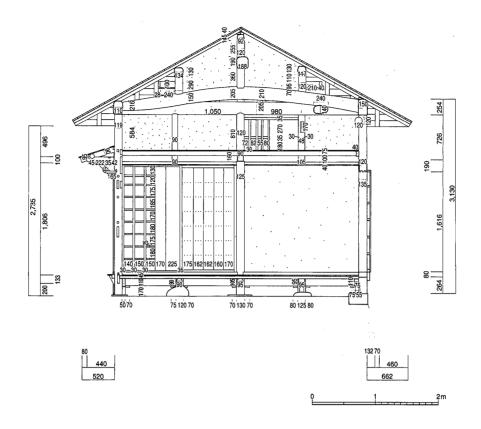


図2 A~A' 梁行断面図

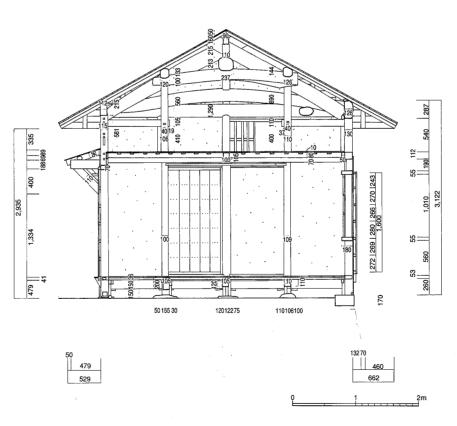
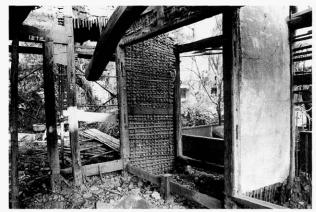
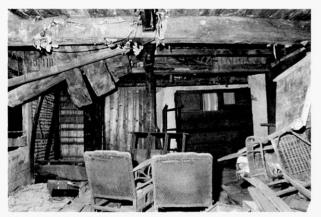


図3 B~B' 梁行断面図



9. 北棟下屋の内部



10. 北棟内部の南面

は小根柄とし、上楔でとめる。桁行の貫は梁行よ り貫一段程高く納めている。

南棟の壁の貫も同一手法である。

軒桁は殆ど当初材である。材料は杉で、柱穴の 位置をはずして腰掛鎌にて継ぐ。断面寸法にむら があるが、概ね成4寸8分、幅4寸5分である。

表面は鋸挽き肌である。桁の組み方は、上木・ 下木を隅で渡鰓組とする。

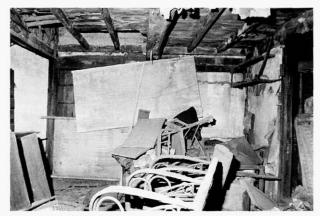
敷居は成3寸8分、幅4寸5分、溝8分である。 柱への取り付けは片方横目違柄と他方雇横柄とする。

床組は北棟の北側と南側の6畳間とも桁行に大引を入れ、根太を梁行に配す。大引は中間を床束で支える。

根太は1間を $5\sim6$ 割にして梁行に配す。南側6畳の根太が北側6畳の根太よりやや新しい。

2-3. 小屋組

北棟の「は」通りの梁は「は一」で梁尻の軒桁接合部が腐蝕して、梁が完全にはずれ落下していた。この梁は「に」の指物から支えの梁を付けて支えていたらしく、かなり前から端部の腐蝕が進んでいたらしい。特に、東側端部は仕口の痕跡を殆ど残していない程である。この「は一」から「は五」へ渡した梁の両端は軒桁に納められている。



11. 北棟内部の西面



12. 北棟内部の北面

しかし、「は五」は軒桁下端に柱があり、かろうじて仕口が残っていた。「は一」は柱がないので、梁下に北側より自然木を入れて、北端を軒桁で受け、南端は「と一」から出た自然木を柱に打ち付け、「へ一」で継ぐ不自然な構造で「は」通りの梁を一時支えていた。東の軒桁下端に柱跡がないので、当初より「は一」には柱がなかったらしい。「ろ五」北側隅の軒桁は風蝕が著しい。柱は軒桁に大栓止めで、上までつき抜けるのが殆どである。但し、登り梁(扠首)の所は違う。「に」通りの扠首は東側先端が腐蝕している。先端は垂木の欠き込みがある。

南棟は「ぬ」通りの梁と牛梁も「る」から「を」間で風蝕著しい。垂木は北棟及び通路など殆ど入側の母屋桁上で斜めに継ぐ。先端部分が後補であるのは軒先が腐蝕したためである。

北棟は京呂組で、南棟は折置組である。

北棟は「に」「と」通りに投げ掛け梁(登り梁)を扠首に組む。両端は柱上へかけ、その上に軒桁をのせる。「へ」「ち」通りは小梁で牛梁を支える。小梁は下の指物上に束をたて、両端を支えられる。しかし、「ち」通りは指物が梁1段分高くなり、小梁は束に突き刺す。牛梁は1本もので「ろ」か

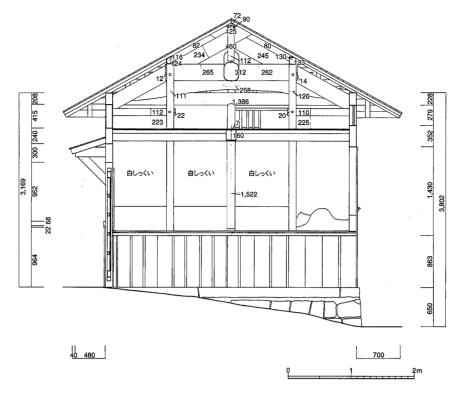


図4 C~C' 梁行断面図

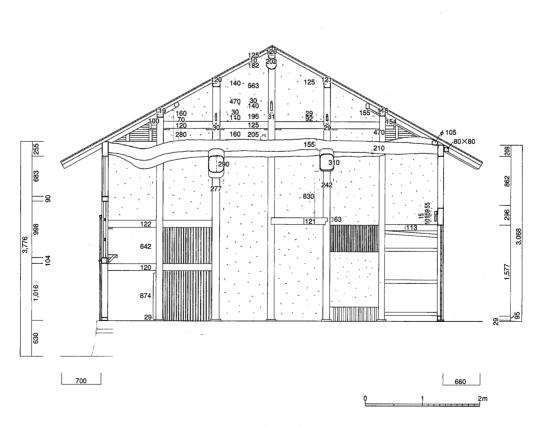


図5 D~D' 梁行断面図



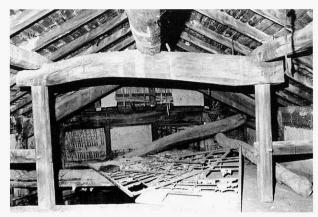
13. 北棟内部の西南面



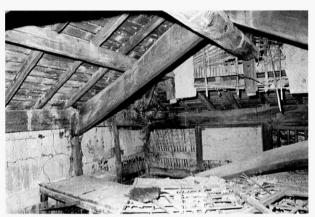
14. 北棟内部の東北面

ら「り」まで約4間分通る。投げ掛け梁(登り梁) は込み栓で交叉部をとめる。棟木は「ち」と「り」 の間で継ぐ。東側軒桁は「へ」と「と」の間で、 西側の軒桁も「へ」と「と」の間で継ぐ。母屋桁 は東側は「へ」と「と」の間と、「と」と「ち」 の間で、西側は「へ」と「と」の間で継ぐ。野地 は板、角垂木は新旧入り交じる。古いのは手斧仕 上げである。

南棟は牛梁を「り」から「を」間まで3間分渡し、棟木や母屋桁は「る」から「を」の中間までのばす。東側の「三」の母屋桁は「ぬ」と「る」の間で継ぎ、込み栓でとめる。東側「二」の母屋桁は「り」と「る」の所で継ぐ。西側は「五」の母屋桁が1本ものである。西側の「六」の母屋桁は上の母屋桁同様に1本ものである。軒桁は東側と西側とも1本ものである。牛梁を2本渡し、上に梁を2本渡し、束をたて、上部の棟木や母屋桁を支える。束に十字に貫を付ける。東側の「三」・「二」の母屋桁のみが北棟から南棟まで続く。因



15. 北棟小屋組の南面



16. 北棟小屋組の東南面

みに、東側の「三」の母屋桁は北棟の棟木に当る。 南棟の東側の軒桁は「り」と「ぬ」及び「ぬ」と 「る」の間で継ぐ、西側は「り」と「ぬ」の間の みで継ぐ。

2-4.屋 根

建物が老朽化し、国道に面してたち、車の振動で瓦が落下する可能性もあるので、所有者が土地を離れた後に桟瓦を取り外し、南棟に保管すると共に、建物全体にビニールシートを被せ、雨漏りを防止してきた。しかし、出入口や南棟の屋根は棟木や母屋桁及び垂木などまで破損していた。野地の丸竹や割竹も腐蝕していた。特に北西の隅や北東の隅及び南西隅も破損していた。いずれも割竹が腐蝕するほどである。北棟の屋根もかなり雨漏れのためにいたんでいた。但し、北棟の北側の下屋の部分の桟瓦はそのまま残っていた。

入母屋造り、桟瓦葺きの屋根は、調査時点で瓦が取り外され、ビニールシートを被せて保護していたことは述べた。しかし、熨斗瓦、鬼瓦など棟飾りは紛失である。

南棟は野地に割竹を用い、土をのせて桟瓦を葺く。但し、西半分は60cm程野地板を使い、垂木も細いので、やり直しらしい。北棟及び出入口上部

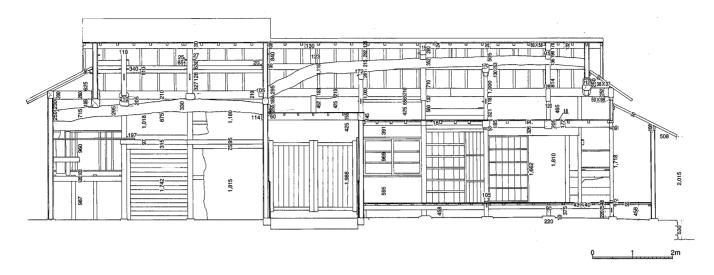


図 6 桁行断面図

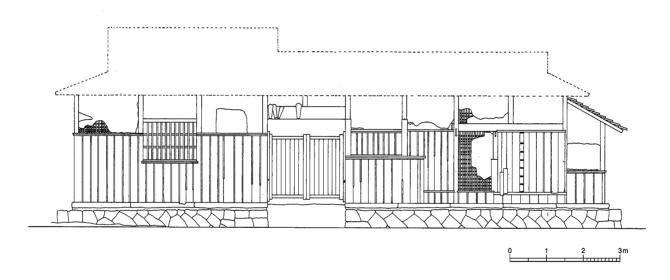


図7 東側立面図

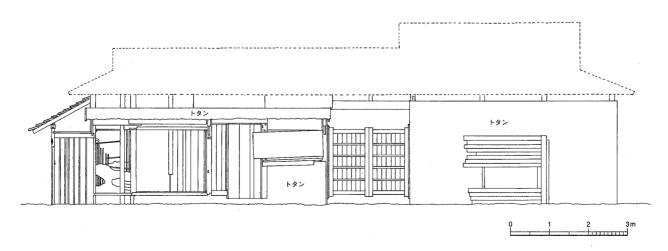
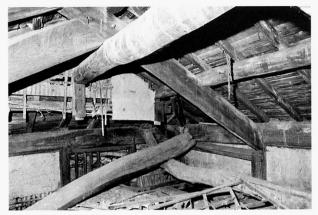


図8 西側立面図



17. 北棟小屋組の西南面



18. 北棟小屋組の北面

の小屋裏は幅60cmの野地板を用いるが、東側の南端には一部分割竹が残る。また、入口上部は丸竹野地に土を置き瓦をのせる土居葺である。

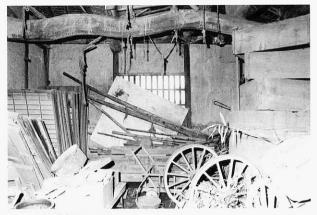
以上のように、屋根下地は疎角垂木に野地板を 張り、土を入れた桟瓦葺きである。しかし、野地 板のかわりに丸竹や割竹部分も残るので、当初は この手法で、野地板は後の修理の際に取り替えた ものである。

垂木は幅2寸、成2寸7分である。垂木は北棟 及び通路など殆ど入側母屋桁上で斜めに継ぐこと は前に述べた。先端部分が後補である。

2-5. 造作と建具

北棟、南棟とも真壁であるが、腰部のみ東側と 北側は竪目板張りとする。北棟西側は「い」から 「ろ」の間と「と」から「ち」の間のみ竪目板張 りとするが、「と」から「ち」の間は敷居下を波 子鉄板張りとする。「い」から「ろ」の間は竪目 板張りの上部は下見板を張る。「へ」から「と」 の間は、戸1枚を嵌め殺し、竪目板を半分張る。 出入口の北側と南側は真壁白漆喰塗りに腰目板張 りとする。北棟と南棟とも北側及び南側は竪目板 張りとし、開口部はない。

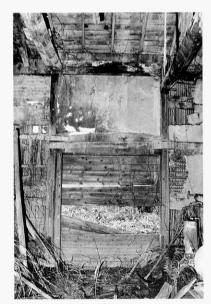
敷居と鴨居はともに外廻りで風蝕が大きい。中



19. 南棟内部の西面



20. 南棟内部の東面



21. 南棟出入口内側

央出入口(通路)の板扉は比較的新しいが、他の ガラス戸、雨戸などの建具も破損していた。内部 間仕切りの襖も取り外され、見当たらない。 次に柱間装置に触れる。

1. 東側「ろ」から「ほ」の間は開口とするも建 具なしで、竪目板張りとしていた。外に雨戸1 筋、内側に上下2本溝の敷居と鴨居が残る。し かし、後補かも知れない。「と」から「ち」の

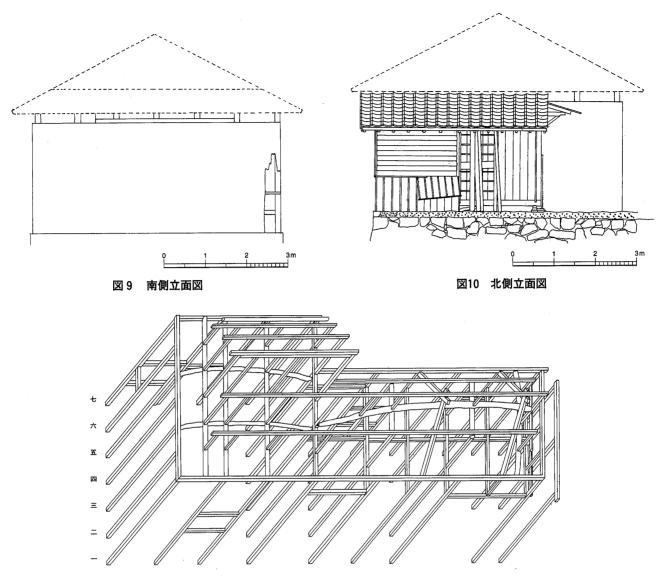


図11 架 構 図

間と「ぬ」から「る」の間は腰高窓に格子を付ける。前者は内側にガラス戸引違いをたてる。

- 2. 東側「へ」から「と」の間も片開きガラス戸をたてているが、外側は竪目板張りであった。
- 3. 通路は外開き板戸をたてる。通路東側指物上 部は横板1枚壁とする。
- 4. 西側は「に」から「ほ」の間に板戸片引き戸をたてる。「へ」から「と」の間は開口とするも板壁打ち付けである。「と」から「ち」の間は腰高窓にガラス戸引違いをたてる。南棟は西側中央間を出入口とし、片引き板戸をたてる。
- 5. 西側の南端は腰高格子窓とする。しかし、これは後補らしい。

建具は板戸(雨戸とも)、ガラス戸、襖、障子の4種が使われ、他に開口部に竪格子のみを付け、 建具なしの部分がある。尚、当初の建具はなさそ うである。

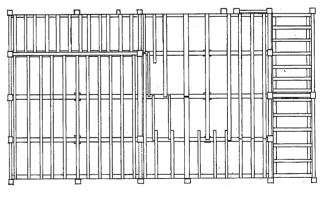
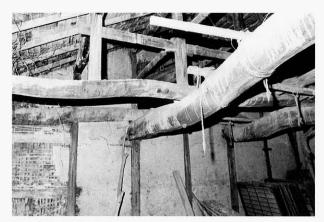


図12 北棟床伏せ図

「ぬー」から「るー」は現状の竪格子が生きる。 西側「る七」から「を七」の間は腰高竪格子の現 状が生きるか疑問である。復元では真壁にした。 「へ五」から「と五」の間は大戸をたてたらしい。 その他は真壁である。「ろ五」から「へ五」は1 間半2つ割りで、西側に大戸をたてたらしい。



22. 南棟小屋組の南面



23. 南棟小屋組の南面上部

壁は「る一」から「を一」の間、「を三」から「を六」、「り七」から「ぬ七」、「り三」から「り五」、「り五」から「り六」、の上部が破損著しい。「ろ」通り内部の上部の壁、「ろ五」から「に五」などの土壁も著しく破損している。また、東側は白漆喰塗りが剥落し、殆ど荒壁になっている。比較的白漆喰塗りが残るのは中央通路の南面の壁のみである。

3. 平面計画

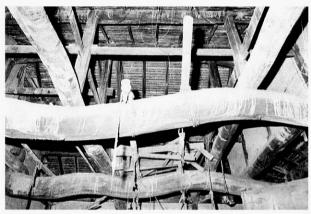
東側と北側及び中央出入口の南側と北側の花崗岩 切石の石垣積み上の地覆石を実測し、かつ、真墨の 礎石を実測した結果、1間を6尺5寸とする計画寸 法が得られた。北棟は桁行3間、梁行2間、南棟は 桁行3間に梁行3間で、通路の幅は7尺6寸である。

北棟は床に畳を敷くが、柱間にばらつきがあるので、当初より畳割でなく、柱割でたてられていたことがわかる。

尚、北棟、北端の半間の下屋はあとづけらしい。



24. 南棟小屋組の西北面



25. 南棟小屋組

北棟は床の間、押入を除き6畳2間に2分されているが、もとは畳敷きではなかったらしい。南側の部屋は西側に踏み込みを半間設けて、板張りだった。 畳敷きの床板は4分仕上げで、幅約20cmで鋸挽き肌である。材種は杉である。

南棟は土間、通路はモルタル塗りである。南棟の 土間は表土を搗き固めた程度であった。土間叩きの 厚さは5cm程である。表面は凸凹し、所々に窮みが あった。土間叩きは特に混合物はなかった。

中央通路の天井は竿縁天井である。しかし、通路 上の天井の竿縁は細い。もとは太く根太のようであったので、やり直しらしい。

北棟の天井は根太天井で、目板張りである。従って、小屋裏を利用していた。しかし、北側の6畳の 天井の目板は殆ど欠損である。

北棟の2階と南棟は天井がない化粧屋根裏である。

4. 後世の修理と改造

「ろ」通りの柱の北面に風蝕があるので、北側下屋は後補であろう。恐らく畳敷きにする時、あるいは「ろ」から「へ」の間に小屋裏利用のため、目板天井を張った際に押入として増築したのかも知れない。

「は一」から「へ一」の指物はあと入れで、上・

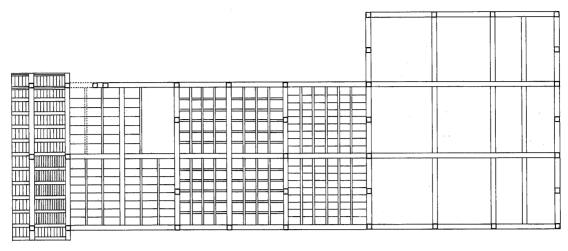


図13 1 階天井見上図

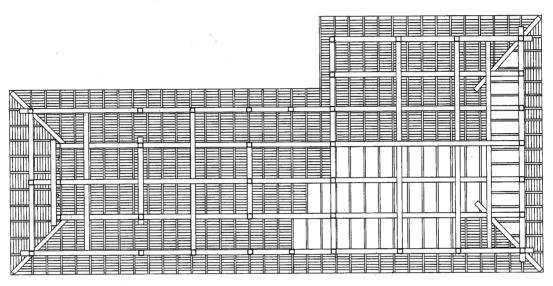


図14 小屋組見上図

下に古い柱を切断した跡が残る。「へ五」の柱北面 に鴨居の跡が残るので、もと大戸をたてたらしい。 下に蹴放ちが残る。

「へ五」から「と五」の間にも下に蹴放ちが残り、 大戸をたてたものと考えられる。しかし、踏み込み があって床があったらしい。

「と五」から「ち五」の間の腰高窓の鴨居は中古らしい。また、西側の庇は「へ五」から「ち五」の間に垂木掛のあとが残り、材があるので「に五」近くまで(大戸まで)あったのであろう。

東側の「と一」から「ち一」は現在の格子窓が当初よりあって、他は壁である。「ろー」から「へー」の指物は新しく、指物下の柱「ほー」はもと「ろー」から「へー」の中央の柱を90度ふって、転用しているらしい。

「へ一」から「と一」の間の鴨居は丸釘でとまり 新しい。出入口を設けた時に入れたらしい。もとは 漆喰壁である。

北端の押入、床の間などは、その南の土間に床を 張り畳敷きにした際、増築したものらしいことは前 に述べた。また、屋根野地板などもやり直している。 もとは竹を利用していたらしい。それが一部分残る。 通路の扉も新しい。

南棟は「る七」から「を七」の腰板格子はなく、 当初は恐らく漆喰壁となる。この点以外は改造点が なく、殆ど当初の形式をそのまま残している。勿論 「ぬ七」から「る七」の間の大戸は新しいものに取 り替えられている。

以上のうち、主な改造は明治初期に郵便取扱所と して利用された際、行われたものと推測される。

平成3年(1991)度 株式会社小山社寺工業所により解体され、古材を現場に積み、ビニールシートを被せて保管した。



26. 解体



27. 解体

規模 長屋門

区分	摘 要	解体前
	北棟(通路を含む)桁行両端柱間真々	8.312m
桁 行	南棟桁行両端柱間真々	5.173m
	北側突出部桁行両端柱間真々	3.947m
	北棟 (通路を含む) 梁行両端柱間真々	3.947m
梁 行	南棟梁行両端柱間真々	5.962m
	北側突出部梁行両端柱間真々	1.003m
tr o ll	北棟 (通路を含む) 側柱真より茅負外 下角まで	0.760m
軒の出	南棟側柱真より茅負外下角まで	0.760m
	北側突出部側柱真より茅負外下角まで	0.600m
	南棟礎石上端より茅負外下角まで	2.700m
軒 高	北棟 (通路を含む) 礎石上端より茅負 外下角まで	2.700m
	北側突出部礎石上端より茅負外下角まで	2.100m
棟 高	礎石上端より棟頂上まで	4.900m
平面積	側端ら内側面積	67.607 m ²
軒 面 積	茅負外下角内側面積	40.135m ²
平 山 恒	北棟突出部平葺面積	5.520 m ²
层相而建	平葺面積	209.537 m ²
屋根面積	北棟突出部平葺面積	8.050 m ²



28. 解体



29. 北側の石垣

5. 現状変更(復元)

復元図に示す如く、北棟は北側半分は土間、南側半分は踏み込みを設けて、板床として出入口はいずれも西側に大戸をたてる。南端東側面は現在も残る高窓格子付きを生かす。

南棟は現在の出入口と東側中央の腰高窓格子付き を生かすが、他は真壁造りとする。

通路は西側柱筋に扉をたてる。

6. 発見物及び資料

祈祷札4枚(「ちー」と「りー」間の指物上部 に釘打ち)

1. 左側(南側)

杉材 総高49.0cm 肩高48.0cm 上幅11.8cm 下幅 10.3cm 上厚0.7cm 下厚0.5cm 台鉋 丸釘2本







(裏面) 文字なし

2. 左より2番目

杉材 総高53.2cm 肩高52.2cm 上幅14.5cm 下幅 11.6cm 上厚1.2cm 下厚0.8cm 台鉋 丸釘2本

(表面)





(裏面) 文字なし

3. 左より3番目

杉材 総高51.5cm 肩高51.0cm 上幅12.5cm 下幅 10.6cm 上厚0.8cm 下厚0.5cm 台鉋 丸釘2本

(表面)





(裏面) 文字なし

4. 左より4番目

杉材 総高44.0cm 肩高42.0cm 上幅9.2cm 下幅 6.3cm 上厚0.7cm 下厚0.5cm 台鉋 丸釘2本

(表面)





(裏面) 文字なし

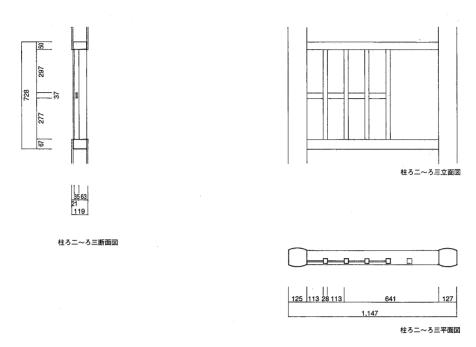


図15-1 詳細図(「ろ二」~「ろ三」天上裏の格子)

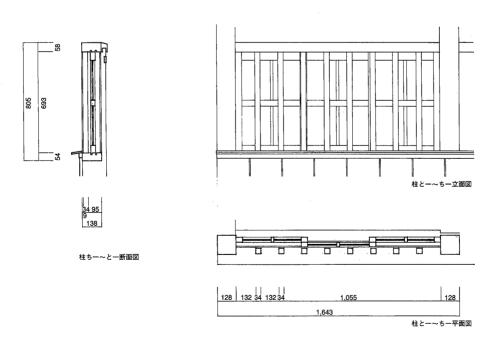


図15-2 詳細図(「と-」~「ち-」の格子)

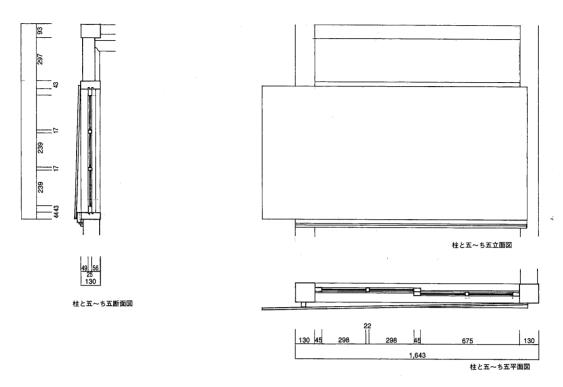


図15-3 詳細図(「と五」~「ち五」の格子)

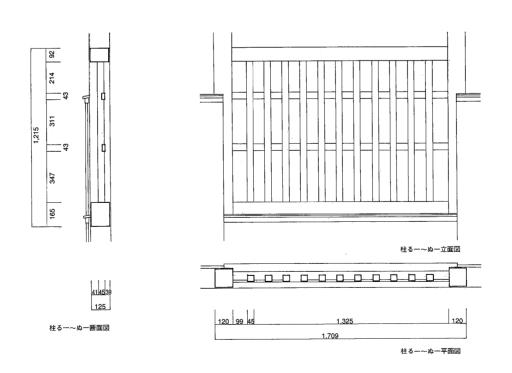


図15-4 詳細図(「ぬー」~「るー」の格子)



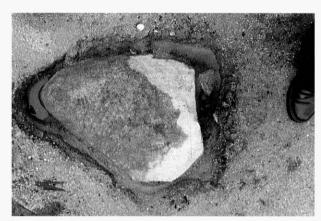
30. 基礎



31. 発掘トレンチ



32. 礎石墨書



33. 礎石墨書

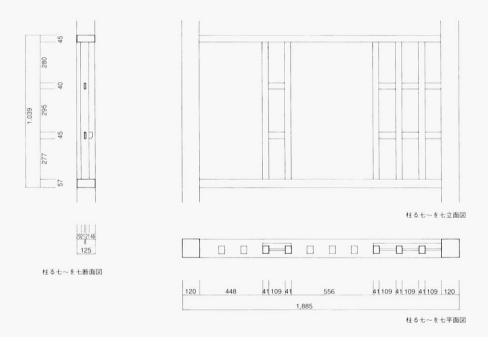
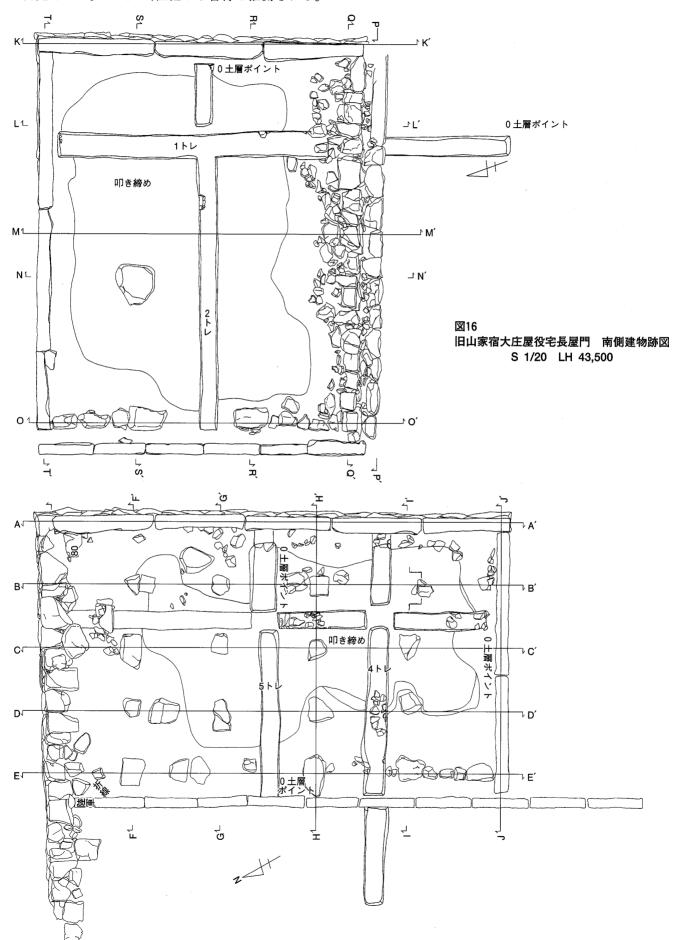
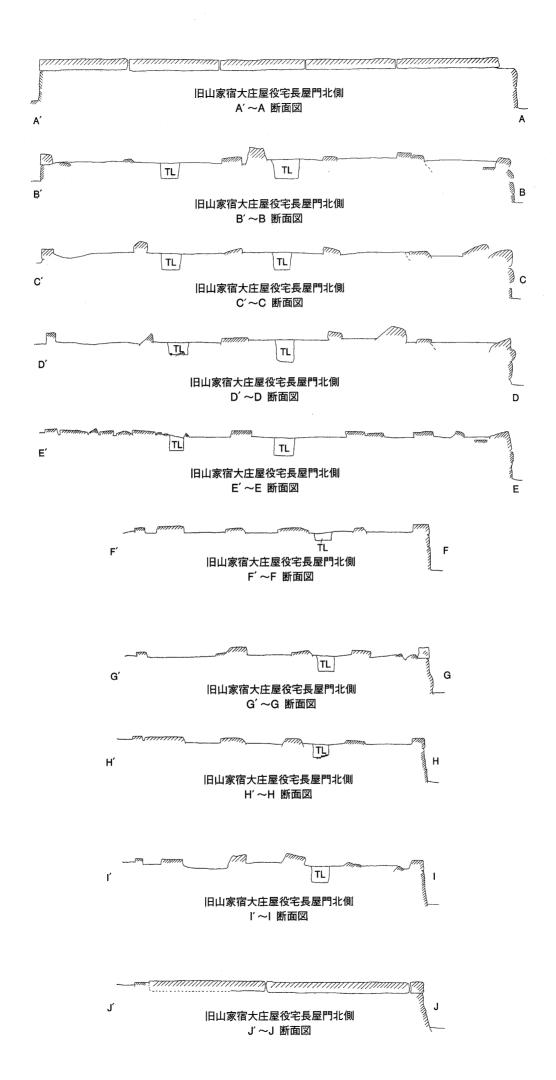


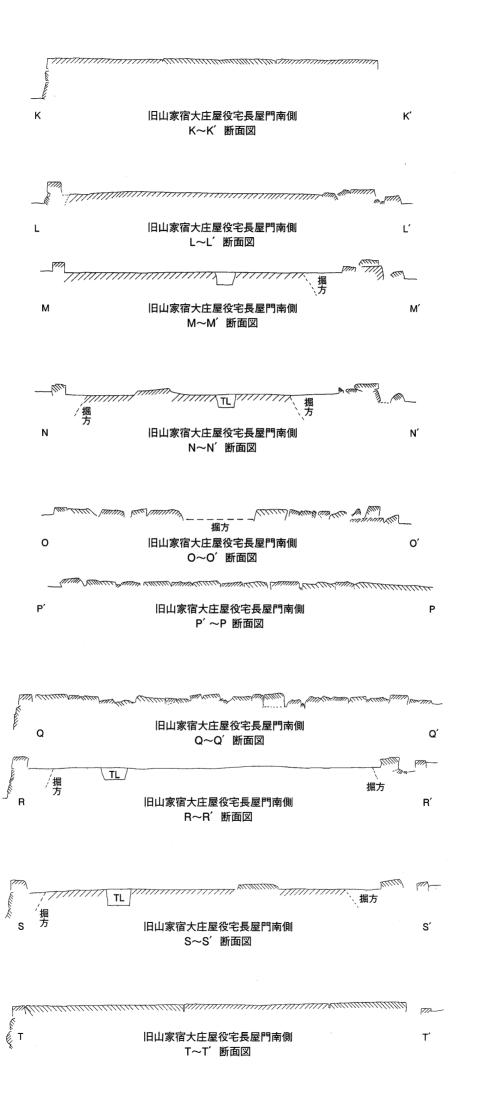
図15-5 詳細図(「る七」~「を七」の格子)

7. 地下発掘調査

礎石に「七圏」「五[]」「三[]」などの墨書が発見された。これらは、位置から番付と推測される。







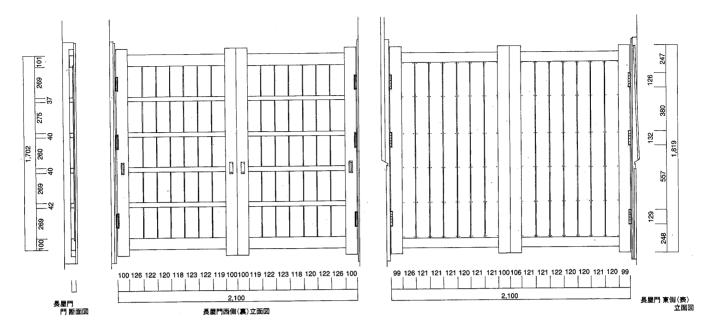


図17 門扉詳細図

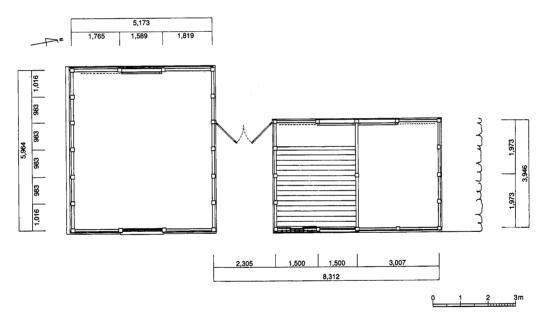


図18 復元平面図



図19 復元東側立面図

8. 参考資料

小山社寺工業所が平成3年度に解体し、柱や梁な どの古材を保管した。その際の見積書を次にあげる。

積 算 書

委託業務名 旧山家宿大庄屋役宅長屋門解体工事 工事内容 江戸時代に建てられた建造物を保存 するための解体工事である。

> 建物の復元をするための工事である ため、活用できる構造材の選定と ともに修復までの間、その保管を していくものである。

> また、修復のために必要な写真や図 面等の記録を取るものとする。

積算金額 ¥3,249,000

積 算 内 訳 解体工事費計 ¥3,155,000

消費税 +¥ 94,650

 $(3,155,000 円 \times 3\%)$

合 計 ¥3,249,650

¥3,249,000

(650円切り捨て)

内訳明細書

解体工事

名	称	摘 要	数量	単位	単価	金額 (円)	備考
足力	易架	資材損料及び架払工賃	144	m²	1 500	216	000
養 /	生 費	前面道路トタン貼り	42	m²	1 500	63	000
調	查	記録写真撮影他	1	式		70	000
番号	札付	材料工賃共	68	m²	1 000	68	000
解	体	tq.	68	\dag{a}	16 000	1 088	000
仕 5	分け	ta .	68	\(\phi\)	3 500	238	000
清	掃	A.	68	\dag{7}	2 000	136	000
保	管	構造材造作材他	68	々	5 000	340	000 修復のため
不用相	材処分		1	式		100	000
レッ	カー車	損料	1	\dag{a}	i	200	000
消	眊 品	フィルム・現像・焼付・他	1	々	i	25	000
小	計				1	2 544	000

旧山家宿大庄屋役宅長屋門解体工事業務仕様書 総 則

[適用]

- (1) 本業務は筑紫野市教育委員会が実施する大庄 屋役宅長屋門の解体工事にともなう作業につい て作成するものである。
- (2) 本仕様書に示していない事項については担当 者及び調査責任者とその都度協議し、担当者及 び調査責任者の指示を受けるものとする。



34. 礎石墨書



35. 礎石墨書

- (3) 請負者は、着手前に担当者及び調査責任者と 協議し作業計画を作成し、担当者の承認を得な ければならない。
- (4) 請負者は、文化財調査上必要と思われる事項 に留意して業務を遂行し、文化財の保存に努め る。
- (5) 請負者は、修復に必要な解体材の選定については、担当者及び調査責任者の検査を受けるものとする。

業務

業務の概要及び作業内容は、下記のとおりとする。

- (1) 業務名 旧山家宿大庄屋役宅長屋門の解体工 事
- (2) 工事箇所 筑紫野市大字山家5214
- (3) 業務期間 自 平成3年10月1日 至 平成3年12月31日
- (4) 作業内容 建物の解体工事

解体材の選定

修復に必要な解体材の保管 修復のための記録 不要な解体材の処分

打合せ・検査

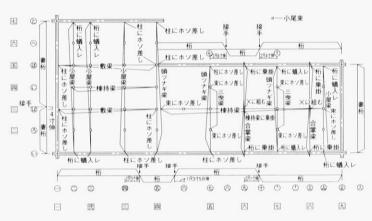
- (1) 請負者は、解体工事に当たっては通行人等の 安全を考慮して実施する。
- (2) 請負者は、作業工程の打ち合わせを十分に行 い、本業務を円滑に遂行するため担当者及び調 査責任者の指示に従う。
- (3) 請負者は解体材の保管のための選定について は、担当者及び調査責任者の検査が終わるまで 処理しないものとする。

成果品

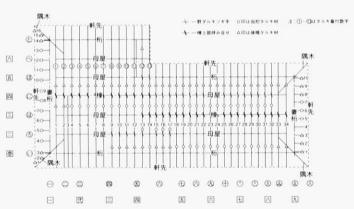
- (1) 修復のために保管されている解体材の一覧表
- (2) 工事に伴う工程写真
- (3) 修復に必要な解体記録



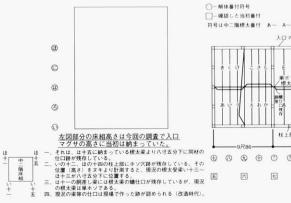
36. 市教委 昭和43年8月撮影

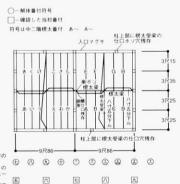


◀桁 梁伏図



▲タルキ伏図





◀中二階床組伏図

A Document on the Complete Dismantlement Work at A Long Entrance Gate of the Big Squire.

1	name of the building 建物名称	A Long Entrance Gate of the Big Squire 大庄屋長屋門				
2	classification 分類	an Important Cultural Property doesn't designate 無指定				
3	date of designation 指定年月日					
4	location 所在地	5214, Oaza Yamae Chikushino-shi, Fukuoka Pref. 福岡県筑紫野市大字山家5214				
5	owner 所有者	Chikushino-shi (City Goverment) 筑紫野市				
6	type of building 建物種別	A Long Entrance Gate of the Big Squire 大庄屋長屋門				
7	date of the building 建立年代	early half, 19th century 19世紀前半				
8	material and structure 材料、構造	wood frame 木造				
9	roof style and roofing material 屋根形式、葺材	hipped and gabled, pantile 入母屋造、桟瓦葺				
10	dimensions 寸法 floor area or living area 平面積 width 間口(桁行) depth 奥行(梁間)	67.606㎡ ≒18坪 14.488m(8間) 3.947m(2間)~5.962m(3間)				
11	outline of work 事業内容 type of repair 修理種別 period of time 期間 cost 経費	complete dismantlement 解体工事 April, 1992~March, 1993 平成 4 年 4 月~平成 5 年 3 月				
12	restoration and conservation report 修理工事報告書 date of issue 発行年月 author, editor 著者、編者 publisher 発行者					
13	history of restoration work 修理歷 radical restoration 根本修理 roof repair 屋根葺替 partial repair 部分修理 painting repair 塗装修理					
14	notes 備考	complete dismantlement in1992, complete preservation of materials 平成 4 年解体工事、材料保存				

Ⅱ-2. 下代屋敷



1. 東面全景



2. 東面

江戸時代、年貢の取り立て役、裁判など民政司法を司ったのは代官や下の手代(下代)と呼ばれる役人であった。が、筑前六宿の代官は寛延4年(1751)から、年貢取り立て役を免除されて、御茶屋、町茶屋の管理と宿場を通る幕府の役人や諸大名の応対だけを任務とするようになったらしい。

山家宿の代官所は御茶屋の裏、小川をはさんでその奥にあったらしい。また、下代(手代)屋敷は西の構口から山手の方に並んで建っていたらしい。しかし、平成5年(1993)時、西の構口際にたつのは1軒のみであった。

下代の日直日誌の文政元年(1818)の断簡文書によれば、「当時山家宿の下代は5人で、1日1人ずつ交代で日直勤務し、その下に使い番がやはり1人日直していたことが分かる。」(筑紫野市 平成11年3月刊『筑紫野市史 下巻』近世 近現代)。

『筑紫野市史 下巻』は安永10年(1781)2月の 「諸通執行之定」の下代の任務を次のように記す。

1. 諸大名や幕府役人の休憩宿泊の場合、人馬次所 に1名出張し、宿内を押え(監督取締)、用心人 馬(予備の人馬)の才判(指図・監督)にあたる



3. 東北面



4. 南面

こと。

- 2. 長崎奉行・日田郡代の宿泊の場合、御進物の才料にあたること。
- 3. 長崎町年寄・漂着異国人付添役人の場合、代官 の代理として挨拶に出ること。
- 4. 御状箱・御用物が町茶屋に宿泊の場合、時々身ケメに出ること。
- 5. 唐銀・公納銀の宿泊の場合、宿役人と共に不寝 番に立つこと。

ところで、下代の扶持として文政2年(1819)山家宿下代須藤次内は、それまでは三石二人扶持であったのが、文化9年(1812)から10年(1813)にかけて、幕府の測量方伊能忠敬の測量の付廻りに、山家宿代官原左太夫と同じ下代倉岡喜助と廻り、その褒状として二石を加増され、五石二人扶持になっている。

さて、西構口際に残った、たった1軒の旧下代の 建物は高嶋正武氏の所有であった。高嶋家は下代と いう家柄であるから、現在の官舎に相当する建物だ った。

高嶋家所蔵の記録によれば、高嶋與一が「忠之公

御代寛永十五年嶋原賊徒打帰御出陣之節御供仕拝備 利米年々仕候事」とあって、召抱えられた(年月不 詳)のが高嶋家の先祖で、以下高嶋四郎、同喜平、 同音次郎、同與助、同喜助、同儀右衛門、同茂作(「原 田宿下代勤被仰付年月不詳」)、同次七郎(「文化六 年』四月父茂作退身跡抱代人=被仰付直=原田宿下 代勤被仰付候事」)、同圓(「文政七年申十二月父次 七郎退身跡抱代人=被仰付翌年酉月不詳原田下代勤 被仰付」)、と続く。

高嶋圓の項に、

- 一、嶋原御陣拝借利米凡二百余年来年々利米上 納仕候處于時安政五戊午四月右上納方御用捨 被仰付候事
- 一、明治三年庚年二月退身仕候

とある。11代目の與十郎については、

一、明治三年庚午二月父圓退身跡抱代人₋被仰付山家宿駅逓届受被仰付同五年⁴_#二月依御改革職務被免候事

とある。従って、「下代」の職務が明治5年(1872) にとかれたことがわかる。

下代とは元来、江戸の公事宿に雇われた手代のことである。それは、訴訟のために田舎から出てきた人の補佐人として訴状、差紙、返答書の世話をはじめ法廷内の諸手続きほかの斡旋などをした。しかし、江戸時代から明治新政府に移って「下代」をとかれたにも拘わらず「下代」の屋敷という言い伝えが今日まで残っていることと、後に触れるように、柱がほぼ1間毎にたち、風蝕も柱の外側にかなり見られるので、建立年代は幕末と思われる。

山家宿の西の入口である構口の西脇にたち、改造 点も後に触れるように少ないので、山家宿の景観上 重要な建物であった。

1. 構造形式と規模

正面4間、側面5間半の背面に半間の縁側を付ける「つの屋」(鍵屋)である。寄棟造り、麦藁葺き、背面及び正面向って左側面の一部分のみ波子鉄板を覆せる。縁側は桟瓦葺きである。L字形平面の南に1間半の下屋を出す。下屋は瓦棒鉄板葺きである。西側6畳のツラに合わせて南側に2階建てを増築し、桟瓦葺き、切妻造り(妻正面)とする。その西側に切妻造り、桟瓦葺きの「なや」(納屋)を突き出す。

2. 解体前の破損状況

2-1. 基礎及び地盤

敷地は東側から北側にかけて、安山岩切石の見知石積みの石垣を廻らす。北側は西から東へ緩い勾配のある道路となっているので、東方へ盛土した敷地と推察される。南方に構え口があるので、まさに山家宿の西の玄関口にあると言えよう。

盛土といえども江戸時代に造成されたものであるから、現在は落ちつき、水はけは良好のように見られる。東方石垣上に土塀を築き、頂部に瓦を葺く。建立当初からこの形式の土塀であったと思われる。また、何回か修理を経ているが極端なひ

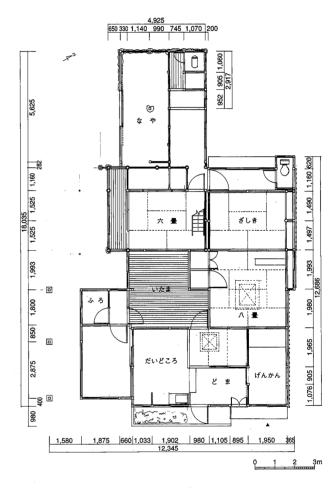


図1 1階平面図

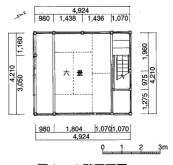


図2 2階平面図

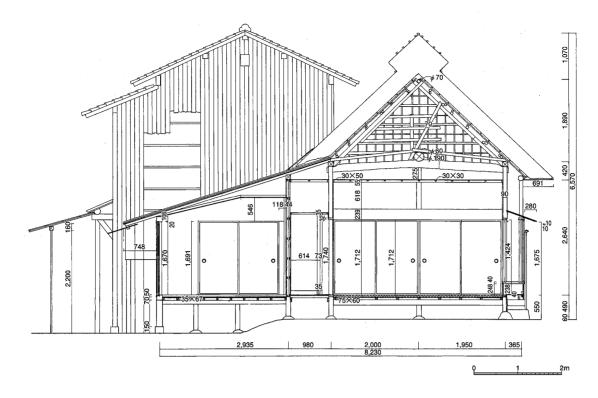


図3 梁行断面図

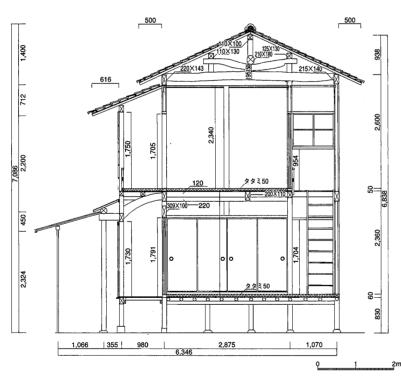


図 4 2 階梁行断面図

び割れなどは平成6年度現在なかったので、敷地 としては良好である。

礎石は全て凝炭岩である。基壇はわずかな土盛 程度で、特にない(周囲の地上げで目立たない)。

2-2. 軸 部

土台はなく、糸面取りの角柱は礎石の上にたつ。 柱は杉材(座敷と土間)である。「ざしき」6畳 と「8畳」境の指物は杉材で2本溝を 付ける。「玄関」と「8畳」境及び「ど ま」の指物は松材である。南側の下屋 (風呂)の柱も全て杉材である。

2 階の柱も杉材を使用する。指物は 松材である。西の突き出し座敷部分の 柱は桧材である。

2-3. 小 屋 組

鍵屋の母屋は梁に軒桁がのる折置組、 扠首構造である。扠首は梁に突き付け る。

増築の2階は京呂組、和小屋で、二 重梁に棟束がある。

2-4.屋 根

寄棟造り、麦藁葺きである。背面及 び南(正面向って左)側面の一部分に 波子鉄板を被せる。正面向って右側面、 軒先も波子鉄板を被せる。背面の縁側 は桟瓦葺きである。南側の増築部分(下

屋) は瓦棒鉄板葺きである。西方の「なや」(納屋) は切妻造りの桟瓦葺きである。

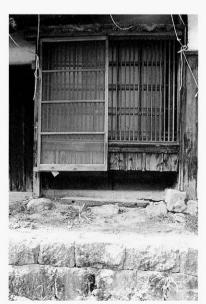
藁葺き屋根部分の「8畳」手前(東側)は一部 分藁が完全にないので雨漏りがひどい。「どま」 手前の一部分、桟瓦部分も一部雨漏りが著しい。 繋ぎ部分も雨漏れしていて、ベニヤ天井にしみが 残る。西側背面の榑縁の桟瓦も一部分野地板がは



5. 南面2階



6. 西南面



7. 北側出格子



8. 北側出格子の東面



9. 玄関内部



10. 玄関と土間出入口



11. 玄関大和天井



12. 8 畳北面

がれ、いたみがひどい。 轉縁の北隅の洋式便所に も雨漏れが著しい。 西側の下屋突き出し接続部分 の北側も軒先は野地板が腐蝕していて一部欠損で ある。

2-5. 造作と建具

「げんかん」は正面にガラス戸引違いをたてる。 内部南側(左側)は腰板ガラス戸片引きをたてる。 「げんかん」と「8畳」の境は障子引違いをたて る。

「どま」は東側腰高窓にガラス戸をたて、一部 アルミサッシ戸及び片開きアルミサッシ戸をたて る。下屋(増築部分)との境はガラス格子戸引違 いをたて、「8畳」との境はガラス戸引違いとす る。その南(西側)の片開き板戸は新しい。

「8畳」と「ざしき」(6畳)境は、襖4枚引達いをたてる。「8畳」の北側の出窓内側は障子戸引違いを入れ、外側にガラス戸引違いをたてる。そして外側に竪格子を付ける。南側は腰板障子戸引違いをはめて「板間」に続く。

西側北方の「ざしき」は縁側境に腰板障子引違いをたてる。

槫縁は外側にアルミサッシ戸引違いを用いる。 繋ぎ部分はアルミサッシ戸引違い、網戸付きで



13. 8 畳東北面



14. 8 畳東南面

ある。2階建てとの境は襖引違いをたてる。

西側の「なや」は榑縁境にガラス戸片開きをたてる。北側はガラス戸引違い、一部腰高ガラス戸引違いをたてる。西側は便所があって、腰高ガラス戸引違いをたてる。「なや」の南側は中央間に両引き板戸をたてる。

2階建て部分は1階「6畳」の南側に腰板障子 引違い(1間半に2本溝)をたて、南側の榑縁外 側はアルミサッシ戸引違いを入れる。2階は階段 上り突き当たりに腰高ガラス戸引違い、「6畳」 と階段境2間に2本溝に襖2枚をたてる。南側に 手摺を設け、2本溝1間半に雨戸付きとする。

正面(東)の外壁は波子鉄板、一部合板、一部腰板目板壁がある。向って右側(北面)は内法高まで目板壁とし、その上部は白漆喰塗りである。向って左側(南面)はモルタルを吹付ける(下屋)。2階建て部分は鉄板張り、西側の張り出し部分の「なや」は板壁である(基礎は鉱滓レンガ2~4段を積む)。

背面(西側)の榑縁の北端の洋式便所の外壁は 合板仕上げで、張り出し部分はモルタル塗り真壁 である。

床は、「げんかん」及び「だいどころ」は土間、



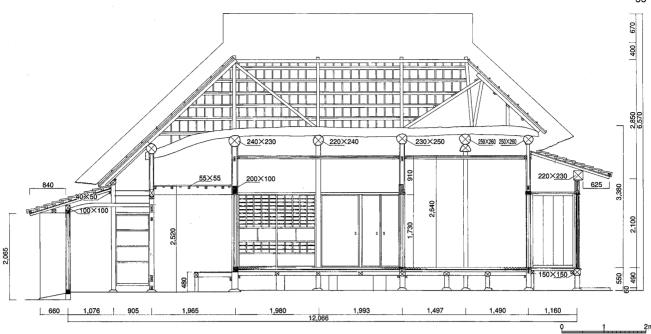


図 5 桁行断面図

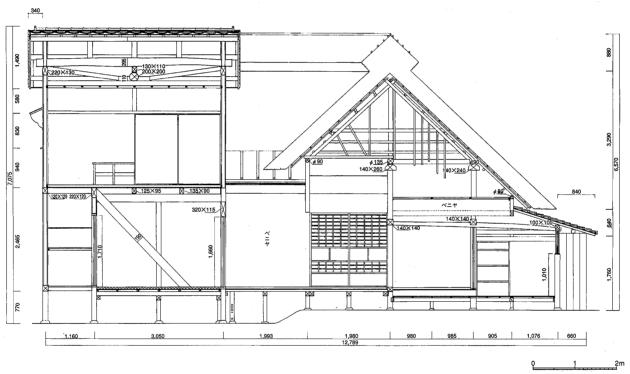


図 6 2 階桁行断面図

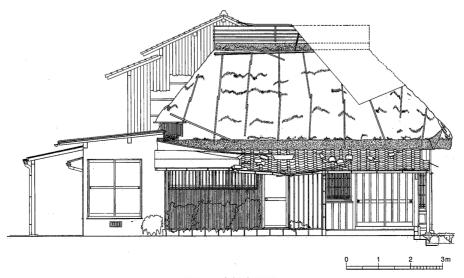


図7 東側立面図



15. 座敷北面



16. 座敷南面

「だいどころ」の一部に3畳程の板張りを設け出 囲炉裏がある。「だいどころ」南側の下屋及び西 側の2間四方の「いたま」とその西側2階建ての 榑縁及び「ざしき」(6畳)座敷の西方の榑縁な どが板張り床で、残り3部屋は畳敷きである。西 方の「なや」は土間である。

「どま」や「だいどころ」は改造のため床板やベニヤ張りの天井は新しい。南側の下屋は東側の一部分に雨漏れ跡が残る。床のパーケットブロック、箱目地天井などは新しい。「8畳」の南側の「いたま」の床は縁甲板張りでボード天井を張り、壁はベニヤ合板とする。これらの縁甲板、ベニヤ天井板は新しい。



17. 土間南面



18. 台所北面

の1階は根太天井で、2階は竿縁天井である。西 側突き出しの「なや」は化粧屋根裏である。

西側の「ざしき」の西側の小壁は白漆喰がはがれ落ちている。尚、この「ざしき」の天井は当初のものらしい。しかし、その東側の「8畳」の天井はやり直したらしいことはさきに述べた。

3. 平面計画

礎石より柱芯を割り出してみると、1間は6尺5 寸である。そして、正面4間、側面5間半のL字形 平面が建立当初の形式で、現在の寄棟造り、藁葺き、 扠首構造の部分のみが当初の規模であることがわか る。西側の榑縁も当初からのものと思われる。

4. 後世の修理と改造

西側の2階建て部分は昭和2年に造ったらしい。 また、「だいどころ」の南側の下屋は波子鉄板葺き で、屋根を突き出し、2階建て部分と同様に昭和の 増築である。藁葺き屋根の部分のみが古い。

「8畳」の北側の出窓はあとづけで、もとは真壁 らしい。敷居があるので、一時床上から開口にした らしいが、土壁の痕跡があるので、これを生かして、 当初は土壁と推測される。西側の縁側の北隅の洋式

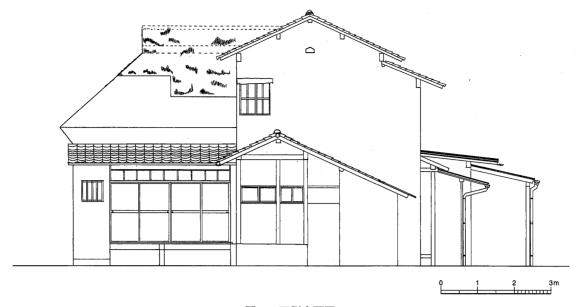


図8 西側立面図



図 9 南側立面図

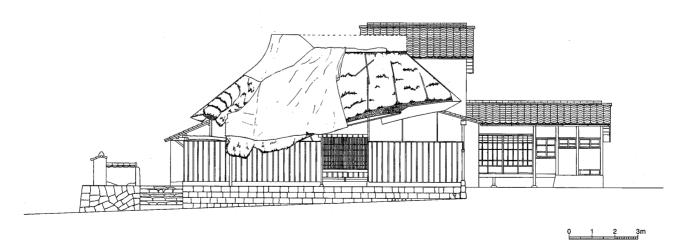


図10 北側立面図



19. 台所西面



20. 板間

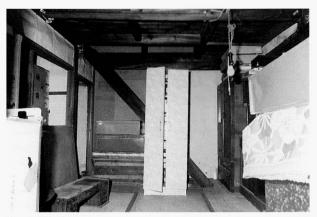
便所は榑縁を改造したもので、当初はなく新しい。 建具は古いものは一切ない。しかし、「ざしき」 の北側の違棚、袋戸棚の襖戸などは当初のものかも 知れない。違棚の天板は風蝕著しい。

「8畳」の床下に解体中に炉を発見した。「8畳」の床下、「ざしき」との境よりに炉近辺より東へ土盛の煙道らしきものを発見したが、それが何であるかは速断できない。

基本的には、旧下代の建物は正面4間、側面5間 半のL字型「つの屋」(鍵屋)、寄棟造り、麦藁葺き である。

正面に向って左手は全て土間床である。「8畳」 には引違い戸で出入する。「8畳」の左側(南側) の手前(東側)1間は南の板床部分(もと納戸らし い)に引違い戸で接続している。

柱は全て細いが、「8畳」の西側に中柱がたち、 ほぼ1間毎に柱がたつので、建立年代は恐らく幕末



21. 板間の南面



22. 南側 6畳の東面

であろう。『明治参拾有貳年己亥四月/家上葺替式 目論薄/榮樹堂』と『明治参拾八年度/家上葺換目 論見/乙巳舊壱月見積』の記録が残る。これらによ れば、明治32年(1899)や明治38年(1905)に、一 部分ずつ屋根の葺替が行われたことが窺える。

2 階建ての部分は昭和時代(「昭和2年」の棟札 あり)、背面突き出し(納屋)も昭和の増築である。 平成5年度、井上建設(甘木市)により2階建て 部分を残して解体され、古材をプレハブに格納保存 した。

5. 現状変更(復元)

現在の藁葺き部分が当初の形式と推定されるので、 大きさは正面4間、側面5間半の鍵屋で、寄棟造り である。背面の榑縁は現状通り下屋としてつく。従 って、南側の下屋や西方の2階建て部分などを取り 除いた規模形式となろう。また、「玄関」は1間庇 で入側に建具が入る。

6. 発見物及び資料

(発見墨書)

1. 昭和2年の棟札。

桧材 総高31.2cm 幅11.2cm 厚1.8cm 台鉋 丸釘 5本 (厚さ0.5cmの板で表面に板を重ねて牛梁 に打ち付ける)

(裏面) 文字なし

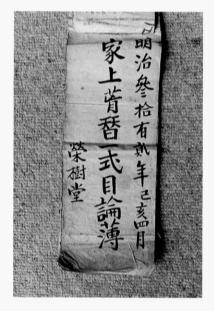
(表面)

上棟 紀元二千五百八十七年 昭和二年十一月六日 第三十三代高島國雄種徳









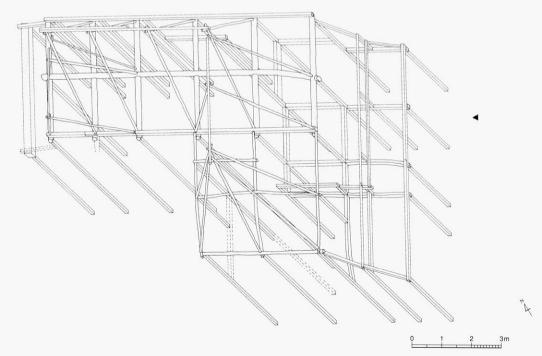


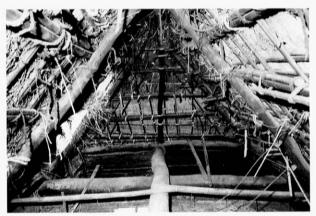
図11 架 構 図



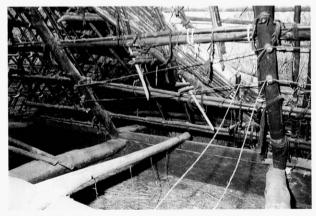
23. 2階6畳東南面



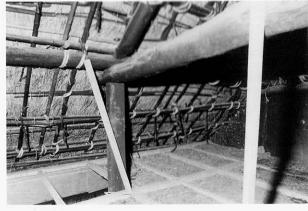
24. 2階6畳西北面



25. 小屋組



26. 小屋組



27. 小屋組



28. 小屋組



29. 解体北面

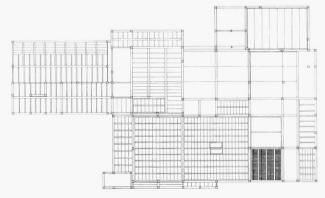


図12 天井見上図

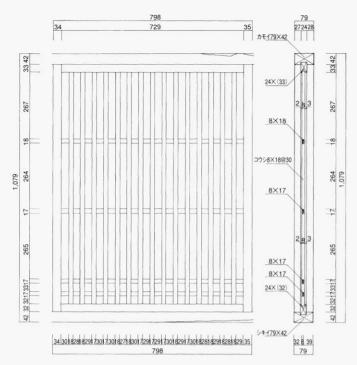
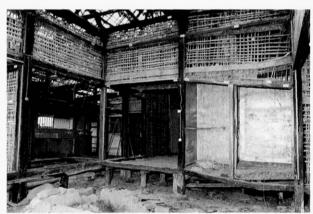


図13 玄関脇格子詳細図



30. 解体東北面



31. 解体 8 畳東北面

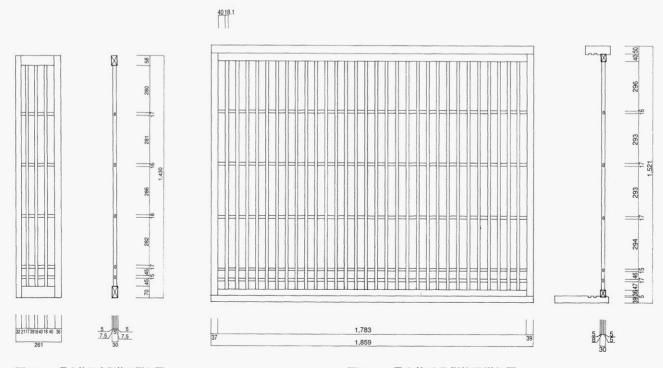


図14 8畳出格子東側格子詳細図

図15 8畳出格子北側格子詳細図

7. 参考資料

井上建設(甘木市)が平成6年度に解体し、柱や 梁などの古材を郡屋跡のプレハブに保管した。その 時の見積書等を次にあげる。

山家宿下代跡解体工事

工事関係者

工事請負者 株式会社井上建設 甘木市大字牛鶴

代表取締役 井上 孝司

現場代理人 渕上 末喜

主任技術者 渕上 末喜

仮 設 工 事 前出 株式会社井上建設

大工棟梁 林田 信行

大 工 矢山 正行

作業員 岩下 峯夫

解体工事 大工棟梁 林田 信行

大 工 矢山 正行

渡辺 幸男

解 体 工 篠田 哲次 篠田 成美

作業員 荻本 耕平、酒井 義光、

岩下 峯夫

雑 工 事 大工棟梁 林田 信行

大 工 矢山 正行

作業員 荻本 耕平、酒井 義光、

岩下 峯夫

区 分	金額 (円)	備考
工事請負費 假本工事 報 工事 費 稅 額	2,694,068 395,530 1,172,917 447,357 599,805 78,468	調查作図、木部番付 復元部分解体、除却部分解体 収納運搬、釘仕舞、整地 共通仮設費、現場経費、一般管理費

事業の経過

工期 自平成5年9月1日~至平成5年12月20日

摘 要
着手
完了
着手
手
完了
:了
三了

1. 仮設工事

建物解体に先立ち、建物の調査・実測を行い、

平面図を作成、解体復元部分と解体除却部分の指示をいただく。

これに基づき、柱位置を基準として、平面番付を定め解体復元部分の全ての部材に番号札を付し 写真撮影及び必要な諸調査を行った。

一部小屋裏の見へ隠れ部分については、天井の 一部を取除き調査及び番号札の取付の写真撮影を 行った。

2. 解体工事

本体の解体承認により、解体工事に着手、順序 よく丁寧に解体し、各部分の仕様等については特 に写真撮影を行い記録とした。

解体した復元部分の部材は全て、指示された保存倉庫へ搬入一時収納する。搬入以外の部材は承認の上場外搬出とした。屋根材は麦藁葺きのため、使用不能であり場外へ搬出処分する。古瓦については木材と共に保存倉庫へ搬入した。

3. 雜工事

保存倉庫へ収納した木材については再び倉庫外へ出し、水洗を行う。十分に乾燥後、釘仕舞を行い保存倉庫へ分類し収納した。

尚、長尺桁については収納出来得ないため外部 へ置き、全体をシートで巻き込み養生保存に努め た。

解体跡地については、調査の関係もあり、清掃 による均し程度の整地を行った。



32. 解体材収納

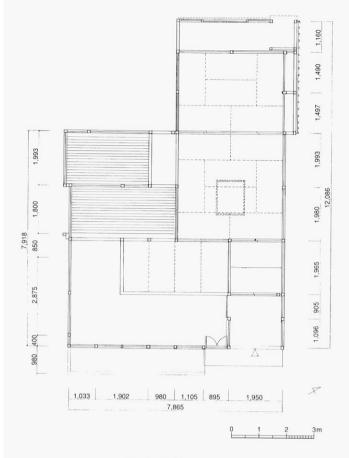
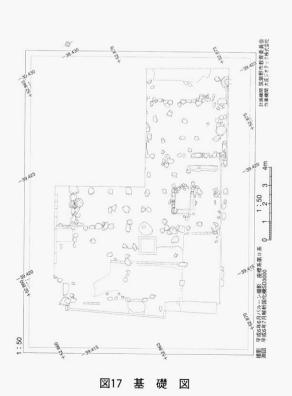
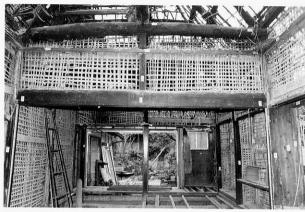


図16 復元平面図

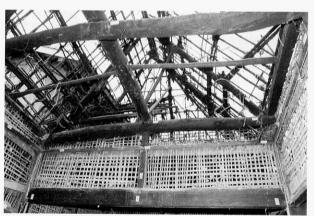




33. 解体座敷東面



34. 解体座敷西北面



35. 解体小屋組



36. 基礎

A Document on the Complete Dismantlement Work at Gedai House.

	Document on the complete Distractivement	
1	name of the building 建物名称	Gedai House 下代屋敷
2	classification 分類	an Important Cultural Property doesn't designate 無指定
3	date of designation 指定年月日	
4	location 所在地	5126, Oaza Yamae Chikushino-shi, Fukuoka Pref. 福岡県筑紫野市大字山家5126
5	owner 所有者	Chikushino-shi (City Goverment) 筑紫野市
6	type of building 建物種別	Gedai House 下代屋敷
7	date of the building 建立年代	half, 19th century 19世紀半
8	material and structure 材料、構造	wood frame 木造
9	roof style and roofing material 屋根形式、葺材	hipped roof, wheat straw 入母屋造、麦藁
10	dimensions 寸法 floor area or living area 平面積 width 間口(桁行) depth 奥行(梁間)	78.656m²≒20坪 12.066m(6間) 7.865m(4間)
	outline of work 事業内容 type of repair 修理種別 period of time 期間 cost 経費	complete dismantlement 解体工事 April, 1994~March, 1995 平成 6 年 4 月~平成 7 年 3 月
12	修理工事報告書 date of issue 発行年月 author, editor 著者、編者 publisher 発行者	
13	history of restoration work 修理歴 radical restoration 根本修理 roof repair 屋根葺替 partial repair 部分修理 painting repair 塗装修理	1899(Meiji32), 1905(Meiji38) 明治32年、明治38年 1927(Showa 2) 昭和 2 年
14	notes 備考	complete preservation of materials except wheat straw 屋根材料以外材料保存

Ⅲ-3. 郡屋跡灰屋と裏門



1. 灰屋と裏門北面



2. 灰屋東北面

郡屋(中の茶屋)は大名の参勤交代の際に、宿役人や村役人が集まって村民総がかりで、人馬の輸送にあたるところであった。郡屋を預る郡屋守は水城家があたっていた。その様子は文久2年(1862)の古図であらましを知ることができる。現在、この中で藁葺き屋根の郡屋土蔵が市指定文化財(昭和60年6月16日指定)として残る。その他に、絵図に見える灰屋と裏門及びその他の付属建物が残る。しかし、順次解体され、材料が保存されていることは前に述べた。しかしながら、これら郡屋の建物は山家宿の歴史的景観を残しているので、注意を惹くものばかりである。ここで触れる灰屋と裏門は平成6年度に解体復元して残存する。

位置は、山家宿の西の出入口となる構口の北東に当る。

灰屋は肥料小屋である。

1. 構造形式と規模

灰屋は桁行1間、梁間1間、切妻造りの桟瓦葺きである。南側が吹放しで、両側面(東側と西側)と北側は厚さ46cm程の土塗壁である。北側中央に床上2尺程の高さに2尺×1尺5寸程の開口をあける。



3. 灰屋西南面



4. 灰屋南面

裏門は1間1戸の薬医門である。切妻造りの桟瓦 葺きで、正面向って右側(西側)に灰屋が接続し、 左側(東側)に土塀が付く。

尚、灰屋の西側面に下屋を設けて便所がつく。東 西1間、南北2間の片流れ屋根で、桟瓦葺きである。

2. 灰屋の解体前の破損状況

2-1. 地盤及び基礎

地盤は北側になだらかな傾斜があるため、北側に砂岩切石を約1m程積み上げて、土盛をし、流れをとめている。土地そのものは腐棄土であるため若干湿っぽいが、水はけが悪い地盤ではない。従って、建物の基礎は北側砂岩切石積み(約1m)を利用し、背面柱は切石砂岩礎石上にたてる。

2-2. 軸 部

背面(南側)のみ皮むき丸太柱2本をたてるが、 他に柱はない。厚い土壁に小屋組をもたせる。丸 太柱は杉材である。桁や梁(大梁、小梁)及び牛 梁は松材である。母屋桁、棟木は杉材である。束 も杉材である。

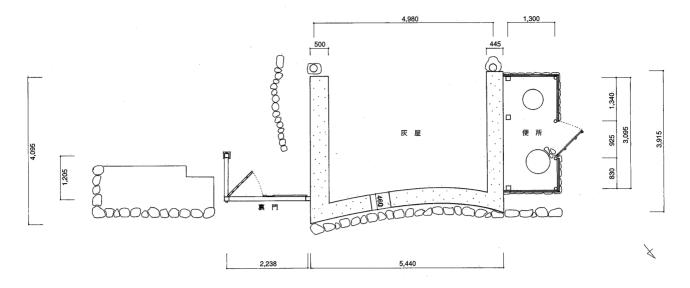


図1 灰屋と裏門平面図

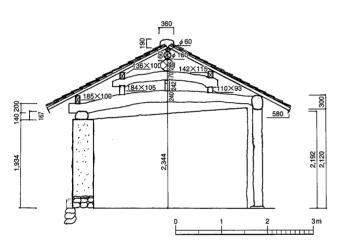


図 2 灰屋梁行断面図

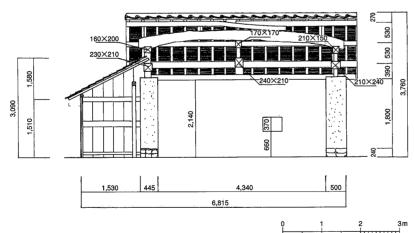


図 3 灰屋桁行断面図

2-3. 小屋組

二重梁、棟東立の和小屋組である。西側の梁間 土壁上の大梁中央下に丸太を切断した高さ10cm程 の台を置く。二重梁上に牛梁をかけて、棟東をたて る。但し、牛梁は中央で反り棟木と直接接する。従 って、西側の入側半間程に棟束を付けるので両端 合わせて棟束は3本である。棟木は東側の入側半間の所で約半間程重ね合わせる丸太である。母屋桁も中央で継ぐ。中央の大梁は両端京呂組である。正面は厚い土壁上に軒桁を置きその上に梁を置く京呂組である。この軒桁は土壁に半分程入り込んでいる。背面は柱頭に桁を置き、梁を上に掛ける。

2-4.屋 根

切妻造りの桟瓦葺きである。軒は1軒で、疎垂 木である。垂木、母屋桁隠しに板を打つ。

屋根瓦は欠損が多い。軒平瓦は殆どない。屋根 瓦の残存率は約80%である。棟瓦(熨斗瓦、棟丸瓦 など)は全てない。鬼瓦もない。螻羽瓦も殆ど欠

> 損である。雨漏りがひどく、東側面はかなり 吹き込んでいるらしく特に前(北側)半分 の小梁、大梁にむれ腐れが見られる。

2-5. 造作と建具

東側と西側及び北側の三方は土壁で、東側と西側は割石2段積みの上に土壁を築く。正面(北側)ほぼ中央60cmの位置に開口部を設けることは前に述べた。また、背面(南側)は吹放しである。

床は土間、天井は化粧屋根裏で、野地に 割竹を用い、藁を敷いて土をのせ、瓦を葺く。 正面(北側)は土壁に大梁尻(3本)を

もたせているためか、ひび割れが大きく、土壁は 内側に湾曲している。大きな亀裂が2個所見られ る。東側の土壁には2個所、西側の土壁には1個 所のひび割れが入る。特に裏門の棟木(小梁端に かかる)や母屋桁(大梁にかかる)などがのる東 側の土壁は荷重のため崩れそうであった。



5. 灰屋と裏門東南面



6. 裏門東面

3. 裏門の解体前の破損状況

3-1. 地盤及び基礎

地盤は灰屋に隣接するので同じである。しかし、 正面(北側)に切石段があって、本柱は砂岩(布 敷)、控柱は切石花崗岩礎石上にたつ。

3-2. 軸 部

本柱は角刃の手斧仕上げで、桧材である。控柱 も角刃手斧仕上げであるが、杉材でどちらも角柱 である。正面向って右(西)側の柱は約20cm左(東) 側より高い。柱は足元貫で固める。右(西)側は 本柱から、背面(南側)の軒桁へ投げ掛け梁(上 部にのる)を渡す。背面(南側)の軒桁は西側の 灰屋の大梁へかかる。正面柱間本柱間に蹴放しを 付ける。東側は梁を本柱と控柱上に渡して、西側 は本柱に突き刺す。正面(北側)の軒桁は東側は 梁の出た先端へかけ、西側は本柱に突き刺す。背 面(南側)の軒桁は東側は梁上にかかるが、西側 は灰屋の大梁に突き刺す。

3-3. 小屋組

正面向って左側(東側)は梁上に棟束で棟木を 受ける。右側(西側)は梁上に直に棟木をのせる。

3-4.屋 根

切妻造り、桟瓦葺きである。軒は1軒、太鼓落



7. 灰屋小屋組



8. 灰屋小屋組

しの疎垂木で、鼻隠し板付きである。野地は割竹で、杉皮をのせ、土をのせて、桟瓦を葺く。正面(北側)の軒桁と本柱筋の間に鏡天井を張るが後補である。妻飾りは虹梁に束である。棟木と軒桁木口に板を打つ。但し、背面(南側)の木口板は欠損である。

屋根瓦は多量に欠損である。特に、前後軒先、 正面向って左(東)側の螻羽瓦などが欠ける。棟 瓦(熨斗瓦・棟丸瓦・鬼瓦など)は全てない。屋 根瓦の残存率は約80%である。

3-5. 造作と建具

扉は桟唐戸、目板打ちで、内開きである。これ は仮の扉である。正面向って左(東)側柱上部に 釣り金物が残るので、扉はもと、釣り金物で吊る。 床は土間。天井は化粧屋根裏である。

4. 便所の解体前の破損状況

4-1. 地盤及び基礎

地盤は灰屋に隣接するため同じである。基礎は 切石礎石で、上に皮むき丸柱や角柱をたてる。

4-2. 軸 部

西側は皮むき丸柱3本がたち、東側は灰屋土壁 に沿って角柱3本をたてる。西側柱の柱頭に桁を

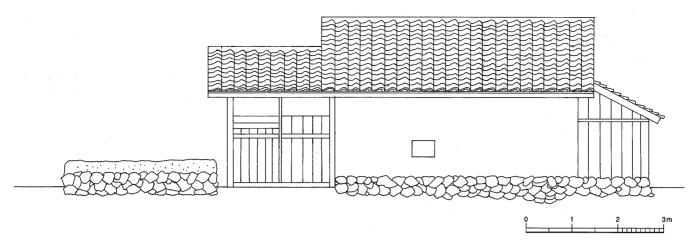


図4 灰屋と裏門北側立面図

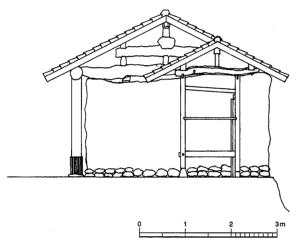


図5 灰屋と裏門東側立面図

付ける。東側は角柱上に桁を付けるが、灰屋の大 梁を垂木受けに利用する。

4-3. 小屋組

差し掛け屋根なので、灰屋大梁を利用した垂木 掛と軒桁に垂木をかけている。

4-4.屋 根

軒は1軒、丸垂木、疎垂木である。妻飾は竪板 を張る。屋根は桟瓦葺きの片流れである。

4-5. 造作と建具

三方竪板壁で、西側のほぼ中央部を出入口とする。板戸片開きは欠損である。

床は土間で、こえだめ(大)と小便用の甕を置く。 天井は化粧屋根裏である。

便所は全体的に次のような破損を指摘できる。

- 1.屋根瓦は欠損多い。特に軒先、螻羽瓦の欠損は著しい。
- 2. 木負、茅負などはない。軒の先端は丸竹に荒縄まで見える。
- 3. 背面(南側)の螻羽には波子鉄板を張る。
- 4. 灰屋土壁側(東側) 3 本の角柱や桁は柱の転 用材(古材利用)である。

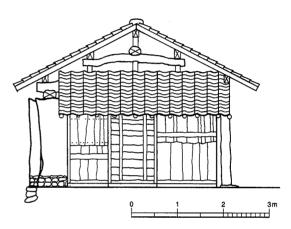


図 6 灰屋西側立面図

5. 正面(北側)の桁隠しに板を丸釘で打つ。背面(南側)にはない。

建立年代は灰屋、裏門(棟門)と同時期であ ろう。しかし、当初からここにあったものと思 われるが、現在の便所は後にやり直している。

5. 平面計画

灰屋は桁行1間(約1丈6尺5寸)、梁行1間(約 1丈2尺4寸)の土壁造りである。

裏門は1間(約7尺4寸)1戸の棟門である。

6. 後世の修理と改造

6-1.灰屋

背面(南側)の柱2本は根本の外側半分に波子 鉄板を被せて保存している。中央大梁上の中央の 束(大梁と小梁間)は転用材である。正面向って 左(東)側のほぼ小梁先端束の位置の大梁下部の 土壁上に角木10cm×10cm×2cmを置く。これは裏 門の棟木荷重を支えるためらしい。

全体的に雨漏れがひどく、野地も穴があいている。正面向って左(東)側、背面(南側)の桁、



9. 灰屋と裏門接続部分



11. 裏門小屋組



10. 裏門軸組



木口は風蝕著しい(木口板なし)。正面向って左 (東)側小梁先端に裏門の棟木がのり、裏門の軒 桁が大梁上にのびるので、荷重がかかり土壁のひ びは大きい。

建立年代は裏門と同時期の幕末であろう。壁の 塗り替えはあったかも知れないが、細部は古い。 南側母屋桁の西半分が新しいので後補であろう。 垂木は角刃の手斧仕上げである。土壁は蜂の穴だ らけである。

6-2. 裏 門

本柱と控柱上部左(東)側は板を打ち、補強している。本柱は桧材、控柱は杉材、梁は松材、垂木は杉材である。扉は古いものがない。正面向って左(西)側、棟束は木舞跡や敷居、鴨居の跡があるので柱の転用材らしい。本柱2本と、控柱1本の全ての柱と梁及び軒桁などは角刃の手斧仕上げである。

正面、楣と軒桁間の鏡天井は後補である(軒桁に板掛を丸釘で打つ)。正面向って左(東)側の

図7 灰屋と裏門南側立面図

控柱の花崗岩の礎石は、左側面に角穴があり、礎石と柱根の間に板をはめ込むので転用材と推定される。また、正面扉は、中央に細い丸釘を付ける。扉は打ち付けで開けられない。以上のように破損著しく、古い扉や瓦など欠損も目立つけれども、梁はともかくとして、本柱2本、控柱1本全ての柱が角刃の手斧仕上げで古い。

建立年代は灰屋と共に幕末であろう。

山家宿郡屋灰屋裏門解体復元工事

工事関係者

工事請負者 株式会社井上建設 甘木市大字牛鶴

代表取締役 井上 孝司

現場代理人 渕上 末喜

主任技術者 渕上 末喜

解 体 工 事 前出 株式会社井上建設

大工棟梁 林田 信行

大 工 矢山 正行

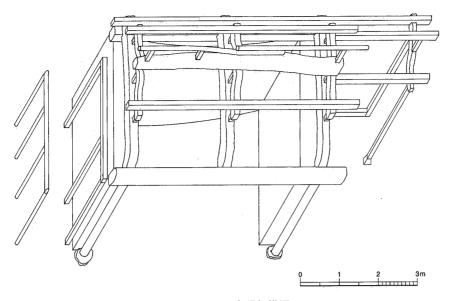
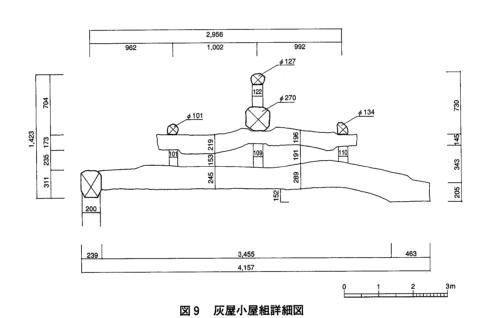


図8 灰屋と裏門架構図



作 業 員 荻本 耕平、酒井 義光、 岩下 誠、岩下 峯夫

仮設工事 前出 株式会社井上建設

基 礎 工 事 前出 株式会社井上建設

栗石、砂利納入 ㈱朝倉砕石 甘木市 江藤 一任

鉄筋納入 今泉商店(合)会社 甘木市 今泉 昇

コンクリート納入、㈱朝倉生コンクリート 甘木市

福田 稔

躯体工事 左官棟梁 酒井 荒海

官 酒井 昭次、坂井 義昭、 左 石橋 幸孝

作 業 員 荻本 耕平、酒井 義光、 岩下 誠、岩下 峯夫|

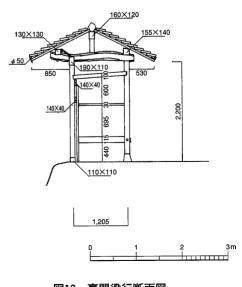


図10 裏門梁行断面図

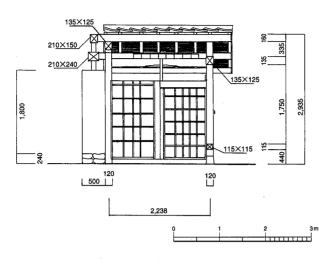


図11 裏門桁行断面図

壁土材納入 西商店 甘木市

西 宮彦

大工工事 大工棟梁 林田 信行

大 工 矢山 正行

作 業 員 荻本 耕平、酒井 義光、

岩下 誠、岩下 峯夫

木材納入 有限会社大里製材所 甘木市

大里 順治

竹材納入 鯉川 一男

防腐防虫剤納入(竹材) 島本昭平商店 八女市

島本 昭平

杉皮納入 有限会社大里製材所 甘木市

大里 順治

屋根工事 有限会社本石産業 甘木市

本石 昇

葺 工 北原 誠 矢野 鹿男

瓦 納 入 株式会社都築倉吉窯業 愛知県碧南市

都築 忠知

雑 工 事 建 具 手島木工所 甘木市

山口 勝征

建具工田中学

塗装工事 合資会社上野塗装店 甘木市

上野 司

塗装工 平木 重幸

床三和土叩き 前出 株式会社井上建設

真砂土納入 川口商店有限会社 甘木市

川口 辰男

左官棟梁 酒井 荒海

左 官 坂井 義明

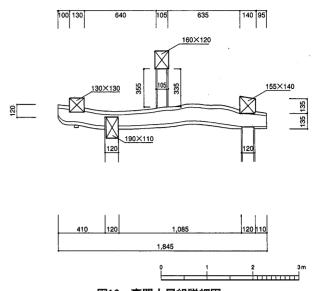


図12 裏門小屋組詳細図

事業の経過

工期 平成6年8月9日より平成7年3月20日

年月日	摘	要	年月日	摘	要
平成6年			平成7年		
8月10日	解体工	事着手	1月24日	養生期	間
9月6日	解体工	事完了	1月24日	仮設工	事完了
9月7日	仮設工	事着手	1月25日	木工工	事着手
9月10日	基礎工	事着手	2月13日	木工工	事完了
9月26日	基礎工	事完了	2月13日	屋根工	事着手
10月1日	躯体工	事着手	2月15日	躯体仕上	工事着手
11月15日	躯体工	事完了	2月25日	屋根工	事完了
11月16日	養生期	間	3月1日	雑工事	着手
			3月6日	躯体仕上	工事完了
			3月18日	雑工事	完了
			3月20日	全工事	完了

区分	金 額(円)	備考
工事請負費	5,665,000	
解体工事	1,387,491	調査、解体、発生材処理
仮設工事	375,980	水盛遺方、足場損料、
		小運搬費、養生上家
基礎工事	313, 277	床掘る、栗石地業、コ
		ンクリート打設、鉄筋
		配筋、残土処理
躯体工事	1,302,600	壁土、下部石積、壁棟
		上げ、仕上塗り、左官、
	E72 40C	普通作業員 *** ****
木工工事	573,426	補足木材、雑資材、大工、 普通作業員、竹材野地
屋根工事	578,960	栈瓦葺、棟瓦、鬼瓦、器
上 似 工 事	370,300	具損料、小運搬費
雑 工 事	255, 675	板戸、内外古色塗装、
"-		土間叩き
諸 経 費	713,000	共通仮設費、現場経費、
		一般管理費
消費税	165,000	消費税額

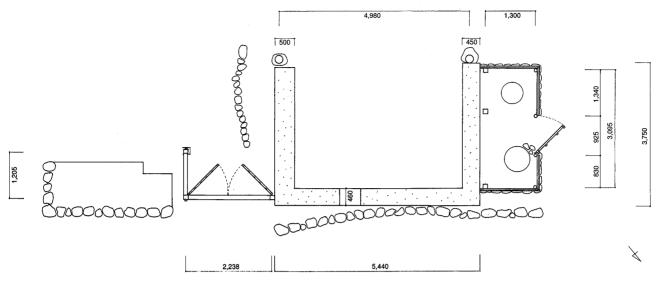


図13 灰屋と裏門復元平面図

1. 解体工事

建物解体に先立ち、平面番付を定め解体する全 ての部材に番号札を付し、必要な諸調査、実測、 写真撮影を行った。

工事着手後は、順序よく丁寧に解体し、部材は 全て仮置場へ集積し釘仕舞を行った。

釘仕舞終了後、清掃のため水洗いを行い、充分 に乾燥後、再使用材と不能材に仕分けを行い、不 能材については整理格納し、再使用材については 充分な養生を行い、復元工事へ備えた。

練壁部については、最下部の石積及び壁体に補 強材として混積してある瓦材等についてその方法 等を充分に確認しながら解体作業を行った。

2. 仮設工事

解体工事終了後、整地を行い、水盛遺方を出し、 平面図に基き、前面通りの柱下の礎石の位置確認 と芯出しを行い復元工事に備えた。

躯体工事中、練壁土築上げの雨水、早乾き等に よる損傷防止のために期間中仮屋根を設け養生を 行った。

3. 基礎工事

地盤下は全て埋設工法となるために、鉄筋コンクリート地業の現代工法となった。

図面により所定の深さに根伐を行い、栗石敷並ベランマーにて充分搗固め、目潰砂利散布、鉄筋加工組立、仮枠取付コンクリートは充分に混練したものを所定の厚さに打込み、養生も充分に行った。

尚、南側柱下の礎石についてはコンクリート打 設時に位置、柱芯間違いのない様据付を行い固め た。

4. 躯体工事

南側柱の礎石に基準芯を出し、基礎コンクリート面へ練壁の芯が厚さの墨出しを行う。又竪遺方を出し、水糸を張り築上げ時の壁体のねじれ、傾き、不陸のない様に施工した。

先ず、雑石による最下部石積を高さ30糎程度行い、その上部へ練壁土にて築き上げる。壁厚45糎壁高2米40糎となる。1回の築上高を30糎程度とし取毀時に壁内より出た瓦材を補強材として再使用しながら築上げる。後4日程の乾燥期間を置き乾燥の具合を見ながら、その上段の築上げにかかり、壁土の重さによって下部壁体にねじれ、傾き等のない様充分注意しながら施工した。

築段数は8段となり完了までには1.5ヶ月余を 費やした。

築上げ完了後は乾燥期間を充分に取り木工工事 に着手する。

壁土材は、良質の粘土を使用、藁苆多く混入し ミキサーにて充分に混練、練置きを行い使用した。 仕上げは内外共中塗材による仕上であり、先ず 村直し行い充分乾燥の後中塗り、仕上塗りを行っ た。

各塗り戸は直前に清掃を行い、適度の水湿りを 当えて塗り方にかかった。

中塗り土は良質の荒土を篩で漉した漉土へ川砂、 揉苆を混入し練合せの上金コテにて塗り付ける。

仕上塗り土は中塗り土へ更にセメント少量、防 水剤を加え金コテ塗りとした。

5. 木工工事

躯体が充分に乾燥したのを見究めて、木工工事 にかかった。

大工棟梁は解体時に付した各番号を入念に点検 し、使用不能材の箇所については新材への取替え となった。

尚、下屋の部材については損傷甚しく全て新材 となった。

取替材は全て旧材と同品質、同形状とし、旧工 法による施工となる。

小屋組のみではあるが、古材、新材、組合せて 復元するので墨付切込み等には細心の注意を払い、 特に古材の破損には充分に注意して工事を進めた。

屋根下地は竹野地貼りであり、径5糎内外の真竹を四つ割りにし表面を下側に貼り垂木当りステン釘にて止める、更にその上に杉皮を貼り付け隠し垂木を打ち付け厚さ12粍の杉、野地板を貼り付けた二重工法となった。

野地竹は打ち付後、防腐・防虫処理としてファインBB乳剤を噴霧器にて吹き付けた。

尚、本工事中は下部躯体への損傷のない様、震動等によって破損のない様、細心の注意を払い工事を進めた。

6. 屋根工事

瓦は和式の引掛桟瓦となるので下地フェルト22 瓩を使用し重ね充分に貼り詰め引掛桟木打ちとした。

葺方は瓦割りにより一通りづつ水糸を引き通し、 軒唐葺瓦及び勝手瓦一段目と登り五段目毎に、又 けらば瓦は全てステン釘止めとし、勝手瓦、けら ば瓦等水糸により地通りよく葺足むらなく棟まで 葺上げた。

棟は台面熨斗一段、割熨斗三段積みとし上段棟 瓦は素丸積みとし、鬼瓦と共に棟木より銅線にて 結び止めた。

7. 雜工事

建具は右通用門に両開き板戸2枚を内部より閉止めによる取付となっていたが全材共腐朽が甚しく使用不能のため新材へ取替となった。

板戸は在来戸に倣い製作、不足金物は在来品通 り製作取付けた。

内部土間はコンクリート面へ厚10糎程度の三和 土叩き仕上げとする。良質の真砂土に粘土質の土 及砂、セメントを混入、ミキサーにて充分に練り 合せ水と同時に接着材としてハイフレックスを少

量混入した。

施工は下地のコンクリート面を充分に清掃し適 度に水を散布し混合した用材を所定の厚さに敷均 し工事用プレートにて突固め水を表面に散布しな がら金コテにて磨きあげた。

早乾き防止対策のため適度の散水を行い養生を 充分に施した。

内外木部は古色を出すために、キシラデコール による全塗装とする。古材、新材との色合い調整 のため濃淡により釣合いを取った。 A Document on the Restoration Work at the Comport Shed and the Back Entrance Gate.

1	name of the building 建物名称	the Comport Shed and the Back Entrance Gate 灰屋·裏門			
2	classification 分類	an Important Cultural Property doesn't designate 無指定			
3	date of designation 指定年月日				
4	location 所在地	1,3,4-5161 Oaza Yamae Chikushino-shi, Fukuoka Pref. 福岡県筑紫野市大字山家5161番の1,3,4			
5	owner 所有者	TETSUYA Mizuki. 水城哲哉			
6	type of building 建物種別	the Comport Shed and the Back Entrance 灰屋・裏門	Gate		
7	date of the building 建立年代	half, 19th century 19世紀半			
8	material and structure 材料、構造	mud wall and wood frame work 土壁、木造			
9	roof style and roofing material 屋根形式、葺材	gabled, pantile 切妻造、栈瓦葺			
10	dimensions 寸法 floor area or living area 平面積 width 間口(桁行) depth 奥行(梁間)	comport shed 灰屋 18.675㎡ ≑ 5.66坪 4.980m 3.750m	back entrance gate 裏門 2.977㎡ ≒0.90坪 2.238m 1.330m		
11 outline of work 事業内容 type of repair 修理種別 period of time 期間 cost 経費		complete dismantlement and restoration 解体復元修理 13 August, 1994~20 March, 1995 平成 6 年 8 月13日~平成 7 年 3 月20日			
12	restoration and conservation report 修理工事報告書 date of issue 発行年月 author, editor 著者、編者 publisher 発行者				
13	history of restoration work 修理歴 radical restoration 根本修理 roof repair 屋根葺替 partial repair 部分修理 painting repair 塗装修理				
14	notes 備考	complete dismantlement and restoration in1994~1995. 平成 6 年~ 7 年 解体、復元修理			

Ⅲ-4. 郡屋跡穀蔵



1. 正面



2. 背面

穀蔵は文久2年(1862)の郡屋古図では、「籾倉」と記す。現存の穀蔵の位置と、規模も古図の「籾倉」と合致する。従って、穀蔵は郡屋に於いて文字通り籾を貯蔵する蔵であった。平成10年度に桟瓦を葺き替えて、郡屋敷地内に現存する。

1. 構造形式と規模

穀蔵は土蔵造りで、桁行3間半、梁間2間で、切 妻造りの桟瓦葺きである。正面(南側)に桟瓦葺き の差し掛け庇(3間半)を付ける。内部は2階建て である。

2.基 礎

花崗岩切石を地覆石として四面に回わす。庇部分も同様である。但し、出入口前は花崗岩と砂岩2段を付ける。庇正面は雨葛石1段を付ける。従って、建物全体は周囲の地盤より高い位置にたつ。



3. 西南面



4. 東南面

3. 軸 部

手斧削りの杉角柱を地覆石上にたて、内側に角柱を見せ、外は土壁を塗り込めるいわゆる土蔵造りである。下階正面向って左側(西側)より1間半の位置の後半分(北側)より半間入った位置に支柱(角柱)がたつ。出入口両側の2本の角柱は樟材らしい。

上階は強い反りのある梁を1間毎に3本渡し、京 呂組であるが、中央を除いて両側の梁の後端部は梁 尻が軒桁下に納まる。上階正面向って左(西)側よ り1間半、奥(北側)より半間の所に支柱(角柱) が下階同様にたつ。また正面向って左(西)側より 半間入側中央通りに細い丸太の支柱をたてる。これ らはいずれも通し柱ではない。

庇は正面向って右(東)側より1間目の庇柱に身舎柱から繋梁を渡し方杖を付けて、束をたて身舎に取り付けの垂木掛を受ける。そして、身舎は両端と仕切りを設けた籾倉の背部に細い支柱をたて、垂木掛を支える。庇の軒桁は丸桁で、出入口より籾倉にかけて、その下に丸桁を付け二重の丸桁とする。

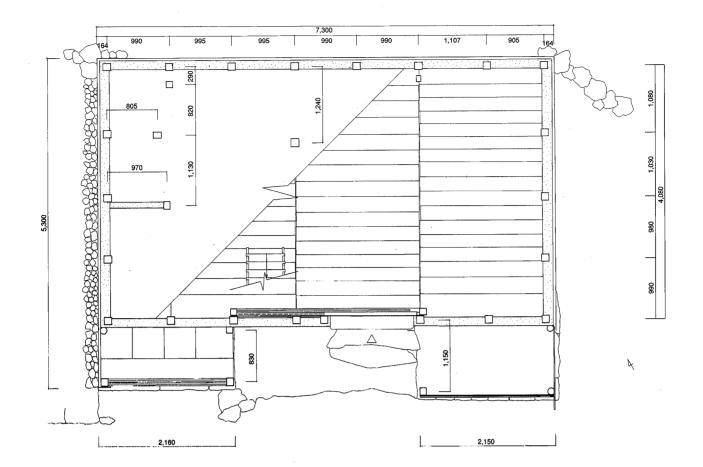


図1 1階平面図

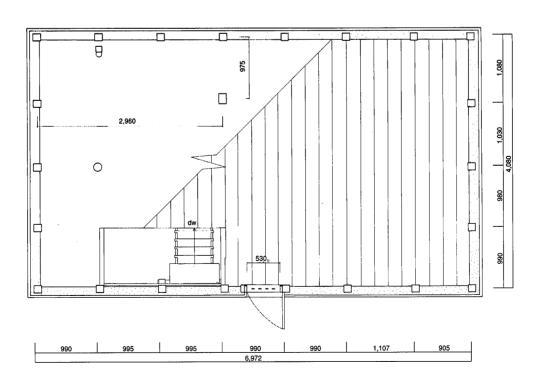
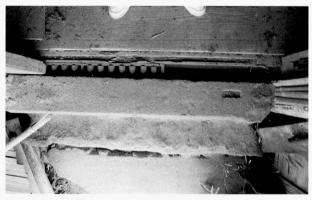


図2 2階平面図



5. 正面出入口



6. 出入口石敷居



7. 籾蔵



8. 正面庇



9. 東側鬼瓦



10. 1 階西面



11. 1 階東面



12. 出入口板戸

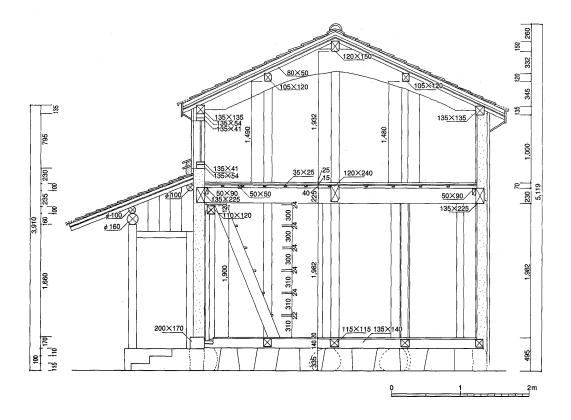


図3 梁行断面図

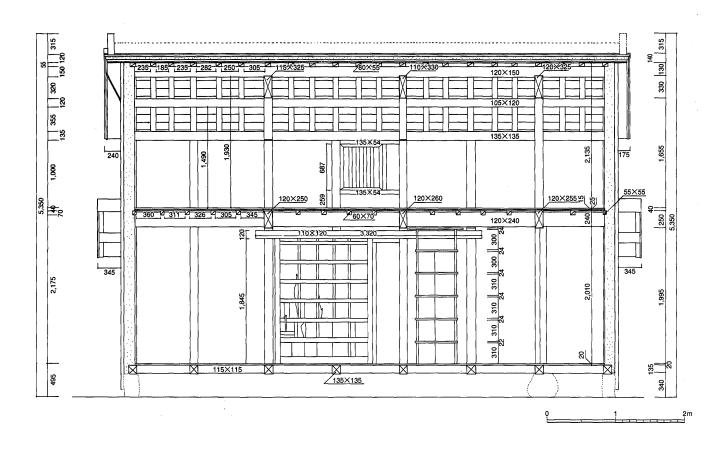


図 4 桁行断面図

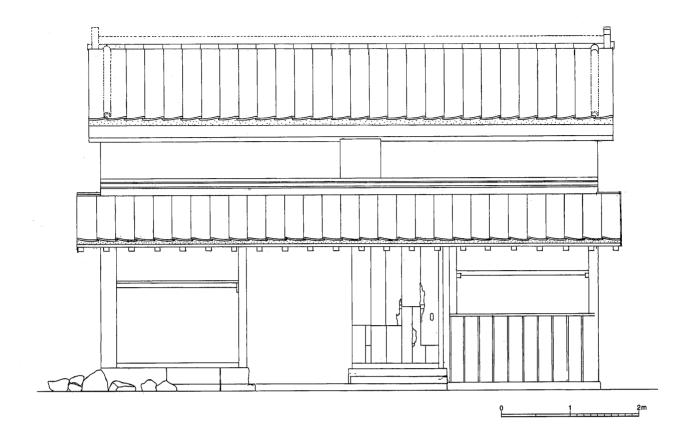


図 5 南側立面図

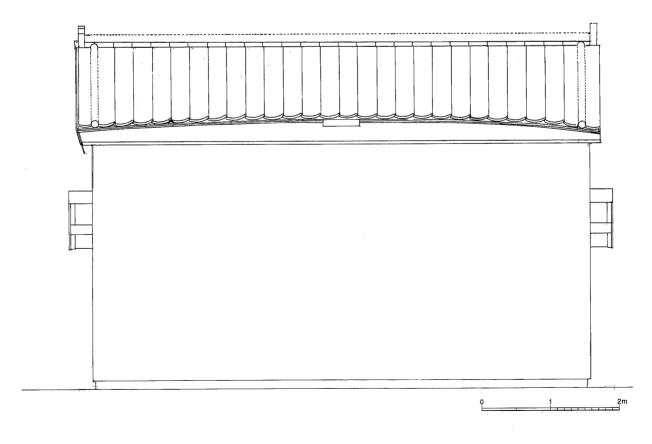


図 6 北側立面図

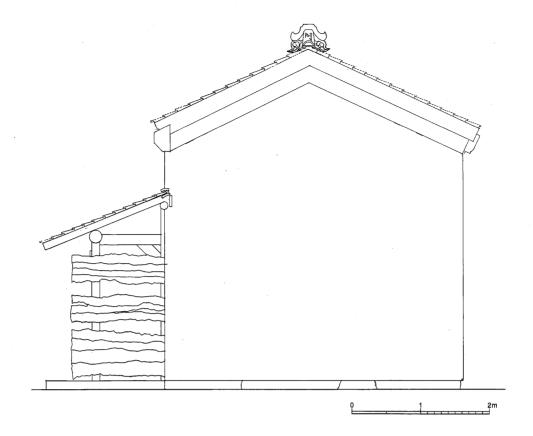


図7 東側立面図

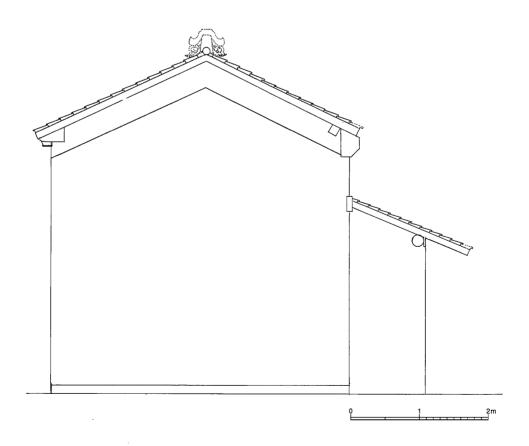


図8 西側立面図



13. 2階西面



14. 2 階東面



15. 2 階東北面

4. 屋 根

軒は身舎も庇も1軒である。どちらも太鼓落しの 疎垂木である。身舎は軒裏まで白漆喰塗り込めであ る。

身舎の屋根は野地板に土居葺き、右(東)側のみ 鬼瓦の中央に「川」字が入る。庇は割竹野地に杉皮 をのせ、同じく土居葺きとする。

5. 床と天井

下階の床は板張りで、天井は下階に桁行中央部と 梁行に1間毎に差物を入れ、根太目板天井とする。 根太目板天井は、2階の床を兼用する。



16. 2 階西南面



17. 2 階北面

入口入って左(西)側手前(南側)の1間×半間の2階は木の階段を設けているので床板はない。 上階の天井は化粧屋根裏である。

6. 造 作

下階正面(南側)向って右より2間目に板張り大戸の片引きをたてる。内部左(西)側の奥(北側)に1間半程の高棚を設ける。但し、手前半間ほどは棚がない。高棚の南側に土壁を設ける。

下階は出入口以外開口部はない。上階は正面向って右より2間目の所に、小窓をあける。小窓は鉄の竪格子を入れ、外に板戸片開きをたてる。板戸の外側は銅板張りとする。

庇は左(西)側1間が仕切りを設けた籾倉で、正面(南側)に板戸引違いをたて、右(東)側1間は下見板張りとする。右側1間の正面は腰竪目板張りで、上部は建具なしの、物置きである。身舎は正面以外軒まで波子鉄板を張り、応急の保護をしている。

7. 後世の修理と現状

1. 身舎の軒平瓦及び雁振瓦は欠損である。両端の 螻羽瓦や両側の風切り丸瓦も殆ど欠損である。正 面向って右(東)側の鬼瓦(「川」字入り)が1 個残存している。

- 2. 庇の軒平瓦も全て欠損である。身舎とのとりつきの平瓦も一部欠損である。
- 3. 正面(南側)の引違い戸は欠損である。横板壁 も破損してない。
- 4. 全体的に右奥へ傾いて(北東へ3°~4°) いる。
- 5. 軒平瓦は一部、下におりている。 それらをみると文様に3種類(唐草、 菊花、唐草くずし)がある。唐草文 が当初の瓦らしい。
- 6. 東側と西側及び背面(北側)の波 子鉄板は後補で、もとは正面以外白 漆喰塗りの土蔵造りである。即ち、 窓の片側と上部に白漆喰が残るので、 もと白漆喰塗りであることがわかる。 但し、正面は土壁のままらしい。入 口左側の切石地覆石上部の土壁が黒 ずんでいる。
- 7. 一部雨漏れしているらしく、野地板にしみがある。
- 8. 正面(南側) 2階の窓は片開き板戸(外側銅板張り)で、肘壺金物が2組のうち下のみ1組が残るので、もとは肘壺を利用した戸であった。

- 9. 反りの強い梁が特徴となっている。
- 10. 建立年代は柱の風蝕状況などから、幕末頃と思われる。因に、文久2年(1862)の古図と平面及び籾倉の位置などが合致する。

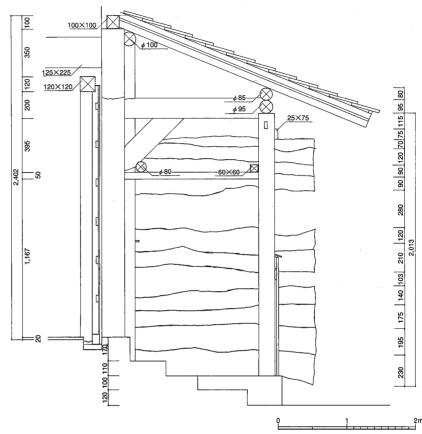
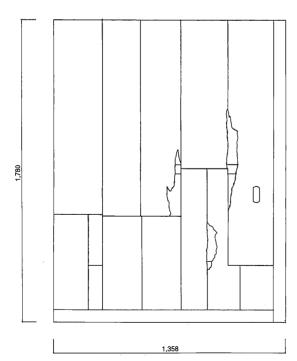
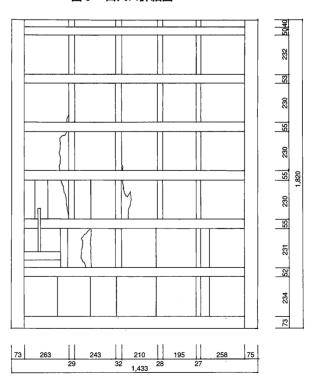


図 9 出入口詳細図





A Document on the Conservation Surveying Work of the Grain Storehouse.

1	name of the building 建物名称	the Grain storehouse 穀蔵
2	classification 分類	an Important Cultural Property doesn't designate 無指定
3	date of designation 指定年月日	
4	location 所在地	5161, Oaza Yamae Chikushino-shi, Fukuoka Pref. 福岡県筑紫野市大字山家5161
5	owner 所有者	TETSUYA Mizuki. 水城哲哉
6	type of building 建物種別	the Grain storehouse 穀蔵
7	date of the building 建立年代	half, 19th century 19世紀半
8	material and structure 材料、構造	godown style 土蔵造
9	roof style and roofing material 屋根形式、葺材	gabled, pantile 切妻造、桟瓦葺
10	dimensions 寸法 floor area or living area 平面積 width 間口(桁行) depth 奥行(梁間)	30. 259m² ≒ 7坪 7. 300m(3 間半) 4. 150m(2 間)
11	outline of work 事業内容 type of repair 修理種別 period of time 期間 cost 経費	conservation Surveying work 保存調查 April, 1997~March, 1998 平成 9 年 4 月~平成10年 3 月
12	restoration and conservation report 修理工事報告書 date of issue 発行年月 author, editor 著者、編者 publisher 発行者	
13	history of restoration work 修理歴 radical restoration 根本修理 roof repair 屋根葺替	
	partial repair 部分修理 painting repair 塗装修理	
14	notes 備考	conservation Surveying work in1997. 平成9年 保存調査

Ⅲ-5. 郡屋跡宝蔵



1 全暑



2. 北側面

文久2年(1862)の郡屋を描く古図に「宝蔵」と ある。位置も規模も現存の宝蔵は古図と合致する。 しかしながら、今回、隣接地とのかねあいから解体 せざるを得なくなり、平成10年度に調査をし、解体 し、古材をプレハブ倉庫に保管した。

1. 構造形式と規模

桁行3間、梁間2間、切妻造りの桟瓦葺きで、妻 入りである。内部2階建てである。四隅柱のみ通し 柱の構造である。正面(東側)出入口と主屋との間 に桁行2間、梁間1間、桟瓦葺きの繋ぎを新設して いる。

2. 基 礎

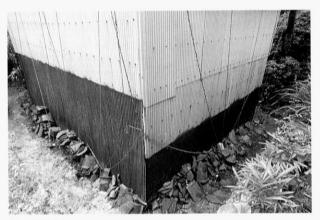
安山岩切石布石敷、狭間石である。北側のみ狭間 石の間を10cm位空気孔としてあける。南側は中央に 土管を空気孔として1本入れる。

3. 軸 部

1階は角柱に指物を渡し、太い根太をかける。南側面東より6本目の柱は床下で根継ぎをする。1階は南側面東より3、5、7本目、西側面南より1、



3. 東北面



4. 西北面

5本目、北側面東より3、5、7本目の柱に方杖を付ける。

2階の角柱のうち、壁中に入る柱面は土が付着しやすいように斜めに手斧を入れる。内部に出る柱の面は台鉋仕上げである。2階は南側面東より3、4、6、7本目の柱、北側面東より3、4本目の柱、西側面中柱に方杖を付ける。

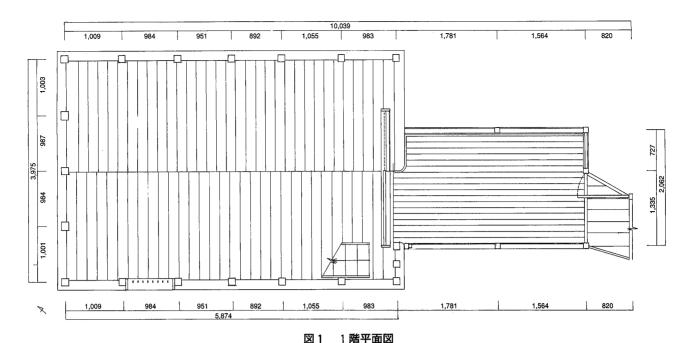
4. 外 壁

東側の出入口廻りを含めて全て白漆喰塗りの土蔵 造りである。

東側(正面)外側片引き戸は板戸に外側のみ白漆 喰を塗る。内側には別の片引き板戸をたて、二重の 片引き戸とする。出入口向って左側の腰(東側出入 口の南側)は焼板、その他は波子鉄板を張っている。 南側は腰焼板、上部波子鉄板張り。西側及び北側は 波子鉄板張り。これらはいずれも本来は白漆喰の土 蔵造りであろう。

5. 内 部

1階内部は出入口より入った入側1間の所の指物



下端に袖柱、袖壁の板溝と1本溝が残る。 よって、もと入側1間は土間床で、土間 床と板床の間に袖壁を付け、両開き戸を たてていた。現在の床は全て杉の板張り である。

柱に竪溝、入側の指物下端にも溝があるので、床板張りの2間×2間部分の内側はもと板壁であったかも知れない。

2 階内部は南側東より3柱間目に、腰 高窓、内側竪格子、外側板戸(外側に銅 板を張る) 片開き戸をたてる。

正面(東側)南より2柱間目に腰高窓、 太い竪格子を嵌め、白漆喰で塗る。この 部分は外側は白漆喰で塗り込めるので、 外からではわからない。

内側に障子片引き戸をたてる。

北側の西端1間に、雨戸2枚があって、その東側半間に引き込みをしたらしい。鴨居は欠損なので不明であるが、中柱の跡がないので当初より1間の開口部があったらしい。

内側の敷居は2本溝なので、障子でも入れていたらしい。

西側面の北より2間目、半間の荒壁の色が違うので、もと開口部でもあったかも知れない。外側に1本溝あり。

6. 小屋組

牛梁をまたがせて、内部に2本の曲った梁を渡す。 端部は軒桁に突き刺す。梁には寸法の墨書が多い。

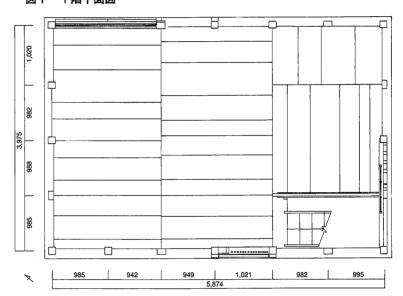


図 2 2 階平面図

7. 材 料

1階は樟材が多い。指物と大きい根太及び2階床 板兼用の天井板まで樟材である。柱は杉と樟材が混 じる。

2階柱は全て杉材。床板も杉材である。

8. [継ぎ] の部分

基礎は安山岩切石布敷である。軸部は角柱、腰は 竪目板張りである。小屋組は梁上に桁を置く折置組 で、曲った梁に棟束をたて、棟木を支える。屋根は 割竹、野地に杉皮、土をのせて桟瓦を置く土居葺で ある。熨斗瓦4枚、雁振瓦などがある。

外壁は北側が腰竪板壁、上部白漆喰真壁に横板を 張る。東側は母屋に続く。南側は腰竪目板壁、上部 吹放しである。西側は宝蔵出入口に続く。



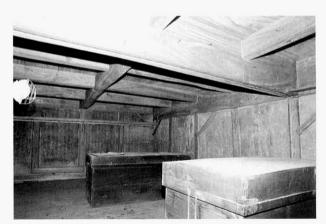
5. 出入口



6. 南側空気孔



7. 渡廊下南側面



8. 1 階東南面



9. 1 階西面



10. 1 階南側面高窓



11. 2階東面



12. 2 階西面



13. 北側西端南面

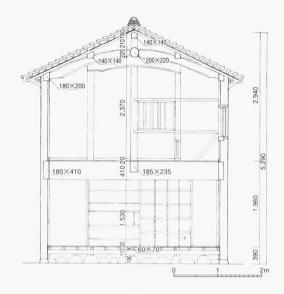


図 3 梁行断面図

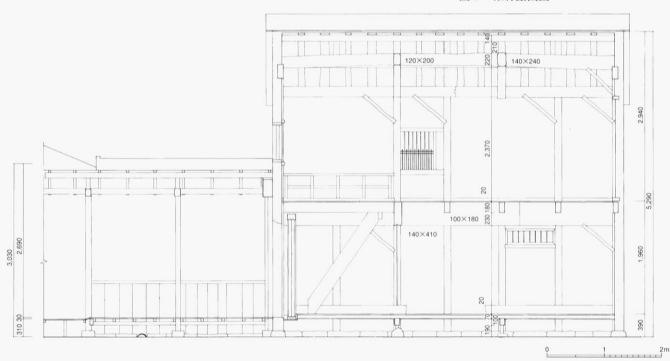


図 4 桁行断面図

9. 後世の修理と現状

- 1. 小屋組は和小屋組で棟束がある。力疎垂木、野地板の上に杉皮を置き、土をのせて桟瓦を葺く土居葺きで、平成10年度現在桟瓦の一部分を取り去りシートを被せていた。
- 2. 残された軒平瓦8枚の文様に、菊花を中心にした唐草文と、唐草のみのものと2種類ある。
- 3. 1階の入側はもと土間、板張り床は2間×2間 の部分で、土間と板張り床境は袖壁に引戸2枚を たてたらしい。その痕跡が指物に残る。
- 4. 1階は出入口構えと北側面東より4,6本目、 西側面の南から2,4本目は樟柱。他は杉柱。2 階は全て杉柱である。

- 5. 1階の根太は全て樟材である。天井板(2階の 床板)も全て樟材である。但し、1階の床板は杉 材である。
- 6. 柱は内部に見える面が全て台鉋仕上げである。
- 7. 4 隅の柱は通し柱で、他は管柱のため、1 · 2 階の境は大きな角材が 4 面に入る。
- 8. 方杖も全て丸材で丸釘でとめる。従って、方杖 は後補らしい。
- 9. 1階はもと床板張りの2間×2間(西側)部分の境の柱に竪溝がある。上の指物にも溝がある。 従って、恐らく内側に板落し込みでもあったのであろう。
- 10. 北側東より4本目と南側西より2本目の1階柱

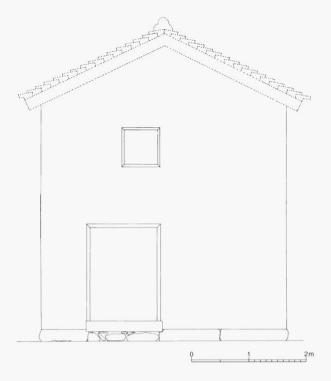


図5 東側立面図

は根継ぎである(丸材を使用)。

- 11. 2 階東側北より 2 本目、北側東より 2 本目、南側東より 2 本目と 5 本目、西側南より 2 本目は内側の柱が見えず、荒壁塗りである。
- 12. 1・2 階開口部の板戸は外側に銅板を張る。片 開き戸で肘壺金物で吊る。
- 13. 2 階東側天秤梁の内側に五角形 (尖頭型) の祈祷札を、牛梁の北・南側面に円形の祈祷札 (八掛と祈祷文) を打ち付ける。
- 14. 柱が全て台鉋仕上げであること、方杖(あと付けらしい)をとめている釘が全て丸釘である。しかしながら、解体中壁中に埋められた釘に角釘が使用されていることがわかった。従って、建立年代は幕末頃と思われる。



円形祈祷札 (φ12.0cm、厚さ1.3cm)

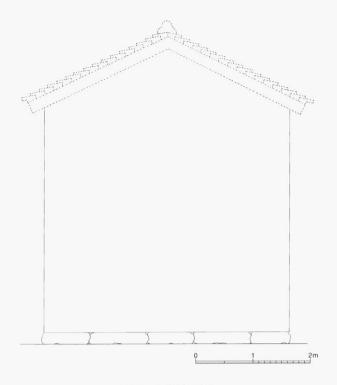
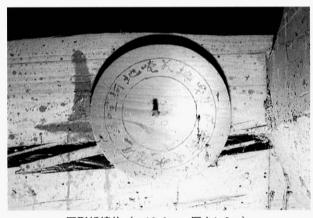


図 6 西側立面図



円形祈祷札 (φ12.0cm、厚さ1.3cm)



祈祷札(総高12.0cm、肩高11.3cm、上・下幅6.2cm、厚さ1.8cm)

10. 参考資料

正栄建装株式会社が平成10年度に解体工事をし、 柱や梁などの古材を郡屋跡プレハブに保管した。そ の時の資料を次にあげる。



14. 2 階西北面



15. 解体

概 要

工事名 山家郡屋跡宝蔵解体工事

所在地 福岡県筑紫野市大字山家

指 定 無指定

規 模 桁行3間 梁間2間の土蔵二階建て

目 的 復元の為の解体工事

工 期 平成10年9月15日~平成10年10月30日

請負業者 福岡県福岡市南区的場1丁目21番11号 正栄建装株式会社

代表取締役 安達正則

発 見 物

1. 部材

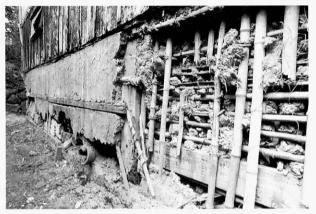
(柱)

- ・通し柱は、すみ柱の4本のみであった。(貫)
- ・2階の柱ごとに北西から南東にかけて反時計回 りに、上の貫七から十六の符号が墨で記されて いた。

(大引き)

・古材を再利用したようで、材の縦方向にかけて 欠き込み跡がみられた。

(礎石)



16. 解体南側空気孔



17. 解体西南隅

- ・南東の位置に十六と十七の符号が墨で記されて いた。
- ・柱位置にあたる場所に凹が浅くであるがみられ た。
- 2. その他

(祈祷札)

- ・丸形: 2枚-西側小屋梁1本目手前の地棟の北 と南に角釘で打ち付けていた。
- ・五角形:1枚-東側天秤梁の南側に角釘で打ち 付けていた。

(寛永通宝)

・3枚二階解体時に出るが、どこにあったかは不明。

保存部材目録

1 屋根

瓦

2 主要構造材

 (小屋組)
 (軸組)

 垂木・・・・・・・16
 すみ柱 (通し柱)・・・・・4

 棟木・・・・・・・17
 一階くだ柱・・・・・・17

 小屋東・・・・・・・7
 二階くだ柱・・・・・・15

 母屋・・・・・・2
 一階柱貫・・・・・・18

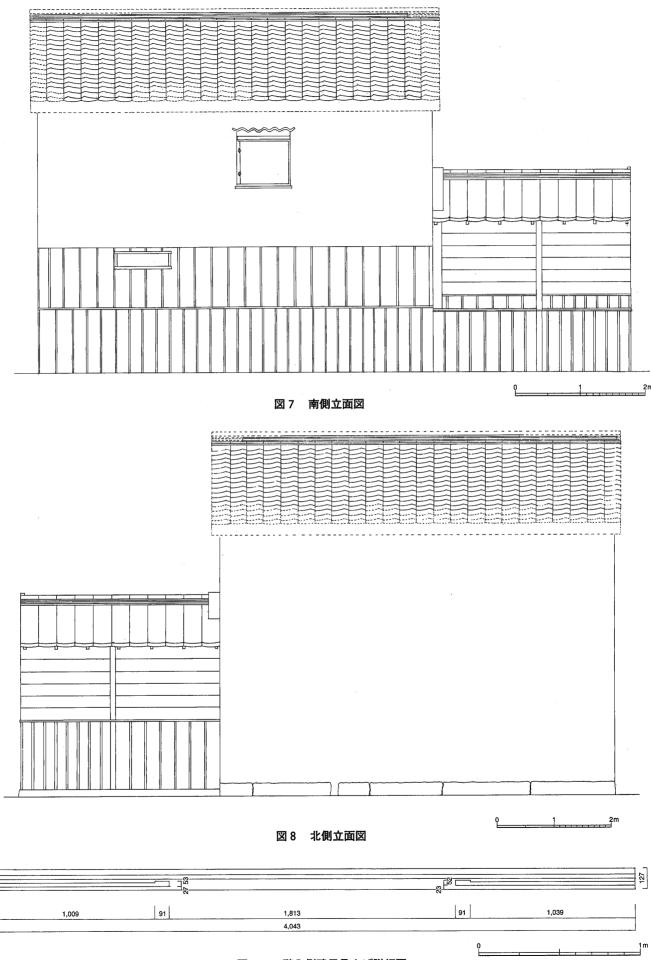


図9 1階入側鴨居見上げ詳細図

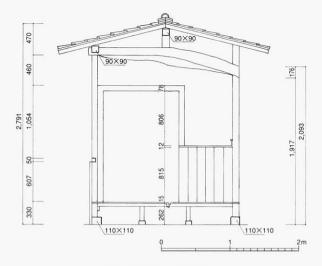
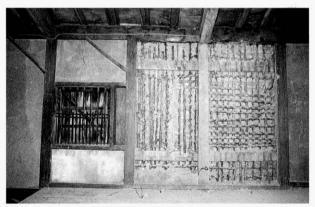


図10 渡廊下梁行断面図



18. 解体 2 階東面



19. 解体 2 階北面



20. 解体 2 階北面軸部

地棟1	二階柱貫12
登り梁4	一階方杖8
天秤梁2	二階方杖 9
(横架材)	
胴差4	軒けた2
妻梁2	
(床組)	
一階床板68	二階床板32
二階床大梁2	
二階床小梁9	一階床根太13
大引き4	
開口部・敷居鴨居	
漆喰戸・板戸	
壁土	
外壁杉腰板(焼板)+	ナンプルとして4~5枚
3. 基礎	
床束石	
据え石	
敷居石	

廃棄部材目録

- ・外壁波トタン
- ・固定ロープ
- · 外壁杉腰板 (焼板)
- ・固定金具・杭
- 木舞竹
- ・渡り廊下
- 藁縄
- ·蔵内物品
- でである。ではません。ではまれる。<

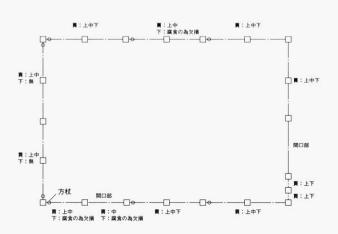


図11 1 階方杖位置図

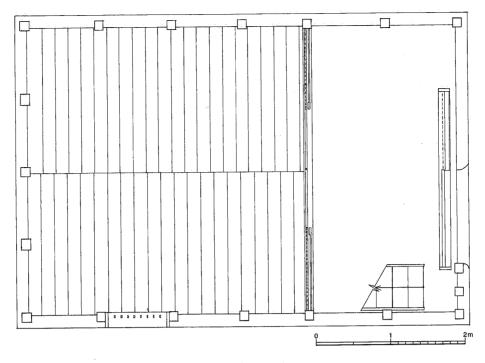


図12 復元平面図

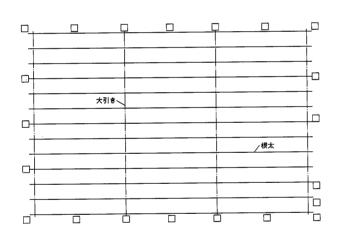


図13 1 階床伏図

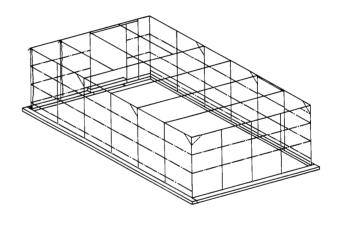


図15 1 階架構模式図

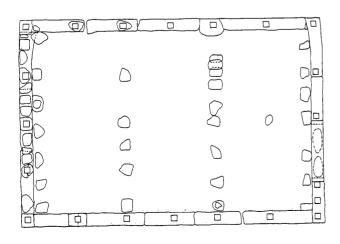


図14 礎石スケッチ図

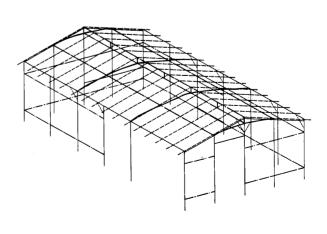


図16 2階架構模式図

A Document on the Complete Dismantlement of the Heirloom Storehouse.

		And the second s
1	name of the building 建物名称	the Heirloom Storehouse 宝蔵
2	classification 分類	an Important Culturel Property doesn't designate 無指定
3	date of designation 指定年月日	
4	location 所在地	Oaza Yamae Chikushino-shi, Fukuoka Pref. 福岡県筑紫野市大字山家
5	owner 所有者	TETSUYA Mizuki. 水城哲哉
6	type of building 建物種別	the Heirloom Storehouse 宝蔵
7	date of the building 建立年代	half, 19th century 19世紀半
8	material and structure 材料、構造	godown style 土蔵造
9	roof style and roofing material 屋根形式、葺材	gabled, pantile 切妻造、栈瓦葺
10	dimensions 寸法 floor area or living area 平面積 width 間口(桁行) depth 奥行(梁間)	23.349m²÷7.08坪 5.874m (3間) 3.975m (2間)
11	outline of work 事業内容 type of repair 修理種別 period of time 期間 cost 経費	complete dismantlement 解体工事 15 September, 1998~30 October, 1998 平成10年9月15日~平成10年10月30日
12	restoration and conservation report 修理工事報告書 date of issue 発行年月 author, editor 著者、編者 publisher 発行者	
13	history of restoration work 修理歴 radical restoration 根本修理 roof repair 屋根葺替 partial repair 部分修理 painting repair 塗装修理	
14	notes 備考	complete dismantlement in 1998, complete preservation of materials 平成10年解体工事、材料保存

Ⅲ-6. 西構口と土塀



1. 西構口全景



2. 西構口

奥村玉蘭が文政4年(1821)に完成させた『筑前名所図絵』によれば、西構口は確認されるが、現存の土塀は「お茶や」への登り口で、門と段(恐らく石段であろう)があるので、文政4年(1821)以降、現在のように形成された。恐らく、「お茶や」が取り壊されて、明治になってからのことであろう。

現存土塀の基礎の石垣積みを見ると、確かに『筑前名所図絵』の「お茶や」への登り口と構口の石垣積みとは異なる。とはいえ、構口の建設年代は史料不足のため、文政4年(1821)以前であることは確かであるが、特定することは今のところできない。

筑前六宿の中では、木屋瀬宿、青柳宿に構口が残るが、基礎の石垣が一部残るのみで、山家宿の西構口の残存状況とは大いに異なる。伊藤尾四郎著『史蹟名勝天然記念物調査報告書第4輯一筑前の宿驛一』によれば、昭和5年(1930)に西構口に福岡県によって標示板がたてられ、「今構口の遺蹟の残れるもの甚稀なり」と記す所以である。西構口と土塀は平成7年6月23日筑紫野市指定文化財となり、平成8年度補修工事を行った。

ここでは補修工事に先だって財団法人文化財建造



3. 西構口土塀全景



4. 西構口土塀内側

物保存技術協会が調査した資料を次に記す (添付写真と写真説明は省く)。

1. はじめに

筑紫野市山家宿構口土塀は、長崎街道の宿場町に 特有な宿場出入り口の構造物で、現存するのは山家 宿のみといわれている。山家宿構口の土塀は、地域 住民によって護り伝えられてきたが、近年土塀の傷 みがひどくなり修理を必要とする状態になった。筑 紫野市教育委員会は、修理方針を検討する基礎資料 を作成するため(財)文化財建造物保存技術協会に現況 調査を委託した。同財団は平成7年11月と8年1月 に現地調査を行った。また、1月には筑紫野市教育 委員会が発掘調査を行い、土塀足元の旧形式を明ら かにした。このレポートはこれらの調査結果をふま えてまとめたものである。

2. 調査の内容

今回の調査は、土塀の当初工法及び後世改造の痕跡を判断することを目的とした。修理工事に伴う解体調査ではないため原則として部材は解体せず、目視調査を主とした。調査項目は、次の3点である。

壁層No	土 質 ・ ス サ 等	厚さ	表面風化	層位の推定
1	礫混りの粘土、淡灰褐色、非常に固い、長数cmの切スサ	約60cmか	なし	土塀本体
	を含む。4~5段に分けて築いている。			
2	砂気の多い粘土、黄褐色、もろく崩れやすい、長2cm前	約1cm	やや風化(表面に	当初の中塗
	後の粗いもみスサを多用。1層と密着している。		漆喰は見られず)	仕上げ層
3	1層と良く似た土質、非常に固い、東半部の築き直し部	不明(土塀の芯ま	風化	第1次の補
	分の本体の土と同じか?2層とは剥離しやすい。	で続くらしい)		修塗層
4	粘土、濃灰褐色、かなり固い長数cmの切スサを多用、場	2~5cm(傾斜補	なし	第2次補修
	所により厚さが異なる。3層とは明瞭に剥離する。	正のため差多い)		の下塗り層
5	砂混じりの粘土、赤褐色、もろい、長2~3cmの粗いも	1.5~1.8cm	なし	第2次補修
	みスサを多用。30cm間隔に藁縄を塗り込む。4層と密着。			の中塗り層
6	白漆喰	2 mm前後		第2次補修
	5層と剥離し、大半が脱落している			の仕上げ層
	以下は、写真7の丸印右下に見える、極く	近年の部分補修土層		
7	セメント?混じりの砂気多い赤味がかった土、スサなし	約 5 mm	不明瞭	8層の下地
				?別修理?
8	砂気の多い土、スサなし。	$3\sim4$ mm	なし	9層の下地
9	白漆喰、紙スサ	2.5mm	劣化剥落	最新の仕上

2-1 土塀壁体と表面仕上げ

土塀の表面仕上げ剥落部分を観察すると、何度かの塗直しが行われていることが窺えた。維持保存・修理工事にあたっては、どの時代(姿)に復元するかという基本方針を決定する必要があり、また施工にあたっては、どの層までを残し、どこから掻き落として塗り直すかを決定しなければならない。そこで、外側中央部の最も剥落の大きい箇所(壁体の芯まで露出している)で各壁土層を調査した(3-1)。

2-2 土塀内側の壁体足元水切り施設の旧工法

現在、内側の壁体足元は巾木状のモルタル塗を施しているが、これは一見して後世の改造である。この部分の旧工法を調べるため筑紫野市教育委員会が発掘調査を行った(3-2)。

2-3 屋根瓦葺き工法

現在、屋根瓦の傷みが甚だしく、各所で雨漏りが生じている。また、瓦自体も形式の異なる部材が混用されており、原形が判らなくなっている。

屋根の傷みがここまで進行すると、今後実施する修理工事の方針がどうであれ、屋根だけは全面的な葺き替えが必要になると考えられた。そうすると、現状の瓦葺き工法(特に葺き土の工法)は全て失われてしまうので、瓦については一部を解体して調査をした(3-3)。

3. 各部の工法と痕跡

3-1 土塀壁体と表面仕上げ

各壁土層の状況を上掲の表に示す。これから判 断すると、築造後に大きな修理を2回、さらにそ の後で小修繕を1~2回行っているようである。

まず、1層と2層が当初の壁体および表面仕上げと考えられる。2層の表面には漆喰の痕跡が見られないうえ、3層で覆われていた部分も風化しているので、当初は中塗仕上げ(土色の表面)であった可能性が高い。

3層は第1次の補修であるが、この土層は他の部分では見られないので、東半部を築き直した時の接続部補修仕事らしい。4~6層は土塀全体に渡る大規模な修理の塗り重ね層で、これが第2次修理と考えられる。7層以下は、仕事が応急的で、範囲も限定されているので、極く近年の小修繕と考えられる。

3-2 内側の壁体足元水切り

① 足元石列の遺構

内側の壁体足元は巾木状にコンクリートブロックとモルタルで塗固めている。筑紫野市教育委員会の発掘調査(内側にトレンチカット3カ所)によって、図1のように、当初の足元固めと考えられる石列が検出された。西半の古い部分は石列2段積み、東半の築き直した部分は1段積みのようである。

現在の地盤面に比べると、石列の上端の方が低く、地表を流れる雨水から土塀本体を守れないが、図1に示すようにモルタル層は土層2の上から施工しており、土層1はその後に盛ったものであることが判る。本来は土塀内側地表面より石列が高く、土塀の基礎と雨水除けを兼ねていたものであろう。



西構口土塀



6. 西構口土塀

② 土塀の傾斜について

土塀を観察すると、全体が僅かに内側に傾斜 している。しかし、現在の壁体は第2次の修理 において傾斜を補正するため、外側は上部を厚 く・下部を薄く、内側は上部を薄く、下部を厚 く土を塗重ねて垂直に見せようとしたものであ り、当初部分の1・2層だけを見ると大きく内 側へ向かって傾いている。

これは、土塀の外側がしっかりした石垣に載 っているのに対し、内側は土層の上に並べた石 列に載るため、内側のほうが大きく沈下して傾 斜したものと考えられる。宿内に残存する他の 土塀も同じような傾斜傾向を示しているので、 山家宿式の築造方法による土塀の一般的な破損 傾向なのであろう。

(発掘調査によると、石垣は特に強固な地形を 施しているわけではないようである。しかし、 内側に比べればはるかに強固と言えよう)

3-3 屋根瓦葺き工法

① 瓦の分類

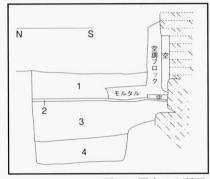
現在使用されている瓦は、表面の風化程度や 形式・技法の違いによって次の3種類(3時 代) に分類できる。

(a) 築造当初と考えられる瓦

……唐草文様の軒瓦(丸い瓦当なし)



7. 西構口土塀基礎



- 里褐色表十 苗褐色十層
- 漆里色十層
- 図1 写真7の断面
- (b) 後世の修理時に補足した瓦その1
- ……「牛島山本」の刻印がある平瓦、熨斗瓦
- (c) 後世の修理時に補足した瓦その2

……饅頭瓦当のある軒瓦

小口に面をとった平瓦

ヒモ付の丸瓦

鬼瓦

(a)は数が少なくなっているうえ破損も目立つ が、土塀に使われている瓦の中では際立って古 く、あるいは近世まで遡るかもしれない。おそ らく築造当初の瓦であろう。(b)は、刻印から戦 後間もない頃まで焼いていた瓦であることが判 る。後述するように(c)の瓦が第2次修理の際に 補足されたものと考えられるので、これは第1 次修理 (東半部築き直しの時期である可能性 大)で補足した瓦かもしれない。(c)は近年の様 式で、明らかに戦後の瓦である。

② 葺き土の現況

現在、全ての瓦は同一の赤褐色の葺き土で葺 いている。この土は壁体塗土の5層と同じもの なので、第2次修理の際に瓦の全面葺き替え(古 い瓦も使えるものは再用した)を行ったと考え られる。なお、この葺き土の下に、もう1時期 古い葺き土が残っている。

③ 当初の瓦葺き工法について

現在の瓦は一部(東端折曲り部の東面)を除いて片流れ2枚で葺いている。しかし、東端折曲り部の葺き土を観察すると、現状葺き土の下に残る古い葺き土層の表面には軒瓦の尻が当たった圧痕がない。よって、第2次修理の前までは片流れ1枚(軒瓦のみ)で葺いていた可能性が高い。土塀の壁厚が当初は現在より薄かったので、軒瓦1枚で棟まで覆えたのではないだろうか。

4. 土塀変遷の考察

3に記した調査結果から、築造~現在に至る土塀 の変遷を推測してみる。

① 築造当初

土塀の壁厚は現在より10cm前後薄く、表面仕上げは中塗りであったらしい。内側の地表面は現在より10~15cm程低く、土塀の足元には石を積んでいた。屋根は現在と同じく瓦葺きであるが、片流れ1枚(軒瓦のみ)であったらしい。屋根の端部に鬼瓦があったかどうかは判らない。築造の絶対年代は不明。

② 第1次修理

修理年代は明らかではないが、補足瓦より推測すると近代の後期であろうか?理由は不明だが、この時に東半部の石垣を積み直したようで、それに伴い土塀も築き直したようである。その際、瓦の不足分を軒瓦ではなく平瓦で補ったらしい。西半部の壁体・屋根は基本的に当初のままであったろう。

③ 第2次修理

土塀の傾斜を補正(根本的な矯正ではなく外観 上垂直に見せた)し、屋根を全面的に葺き替えた。 これ以後は壁表面が白漆喰仕上げであることが確 認できる。内側の足元モルタル塗りもこの時であ ろうか。今回判明した限りでは、築造以後最大規 模の修理工事であったと考えられる。

④ 近年の小修繕

壁の劣化に伴い、漆喰仕上げの部分補修を繰り 返して現在に至った。

以上、現段階で推測できる範囲で土塀の変遷を述べたが、今回の修理は非解体であったため確証を得るには至らなかった点も多い。将来の大修理の際に詳細な調査を行えば、土塀の沿革をより明らかにできるであろう。

5. 修理方針に関する提案

近い将来に修理工事を行う場合、どのような考え 方で対応するかという問題につき、調査結果をふま えた所見を列記する。

① 修理の規模

建造物の修理には、本体の全面的な修理に及ぶ 根本修理と、破損部のみを繕う部分修理がある。 近い将来の修理は、下記の理由により部分修理に とどめたほうが合理的と考えられる。

- (a) 土塀は本体が大きく傾斜しているので、耐震 補強が必要であろう。しかし、土塀内側の「下 代屋敷」の工事の振動や仮設物が土塀の保存に 影響する可能性があるので、屋根の工事が終わ ってから(または並行して)根本修理を実施し たほうが良いと思われる。
- (b) 土塀内側の足元は本来の石列に復元すべきであるが、そのためには地盤面を鋤き取る必要がある。しかし、地盤面旧高さの設定は「下代屋敷」の基礎復元とかかわることなので、屋敷の復元調査が完了する前に土塀のみを先行することは好ましくないであろう。
- (c) 現時点においては、当初の工法に関して未解 明の部分が多く残されているので、修理に着手 する前にさらに史料調査や技法調査を重ねるべ きであろう。

今回は土塀の延命と必要最小限の景観の保持そして古材の温存に重点をおいた部分修理とし、「下代屋敷」を復元する際に根本修理を計画すれば無駄がないと思われる。

② 修理方法 (案)

- (a) 基礎 一切手をつけない。ただし、内側の 劣化がこれ以上進行しないよう、雨水の排水処 理だけは行う(草を刈り、表土を薄く鋤きとっ て雨水を道路に流すだけでも効果がある)。
- (b) 壁体 各土層の温存に留意して、表面仕上 げの補修を行う。下地から浮き上がっている土 層のみ掻き落とし、クラックに砂漆喰等を詰め、 適当な剥離防止措置を講じて仕上げ塗りを行う。 仕上げを中塗りとする場合ははっ水処理を行う と効果的であろう。
- (c) 屋根 屋根だけは全面葺き替えの必要がある。現状の瓦を外す際に葺き土の調査を行い、 旧葺き方の確認をする。瓦は当初瓦を可能な限り再用し、不足分は当初瓦の形式にならって製作する。

A Document on the Restoration Work at the West Kamaeguchi (the Entrance Gate of Yamae-shuku) and the Mud Wall.

		8	
1	name of the building 建物名称	the west kamaeguchi(the Entrance Gate of Ya 西構口と土塀	amae-shuku) and the Mud Wall
2	classification 分類	an Important Cultural Property designated by t 市指定	he City Government
3	date of designation 指定年月日	23 June, 1995 平成7年6月23日	
4	location 所在地	5126, 5136 Oaza Yamae Chikushino-shi, Fuku 福岡県筑紫野市大字山家5126, 5136	oka Pref.
5	owner 所有者	MASATAKE Takashima, YOSHIO Kawakam 高嶋正武、川上義夫	i
6	type of building 建物種別	West Kamaeguchi(the Entrance Gate of Yam 西構口と土塀	nae-shuku) and the Mud Wall
7	date of the building 建立年代	Edo period 江戸時代	
8	material and structure 材料、構造	stone bace and mud wall 石積基台、土壁	
9	roof style and roofing material 屋根形式、葺材	gabled, pantile 切妻造、桟瓦葺	
10	dimensions floor area or living area 平面積	Kamaeguchi (the entrance gate of Yamae-shuku) 構口	mud wall 土塀
	一回復 north	0.963m²≒0.29坪	14.25㎡ ≒4.32坪
	(北側)	0.990m²≒0.3坪	7.56m²≒2.29坪
	south (南側)	0.990m =0.34	7.50III - 2.29±+
	length 長さ		
	north	1.75m	23.75m
	(北側) south	1.8m	12.6m
	(南側)	1.0	
11	outline of work		
	事業内容 type of repair	complete restoration	
	修理種別	復元修理	
	period of time 期間	September, 1996~January, 1997 平成8年9月2日~平成9年1月31日	
	cost		
	経費		
12	restoration and conservation report 修理工事報告書		
	date of issue		
	発行年月 author, editor		
	著者、編者		
	publisher 発行者		
13	history of restoration work		
	修理歴 radical restoration		
	根本修理		
	roof repair 屋根葺替		
	partial repair		
	部分修理 painting repair		
	塗装修理		
14	notes	complete restoration in 1996 ~ 1997.	
	備考	平成7年~8年 復元修理	

Ⅲ-7. 郡屋跡土蔵

筑紫野市大字山家の山家宿場郡屋(中の茶屋)土蔵(市)は、宿場用の草鞋や縄、木炭や蝋燭油などの旅宿用のものを保管する建物である。

近藤思川著『筑前六宿 山家風土記』(昭和40年 12月 思川建碑期成会刊)に「山家郡屋払不足草鞋 のこと」として次の史料をのせる。

請取

割 一銭 七拾三匁九分八厘 (下大利納分)

割 一同 弐拾四匁四分八厘 白木原納分

右ハ十一月三日御請求御納通りに間違の 儀これ無候

山家郡屋払不足之草鞋其後御掛合申置候処ハオ 被仰遣承知仕候何様山家ニ早々掛合被仰御知ら せ申遣候 巳上

大庄屋 良 七

「良七」は大庄屋近藤良七である。

土蔵は寄棟造りの茅葺の上に鉄板を被せる。腰に 自然石や切石を乱積みし、厚い土壁を重ね、大梁3 本を支える。これとは別に扠首を6組渡し、かつ両 端に3本の扠首組を付けて屋根を支える。梁と扠首 尻は10cm程ずれるが、丸太を扠首間に渡し、これに 東をたてて東尻を梁に納めて屋根を支える。

土台や柱、桁がないのが特徴で、中国大陸の乾燥 地帯に見られる日干しレンガの住宅を連想させる。

大きさは桁行13.71m、梁間5.13mである。正面中央左よりに1間程の出入口を設け、片引きの大戸をたて、右よりに半間ほどの竪格子5本のみの高窓を付ける以外開口部はない。内部は床を土間、化粧屋根裏で扠首構造を見せる。正面向って3本の梁のうち左側(南側)の梁は下端に柱穴が1.2m間隔に2個付いて、その中間にも約6cm角の角穴があって、いずれも突き抜けている。従って、一時壁でも付けて、間仕切りした可能性がある。

この土蔵は長崎街道の宿場山家のほぼ中央の郡屋 (水城家)にある。江戸時代参勤交代の際、大名達 の旅支度に利用されたり、街道の補修用具などを収 納したと伝えられる。宿場そのものは慶長16年 (1611)にできたらしいが、土蔵は17世紀まで遡ら ない。建立年代は幕末と思われるが確証はない。昭 和60年6月16日筑紫野市指定文化財となる。

尚、今回厚い土壁内に柱が埋め込まれているか否 かをレントゲンによって確認した。その結果、予想 通り柱がなく、灰屋のように土壁の上部に桁を置く こともなく、厚い土壁上に直接梁をのせていること が判明した。

以下にレントゲン調査(正栄建装株式会社による)の資料を掲載する。

まとめ

今回、筑紫野市山家宿場郡屋土蔵に於いて、土壁 内部の柱の有無、確認の為、柱が土壁内に埋まって いる可能性が有る梁の下、3箇所(フィルムNo.1~ 3)及び実際に木材が有れば、この様なフィルムに なる事の、確認の為(フィルムNo.4)、計4箇所を X線調査致しました(図1と2)。

結果として梁の下には柱は無く、土壁内にも石等 の混入は無い様に見受けられます。

理由としましてはフィルムNo.4 に見られる様に、内部に木材等の吸収係数の小さい物が混入されていると放射線は透過しやすくフィルムには黒く写しだされます。

 $N_0.1 \sim 3$ のフィルムは全体の濃度が均一(壁のクラックが一部写っている)である為、柱は無いと推定しました。

放射線透過検査報告書

工事名称又は製品名	山家宿場郡屋土蔵、土壁内部確認調査						
工事番号又は図面番号							
材質	土						
数量	4 箇所						
準拠する規格・図書							
検査年月日	平成10年9月22日						
検査場所	山家宿場郡屋土蔵						
判定者・資格No.	金子 真司 ND1 0538807-RT3						
撮影者·資格No.	金子 真司 ND1 0538807-RT3						

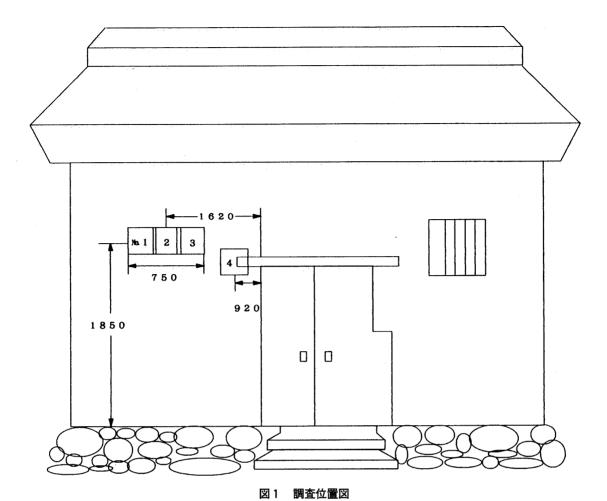
使用機材・材料

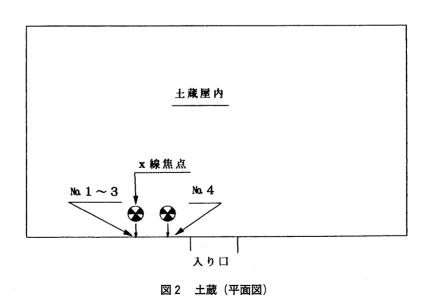
X線	製造会社·型式	アンドレックス スマート300					
装置	製造番号	A S - 1	焦点寸法	1.3×1.3 mm			
X線	フィルム	FUJI FILM# 100					
増感総	纸	SMP308					

撮影条件

撮影箇所	土壁厚さ (mm)	管電圧 (kVp)	管電流 (mA)	露出時間 (min)	焦点・フィルム 間距離 (mm)
土壁	480	300	3	20.0	1480

現	像	条	件	20℃	5分	





A Document on the Conservation Surveying Work of the Godown.

	Document on the Conservation our veying	
1	name of the building 建物名称	the Godown 土蔵
2	classification 分類	an Important Culturel Property designated by the City Government
3	date of designation 指定年月日	16 July, 1985 昭和60年 6 月16日
4	location 所在地	5161, Oaza Yamae Chikushino — shi, Fukuoka Pref. 福岡県筑紫野市大字山家5161
5	owner 所有者	Chikushino-shi(City Goverment) 筑紫野市
6	type of building 建物種別	the Godown 土蔵
7	date of the building 建立年代	half, 19th century 19世紀半
8	material and structure 材料、構造	mud wall and wood frame work 土壁、木造
9	roof style and roofing material 屋根形式、葺材	hipped, thatched and iron plate 寄棟造、茅葺鉄板被せ
10	dimensions 寸法 floor area or living area 平面積 width 間口(桁行) depth 奥行(梁間)	70.332m²≒21.31坪 13.710m (7間半) 5.130m (2間半)
11	outline of work 事業内容 type of repair 修理種別 period of time 期間 cost 経費	conservation surveying work 保存調査 April, 1999~March, 2000 平成11年4月~平成12年3月 1,000,000yen 金1,000,000円
12	restoration and conservation report 修理工事報告書 date of issue 発行年月 author, editor 著者、編者 publisher 発行者	
13	history of restoration work 修理歷 radical restoration 根本修理 roof repair 屋根葺替 partial repair 部分修理 painting repair 塗装修理	
14	notes 備考	conservation surveying work in1999 平成11年 保存調査

Ⅳ. 山家宿史跡整備工事

Ⅳ-1. 郡屋跡灰屋と裏門

西側の便所(下屋)は当初から存在してやりなお したものかも知れないので、今回も復元した。但し、 全て角柱をたてた。灰屋の床はメンテナンスを考慮 して、土間からモルタル敷きに変えた。

また、灰屋正面土壁上部に5寸角木を埋め込み、 梁受けとした。

裏門の扉は新造した。

平成5年度に(株)井上建設が解体工事を行った ことはさきに述べた(Ⅲ-3参照)。



1. 灰屋と裏門北面



2. 灰屋西面



3. 灰屋南面



4. 灰屋と裏門全景



5. 裏門東面

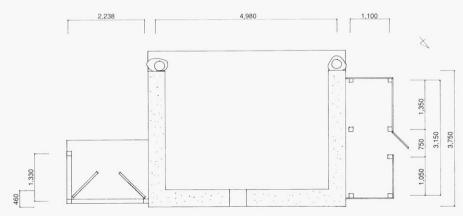
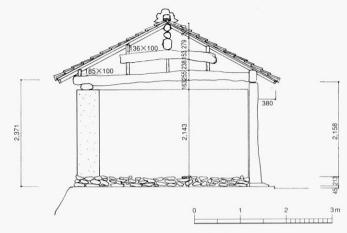


図1 灰屋と裏門平面図





6. 灰屋復元

図 2 灰屋梁行断面図

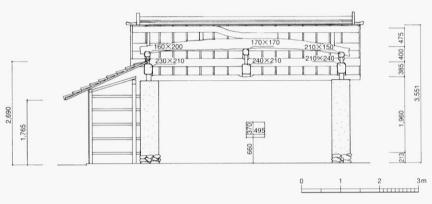
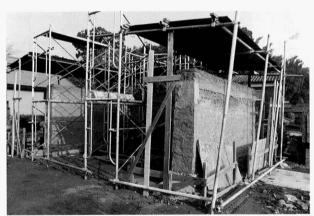


図 3 灰屋桁行断面図



7. 灰屋復元



8. 灰屋復元

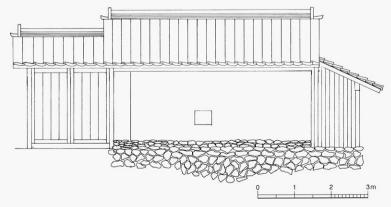


図4 灰屋と裏門北側立面図

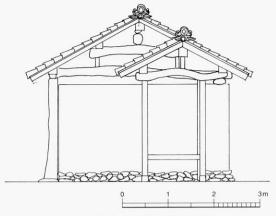


図 5 灰屋と裏門東側立面図

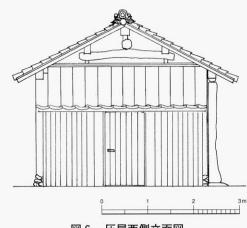


図 6 灰屋西側立面図



9. 灰屋北側石垣

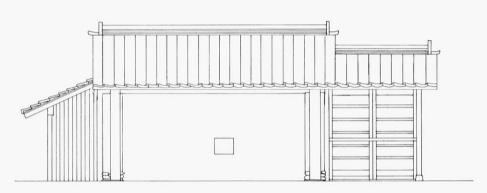


図7 灰屋と裏門南側立面図

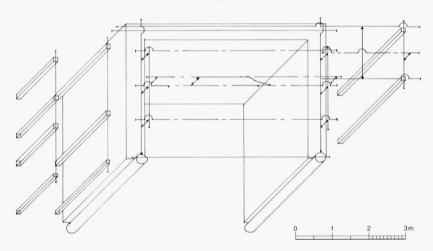


図8 灰屋と裏門架構図

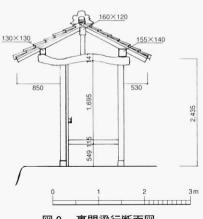
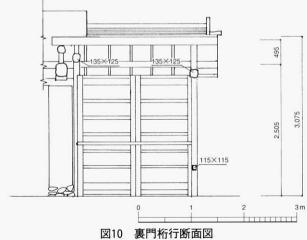


図 9 裏門梁行断面図



N-2. 郡屋跡土蔵



1. 全景



2. 出入口

郡屋の土蔵は宿場用の草鞋や縄、木炭や蝋燭油など旅宿用のものが保管されていたことは前に述べた。現在の土蔵は寄棟造り、茅型鉄板葺き、土蔵造り。4面に自然石4段、約1mを積み、上に幅50cm程の厚い土壁をのせて、4面に壁を構成する。その上に太い梁を3本渡す。床は土間、天井は化粧屋根裏である。正面中央間を出入口とし、厚い壁に内側に片引き板戸をたて、正面右側、右より約1mの所に幅80cm、高さ80cm程の高窓をあけて、木製竪格子を5本付ける。

梁や扠首は松材である。

郡屋と土蔵が現在のように整備される以前の本格 的調査は行われていない。しかし、平成2年度に外 壁等の修理が行われた。その時の保存修理工事設計 書を次に掲載する。



3. 出入口



4. 内部南面

1 建造物の概要

1-1. 指定年月日 昭和60年6月16日

1-2. 建造物概要

(1) 名称、所在地

名 称 山家宿場郡屋土蔵 所在地 筑紫野市大字山家5161

(2) 構造形式 桁行13.7m 梁間5.1m 寄棟 造 茅葺 (現在波子トタン葺)

1-3. 主要寸法

摘	要寸法
桁行両端	13.7m
梁間両端	5.1m
側壁端より	0.65m
布石上端より	2.8m
布石上端より	棟頂上まで 6.3m
側壁端よりの	面積 69.87 m²
-	所行両端 別 梁間両端 別 側壁端より



5. 内部北面



6. 出入口板戸



7. 高窓

2 工事の概要

修理方針 土蔵の壁が内・外部共にクラックが入ったり、張り出したりいたみがひどいのでこれを修理する。

3 工事仕様

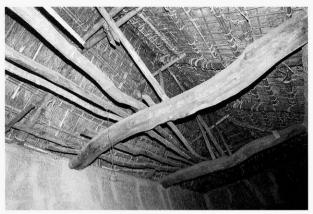
3-1. 通則

(1) 総則

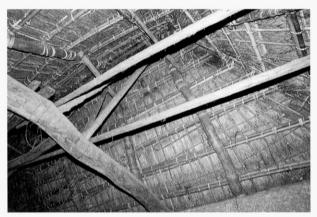
この仕様書に記載外の事項又は、疑問を生じた場合はすべて監督者の指示に従い施工する。

(2) 材料検収

一切の材料はすべて検査員が検査を行い合格



8. 小屋組



9. 小屋組

したものを使用する。

(3) 材料保管

使用する材料で検査員の検査に合格したものは、すべて良好な状態で保管し湿気・盗難・火 災に対して充分対策を講じる。

3-2. 仮設工事

(1) 構造

軒足代の構造は鋼管足場、継手クランプ繋結 とする。

(2) 材料

建地、控柱、布、筋違 …… 単管 $\phi48.6$ m/m ジャッキベース、クランプジョイント…JIS 規格品

歩み板 ……厚36m/m長さ3.6m以上の杉板 養生シート……合成繊維製、防災Ⅱ類 (3) 軒足代

建地は流し板工にジャッキベースを止め柱間2m内外とし軒先より1.2m外に建て布は1.8m、それより上は1.2m割り柵は軒先より約0.9m下に設け根太割は0.6m内外、歩み板0.9m以上に敷並べる。出入り不陸なく組立て要所、控柱、筋違方杖を取り設け補強する。

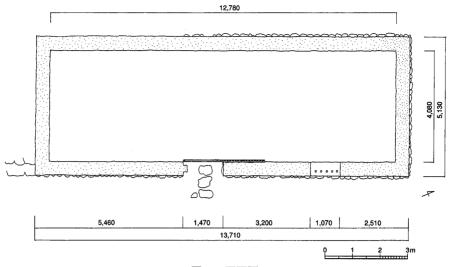


図1 平面図

(4) 危害防止

工事実施に当り危害防止及び衛生上のことに 関しては法規上必要とされる適当な施設を設け かつ防火対策を講じる。

3-3. 左官工事

(1) 補修壁土材

夾雑物のない荒土(良質粘土)に荒土1㎡につき8kg内外の藁苆(打藁)を長さ7cm内外をものを切込み水を加え、最低2ヶ月前に十分に練り合わせた練置土とする。使用に際してはさらにめ藁苆(打藁)に1㎡につき4kg内外を切込んで使用する。

(2) 繕い

(イ) 土壁の欠落部分

欠落している壁部分は15m/m目位の銅鋼を欠落している寸法より狭く切断し特別注文 した足の長いステンレス製の股釘で土壁に留付けその上に壁土を塗る。

(ロ) ひび割れの損傷部分

ひび割れ損傷部分は最少表面積の補修四角の穴に印を位置し深さ20cm程えぐり壁底を平らに均一にする。あらかじめ用意してある鉄釘長さ12cm位の頭にビニール縄を留付けておき、その釘を壁底に適当な間隔に打ち込む。補修壁土を直接壁底に塗り付けても、接着が悪いので壁底の口の大きさに入る寸法で割竹の小舞壁を現場で作成し壁底にはめ込み、最初に打ち込んだビニール縄の約半数で固定するが、その際壁底との間を約3cm程離しておき、補修壁土を半分程塗り、壁底を平らにし、その上に再度小舞壁をはめこみ、残してある

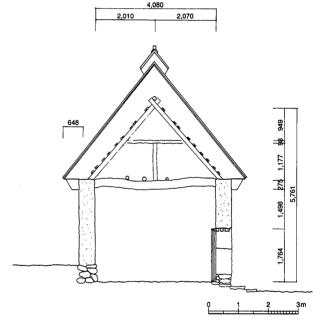


図 2 梁行断面図

ナイロン縄で固定し、仕上の壁土を塗り込み、 表面の仕上をする。

(ハ) 壁がせり出して表面補修の不可能部分 補修前に切石積の上壁取替部分の寸法を実 測し、前もってサイコロ型の土壁を作成し、 修理の際に、補修する壁土を取り除き新調し たサイコロ型の土壁を積む。

3-4. 雑工事

(1) 修理銘板

中10cm×長さ18cm×厚2.5m/mの銅板に工 事種別 施工年月日を陰刻し建物内、上部に銅 鋲留とする。

(2) 清掃・後片付

工事中は整理、清掃を行い、工事完了後は仮

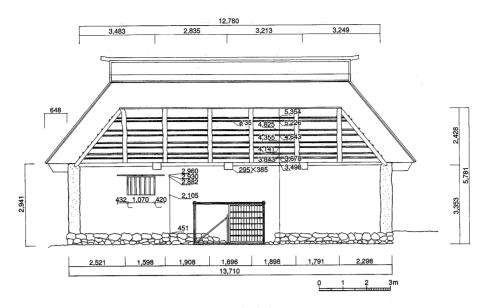
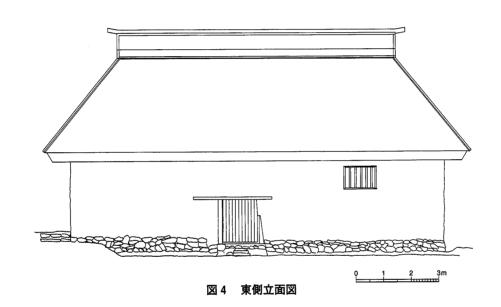


図 3 桁行断面図



0 1 2 3m

図 5 南側立面図

設物を撤去し工事区域内の残材を搬出し清掃後 片付を行う。

山家宿場郡屋土蔵保存修理工事設計書

工事名称 筑紫野市指定有形文化財

山家宿場郡屋土蔵保存修理

工事位置 福岡県筑紫野市大字山家5161

竣工期限 契約の翌日より平成3年3月21日

工事用地等

工事用地 山家宿場郡屋土蔵用地内とする

事故防止 施工物件は文化財として重要なもの

であるので請負人は火災、盗難、破損など事故の生じないよう十分に留

意し必要に応じて適当を措置をして

おくこと。

負担範囲 本工事に使用する機材、工具、消耗材料、電気、水道、電話等の設備、撤去、料金等は請負人の負担とする。また宿舎を必要とする時は業者の負担とする

工事写真の撮影・提出等

各工事工程について35m/mカラーフィルムを使用して撮影しサービス判で 焼付て、工事監督来所の折に提出する

材 料 本工事に使用する材料は特殊の場合を 除き、日本工業規格、日本農林規格に 適合するものですべて工事監督員の承 認を得て施工する

施工図 細部の施工図は請負人において作成し 工事監督員の承認を得て施工する

工事代金の支払方法

現場代理人の現場勤務

非常勤でも可。仕事の指示は現場代理人を通じ て各職方に指示を与える。適任者でない場合は 交替を依頼できる

工事完成保証人

同職種、同等以上の業者を1名あてる事

日報の提出

工事期間中日報を備え付け作業状況及び作業員 の出面、資材の使用状況を明細に記し、監督員 が来所の都度提出すること

契約後の提出書類

現場代理人届、下請人一覧表、工事着工届、 工程表、工事内訳明細書を提出すること

工事契約

筑紫野市財務規則による

№-3. 西構口と土塀



1. 西構口全景



2. 西構口西側

山家宿は筑前六宿と呼ばれた筑前国を通る長崎街道の宿駅の一つで、構口は山家宿の両端に設けられた宿駅の出入口で、当初は宿駅の東西両端に存在したが、現在は西構口のみ残されている。

構口は街道の両側に対をなして建てられ、袖壁状の形状を呈し、足元に石を積んで石垣を築き、その上に土塀を築いて瓦屋根を葺く。山家宿西構口の場合は両側に北側に下代屋敷の土塀、南側に町家の側面に続く土塀と一体をなす。筑前には六宿だけでなく、他の二十一宿にも存在したことが『筑前名所図会』に窺えるが、他の宿駅の場合、構口の内側には町家の正面が続き、構口は袖壁だけがたち上がるものであった。

筑前の構口は山家宿の他、木屋瀬宿西構口と青柳宿構口が残され、前者は北九州市指定史跡となっている。両者ともに基礎の石垣のみ残され、土塀は残されない。構口は筑後の宿駅にも築かれ、松崎宿には南北両端の構口が残され、小郡市指定文化財となっている。筑後の構口は道路の両側に方形の石垣を高く積み上げるもので、土塀が築かれたかどうかは不明である。



3. 西構口東側



4. 土塀内側

石垣上に土塀を築いた筑前国に固有の構口が残されるのは、福岡県下では山家宿西構口のみであり、 歴史的に貴重な存在と言える。土塀と一体となった 構口の景観も他に例を見ず、貴重な存在と言えよう。

但し、現在に伝えられる構口は幾度かの改修を経たもので、当初の姿を必ずしも伝えるものではない。 北側の袖壁部分は、南側に比べて立ちが高く、石積みも南北で異なる。南側の石垣は道路側に切石を3段積んで天端に平石を積むのに対し、北側の石垣は1段の切石上に1枚の平石を縦にたてる。北側の袖壁は明治期に復元されたと伝えられ、その際に積み直された可能性が高く、袖壁の出と高さも変更された可能性がある。

南側の袖壁部分は近年までの中塗仕上の旧状を留めていたが、近年に至って土塀部分とともに屋根瓦が葺き替えられ、土塀も白漆喰で仕上げられた。旧状の写真が残されるので、袖壁部分、土塀部分ともに旧状に復元することは可能と思われる。

北側の土塀部分は、築造当初は壁厚が薄く、屋根 瓦も片側1枚葺き、壁も中塗仕上であった。明治期 に東半分の石垣を積み直し、土塀を築き直し、さら にその後土塀壁面を垂直にするため壁を厚くし、屋 根瓦を葺き替え、壁を白漆喰仕上に改め、内側石垣 をモルタルで固めたと言う。

構口の当初の姿を残す部分は存在しないが、南側 袖壁と土壁、北側土塀西半分は、当初の石垣と写真 を残すので、旧状に復することは可能である。但し、 北側袖壁部分の旧状は不明で、北側土塀の東半部も 旧状は不明である。袖壁は南側と対を成すと考え、 土塀は西半分と同じ形式と考えれば、復元は可能だ が、根拠に欠ける。

この構口及び土塀を建造物としてみた場合、町並みを構成する一要素としての価値は認められるもの

 御見積書
 平成5年6月1日

 股
 は本本大字牛類317-10 株式会社サー上をおいる本名的の本土上をおいる本名的の本土上をおいる本名的の本土上をおいる本名的の本土上をおいる。

 上事名 高嶋郎土塀修復工事工事場所

 上記の通り御見積り致しましたから何卒御下命の程願上げます。

高	鳥邸土	:塀(修復	[工事	内	訳	明	細書	ř				㈱井_	上建設
番号	名	称	材質	形状寸法	数量	単位	単	価	金	額	小	計	備	考
1	仮設」	[事			1	式			139	587				
2	既存取	除き			1	式			154	729				
3	屋根二				1	式			895					
4	左官	[事			1	式			1,692					
5	諸 経	費			1	式			587	800				
	計										3,469	556		
6	消費税相	当額			1	式			104	086				
	合	計							3,573	642				
										-		-		

番号	名	称	材質	形状寸法	数量	単位	単	価	金	額	小	計	備	考
1	仮設	工事												
		損料		掛払い共	71.67	m	1	100	78	837				
	清掃	片 付			75	m²		810	60	750				
							l							
	小	計									139	587		
										<u> </u>				
2	既存耳	収除き					Ц							
							\dashv							
	屋根				24.35	m	2	_		352				
<u>_</u>	壁			(左 官)	58	m'	1	480		840				
	廃材	片付		療土及瓦	3.15	m'	5	250	16	537				
			L							_				
L	小	計		The second section is the second seco			<u> </u>				154	729		
					<u> </u>		L			<u> </u>		!		

の、単体としてみた場合、技法上、意匠上ともに特 徴に乏しく、築造年代も特定できず、建造物単体と しての県指定は困難と思われる。だが、歴史的には 貴重な存在であることは間違いなく、県指定史跡と しての価値判断を仰ぐべきかと判断される。

(九州芸術工科大学教授宮本雅明工学博士が、福岡県教育委員会へ1998年度に提出した所見を許可を得て掲載した。)

次に、西構口とそれに続く下代跡の土塀(北側) を平成5年度に修理した株式会社井上建設の見積書 等を記す。

番号	名;	陈	材質	形状寸法	数量	単位	単	価	金	額	小	計	備	考
3	屋根工	事												
	瓦	材		三洲瓦·役物共	15	m²	21	000	315	000				
	仕	譋		屋根工·普作貝·維材共	25	m	10	000	250	000				
	棟シック	٤		両面	25	m	10	800	270	000				
	小 運	搬			1	式			60	000				
	小	計									895	000		
4	左官工	事												
	荒 壁	付		材工共	58	m²	8	440	489	520				
	中塗	ŋ		"	58	m²	13	870	804	460				
	仕上塗	ŋ		"	58	m²	6	870	398	460				
	小	計									1,692	440		

番号	名		ī	材質	形状寸法	数量	単位	単	価	金	額	小	計	備	考
5	諸	経	費												
	717.25	/c: ÷n.	nte.			.		H		155	000				
	共通 諸		<u>質</u> 費	\vdash		1	式式	H			600 200				
\vdash	PH .	/性	貝			1	14	H		402	200		Н		
\vdash								Н		-					
	小		計									587	800		
						ļ		Ц			<u> </u>		_		
		計						H			 	3,469	556		
		ĦΙ						H			 	3,409	000		
-								H							
6	消費和	说相当	額									104	086		
											<u> </u>				
-			計					H			-	2 572	642		
	合		βĺ			-		-			 	3,573	042		

参考文献

- ·伊藤常足著『太宰管内誌(上巻)』(昭和44年3月 15日 歴史図書社刊)
- · 貝原篤信著『筑前國續風土記』(昭和48年9月30 日 名著出版刊)
- ·加藤一純、鷹取周成著『筑前國續風土記附録(上 巻)』(昭和52年10月27日 文献出版刊)
- · 奥村玉蘭著『筑前名所図絵』(昭和60年12月25日 文献出版刊)
- · 青柳種信著『筑前國風土記拾遺(上卷)』(平成5 年4月30日 文献出版刊)
- ·近藤思川著『筑前六宿 山家風土記』(昭和40年 12月20日 思川建碑期成会刊)
- ・山家村役場編『山家村の沿革と村勢』(昭和8年 3月18日 孔版)
- ・近藤典二著『山家郷土史話』(昭和29年5月 孔 版 昭和56年 福岡県文化会館電子コピー複製)
- ·『山家大根地』(昭和7年11月27日 孔版)
- ・松尾昌英著『筑前の長崎街道』(1992年3月31日 みき書房刊)

- ·近藤典二著『筑紫野の地方史』(1984年7月1日 葦書房刊)
- ·近藤思川著『筑前山家今昔』(昭和34年10月1日 郷土詩史思川叢書編輯所刊)
- ・桐山豪三著『筑前六宿の今昔』(昭和48年1月 福岡市医師会中央部刊)
- ・福岡県学務課編著『筑前の宿駅』(昭和55年11月 1日 福岡県文化財資料集刊行会刊)
- ·『福岡県近代史料編(五)』(平成5年3月31日 福岡県刊)
- ・白井浅夫他編『福岡県地理全誌 御笠郡』(明治 10年刊)を所収
- · 読売新聞西部本社編『新長崎街道』(昭和54年1月 新人物往来社刊)
- ・近藤典二著『筑前の街道』(昭和60年4月 西日本新聞社刊)
- ・筑紫野市史料編さん委員会編『筑紫野市史 下巻 近世・近現代』(平成11年3月31日 筑紫野市 刊)

その他、日記及び紀行文

Documentation on the Surveying and Maintenance on the Historical Site of Yamae-shuku Post Town (Part I) Report on the Surveying of the Cultural Property of Chikushino-shi

Contents

Pre	

Ι.	Outline of Yamae-shuku post Town
	1 . The Establishment of Yamae-shuku $\hfill 1$
	2 . The Constitution and the Function of Yamae-shuku $$
	3 . The Abolition of the Post Town and the Beginning of the Mail Service $\cdots \cdots 2$
${\rm I\hspace{1em}I}$.	Face the Maintenance on the Historical Site of Yamae-shuku Post Town
${\rm I\hspace{1em}I}.$	Survey of the Historical Site of Yamae-shuku Post Town
	1 . A Long Entrance Gate of the Big Squire $\hdots 6$
	2 . Gedai House
	3 . The Comport Shed and the Back Entrance Gate 45
	4 . Grain Storehouse 55
	5 . Heirloom Storehouse ······64
	6. Western Kamaeguchi (the Entrance Gate of Yamae-shuku Post Town) and Mud Fence ······74
	7. Godown
IV.	Maintenance Works on the Historical Site of Yamae-shuku Post Town
	1 . The Comport Shed and the Back Entrance Gate ————————————————————————————————————
	2. Godown
	3. Western Kamaeguchi (the Entrance Gate of Yamae-shuku Post Town) and Mud Fence90
Con	clusion 92

Documentation on the Surveying and Maintenance

on

the Historical Site of Yamae-shuku Post Town (Part I)

Report on the Surveying of the Cultural Property of Chikushino-shi

March, 2001

The Board of Education of Chikushino-shi

筑紫野市文化財調查報告書 第65集 山家宿史跡整備調査報告 I

2001年3月31日発行

- 編 集 筑紫野市教育委員会
- 監 修 九州産業大学工学部建築学科教授 工学博士·一級建築士 **佐藤 正彦**
- 発 行 **筑紫野市教育委員会** 〒818-8686 筑紫野市大字二日市753番地1
- 印 刷 株式会社 **昭和堂印刷** 〒812-0004 福岡市博多区榎田 2 - 2 -52 徳重ビル TE L 092-471-8200

Documentation on the Surveying and Maintenance

on

the Historical Site of Yamae-shuku Post Town (Part I)

Report on the Surveying of the Cultural Property of Chikushino-shi

March, 2001

The Board of Education of Chikushino-shi